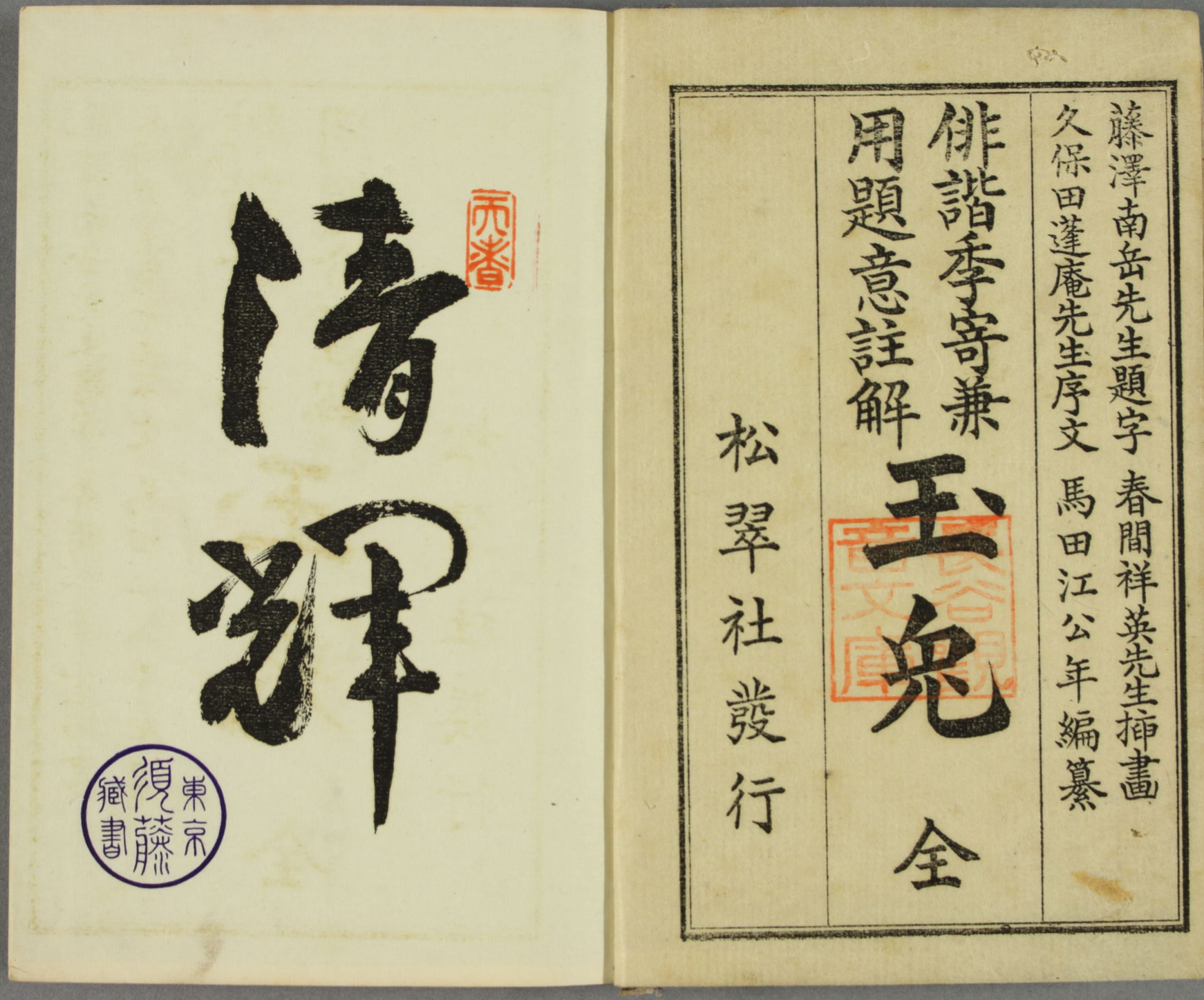
多海子清改

之之



藤澤南岳先生題字　春間祥英先生揮畫
久保田蓬庵先生序文　馬田江公年編纂

俳諧季寄兼用題意註解

玉兎

全

松翠社發行

東京須藤藏書

四海已南天春

春岳

序

このめ桜のとかくかふ山のく蘇きき
あそれる歳久野色ひらけるいは春
る紀をそのち千鳥雪ふるを一ふのの
なこの色ひ一枝ふる月ひかりそれ
ゑるおつるそれ玉兎を一面に雅伯の
さひ去ゑりをみのの家すそれ卯う
をかしそ我あやなを巷のきねもて

清まりて、こちの秋はこのけさうにて
なん、雲雀のと注釈とをかゝめてこの
世と雲の弱めつゝ社なるおくるゝ
らはこゝを拾ふ抜ふるに伝いとよ
まく、伝諧の集を端く時、恋歌は清き
俗句にまれ、歌のうゝのはすまあのぬ
こゝちをゝ清くをこゝなるてゝし合すれを
雲雲時のよわゝて詩文は無なおか

えむことこの花色の色青は清き彩な
ともれるたるを等しかゝんに中おこ秋
野の雲なみちは光まれと賞讃の
ことはを序はこの人てか久なむ

明治卅十二年夏　　董龍

凡例

抑本編は十有餘年前稿を起したれとも題の夥多なる意義解釋の繁に堪へす夏半にして匣底に埋め徒らに紙魚を宿らせたりしか精神一たひ到らは何事か成らさらんの格言に鑒み過る乙巳の秋より再ひ稿を續け漸く完了せしを以て庵中月次凌雲集なるものに附刷し來りたるをこたひ投詠諸子の需めにより全部刊行なすに至れり

一古く用ひ來れる季寄なるものは陰暦陽暦の差によりて大に變遷せるを以て本書編纂に臨みこれを改訂せんと欲すれともたとへは三月の部分を四月に移し以下これに準す

るときは十二月の部分を一月に及ほすの異動を生し却て索引者を惑はすの憾あり本編は素より題の意義説明を要とせしものなれは叨りに改竄を加へす

一祭禮法會の類現に舊暦を用ひて執行の向多けれは都て陰暦の月日を記す然りと雖も大祭日の類ひには特に新暦の二字を冠らしむ

一本編植物生類等にて傳説の疑はしきものは實物に就きこれを正し又神祇釋教の部分にて因由の詳ならさるものは其社司其寺院に文書往復して確説を掲けたり

一諸題中人の熟知せるものは註釋を輕くし意義解し難きものに重きを置くこれ本編の主眼とするところなり

一解釋は及ふ限り正確を旨となしたれとも四季通して貳千四百餘題の多き極めて誤謬なしとせす大方諸彦幸ひに發見あらは垂示を吝む勿れ

編者か積年句作の經驗より考案をたて編述せしものなれは聊にても斯道に益するところあらは素志茲に足れり

明治四十二暦仲夏

編者識

索引目次

歳旦之部　自壹丁　至六丁
一月之部　自七丁　至十七丁
二月之部　自十八丁　至二十五丁
三月之部　自二十六丁　至三十四丁
四月之部　自三十五丁　至四十七丁
五月之部　自四十八丁　至五十六丁
六月之部　自五十七丁　至六十六丁
七月之部　自六十七丁　至八十丁
八月之部　自八十一丁　至九十丁
九月之部　自九十一丁　至百丁
十月之部　自百一丁　至百八丁
十一月之部　自百九丁　至百十三丁
十二月之部　自百十四丁　至百十五丁
歳暮之部　自百十六丁　至百十九丁

但シ三月亘之部ハ毎季ノ始ニ屬ス

俳諧季寄兼用題意註解

玉兎

浪華　馬田江公年編纂

歳旦之部

新年　天地萬物改まり貴賤相應の例式を設けて祝ひ壽くを云

元日　改暦第一日なり元は大也始也と云ふに因る

三朝　歳の朝月の朝日の朝是を三朝と云

初鶏　元朝の一番鶏なり音調高く改年を報するか如し

初烏　元日の曉天に鳴渡るを云

若水　元朝汲むを若水と云包み井井華水井開は立春節に汲むことなり

初手水　都會の地に在て水道栓の輕便も田舍に在て振釣瓶の不便も元旦手洗ひ嗽きたる爽快は蓋し異なるところ非さるへし

初空　元日の一天を云一朶の雲も瑞氣の如く見ゆ

初日　元日の大陽を云光輝日頃に數倍の觀あり

初明　元日の曙光を云

年の華　物華新たなる歳首のさまを云

今朝の春　今朝の春は元朝をさして云

花の春　花の春は花さく春陽の始を祝ふの意御代の春は君か代の靜謐安泰を祝する意千代の春は代々の久しきを壽くの意宿の春は和氣洋々たる一家迎春の意なり

御代の春

千代の春

宿の春

初霞　山野共に年を迎ひて早既に淑氣の催すを云

初夢　大三十日の夜より元日の曉に至り見る夢を云

初東風　東風は五穀養育の意なり元日鷄明吹初るを云

四方拜　元日未明清涼殿東階前にて天皇四方を拜し給ふ事なり

朝拜　朝賀　奏賀　元日に群臣　天皇を拜し申さるゝことなり

小朝拜　朝拜の略儀にして殿上はかりの事を云

七曜御暦　日月火水木金土七曜の事を書たる暦なり是を元日の節會に奉る

星を唱ふ　星佛　天皇當年の星（本命）を七返つゝ唱へ給ひしことを云今民間に星佛とて祭るも其心はへなりと

院の拜禮　院の御所奏賀なり諸卿參集あり

氷の樣　氷の樣とは氷室の氷の厚薄寸法瓦石を以て其樣として奏するを云

國栖奏　應神天皇吉野へ行幸の時吉野の奥國栖と云處の者參りて醴を奉り其後毎年參内して笛を吹又は歌を諷ひしなりと

椒柏酒　椒酒　椒鵰　椒は玉衡星の精なり是を飲めは身輕く走らしむ柏は仙藥なり

若夷　元日の曉若戎等福神の札を賣るを云初戎と混すへからす

懸想文　元日未明より町々を賣て通る赤き袴立烏帽子なり是を購へは女の縁の目出度あるへきことを云

千壽萬歳　大和郡田箸尾両村両座あり所司の庭に來り鼓舞せしを云

萬歳　一條院の御宇大江定基三河守に任し其民に敎へて舞しむ是三河萬歳の始なりと

大黒舞　大黒天の姿を摸し注連の内門戸に來りて目出度き歌を諷ひて錢を乞

狙曳　狙を廻すことは昔時高貴の家に廐の馲をなしたるに始まる是馬櫪神と云ふ廐の神を祭るに因る

夷廻し　傀儡師の類にて年甫夷の姿をまねひ目出度きことを云ひ來るなり

春駒　年のはじめ馬を作りて頭にいたゝき歌ひ舞ふを云

鳥追　元日より十五日に至る迄笠を着白き手巾を以て面を覆ひ祝語を唱へ門戸に來りて米錢を乞

毬打　毬打は厚き板を玉の如くなして子供のこれを打て遊ふぶり〳〵とも云

破魔弓　弓は不祥をはらふもの故神道にて採物中に用ゆ故に破魔弓

破魔矢　破魔矢とも云一説唐の黄帝蚩尤を亡ほせしに其靈疫神となり民をなやませし故蚩尤が目を射破りしに起るとも云へり

庭竈　庭に新らしき竈をすへ藁を敷き一家圓座なすを云是家内の和合を祝ふの意なり

莇煎賣　糯米の粉を煎りしもの昔は元日家内に撒しことありし故賣しと云

料の物　両の物とも書く小土器の名あり開き豆開き牛房を盛る料となす

開牛房　ひらきて四つに盛る故に云

開豆　豆を水煮して雜煮祝ふ傍らにすへる

結昆布　むつみよろこんぶと云ふこゝろにて祝ふ

螺肴　泥中に生する螺なりにし肴と云ひて新年の用とす

押鮎　押鮎は塩鮎なり新年に用ゆ

海嬴の身　海中に生する螺の身なり倍の字を祝ひて用ゆ

腹赤　筑紫より御所へ奉る鱒のことなり

福壽草　元日に花開くを以て元日草とも云

稲積　元日の睡眠を云寝を稲とせしは祝語なり

初暦　暦ひらきとも云暦を見初るなり

年禮者　年禮は迎新の祝辭を相互其家に到りて述ることなり　禮者は廻禮の人を云

年玉　新年のたまものと云ふこゝろなるへしねんきよくと云ふは不可なり

御慶　年始の祝ひ詞を述るを云

年男　年越の豆を撒くより正月の儀式を勤る人を云

門飾　門松飾竹　門松飾竹松は千年を契り竹は萬代を契るものなれは年のはしめ門戸を飾りて祝ふ

幸木　木の小枝を折てそれに魚鳥菜菓を掛て竈の上に飾るさち木幸ひ木とも云

幸籠　一個の竈に供物を盛りて門松に結ふを云

菓盒子　菓にて編みたるもの其用幸籠に等し

注連縄　飾菓　注連縄といふものは左縄によりて縄のはしを揃へぬものなり左は清淨なる謂れ端を揃へぬは素直なるこゝろなり

松の内　門戸松飾を撤する迄を松の内と云

福菓　家庭に菓を敷は正月の神を祭り勸請する間不淨を除く心なり

飾海老　伊勢海老は其姿の目出度を以て賀祝のものとなす

飾炭　是を門戸に飾るは邪惡を避る意なりと

掛筵　軒又は内庭の口に新しき筵を掛るは年甫清淨を表する爲也

楪葉　親子草とも云ふ代々を讓り子孫長く繁榮の義をとりて橙楪葉と並へ用ゆ

掛鯛　鯛両尾を竈の上にかけるを云六月朔日下して是を食へは瘟疫痢病を避るると云

歳徳　恵方棚　年棚　歳徳神を祭るを云

門の神棚　在家の門戸に棚を搆へ神を祭るなり是門を司る神を祀り邪をさけるに因る

屠蘇　調藥を紅絹の袋に入れ井中に浸し元朝其袋を取出し酒に和してこれを飲めは瘟疫を病すと云へり

藥子　供御藥　天皇晝の御座に出御ありて藥子としていまた嫁せざる少女より呑ましめ其後銀盃に移して屠蘇を奉る是を藥子と云

蓬莱　三寶に供して新年を祝す　海老　昆布　榧　橙　穂俵　野老等をもり賀客に餅と大根橘を折敷にもりて祝ふこれを齒固と云

齒固　藁を一握り斗りに束ね米俵の形ちに作り神馬藻をさす是を穂俵と云ふ

穂俵

俵子　とらことも云なまこなりきんこ串子なと云ふ形ち俵の如し新年の祝に用ゆ

喰積　蓬莱に積重ねたる物を食ふと云説は誤りにて今の組重の類ひにて賀客饗應の具なり

小殿原　こまめ鰛　小殿原ハ武家の祝語なり

田作り　仝しく田作は農家の祝語なり

數の子　鮒の子なり多子の義にとりて祝ふ

大福　大福は点茶の名なり服の字を忌みて大福と云

太箸　年始の箸は折れさにるやうに太きを用ふ

雑煮　餅に大根芋其外種々を交へ煮る故雑煮と云

芋の頭　萬事頭になるこゝろにて祝ふ

鏡餅　年甫神に供ふる餅を鏡の如く圓くなす故名つくもちいかゝみとも云

若餅　三ケ日の内あらたに搗たる餅を云一説に小さき餅を若餅と云ふは小の字を忌てなりと

手鞠　年の始幼女の翫ひなり蓋し打毬に倣ふなるへし

羽子　胡鬼板はねつく此遊戯は幼兒の蚊に食はれぬ呪より始まると云

縫初　衣類の運針を試るを云

着衣初　年始衣を着初るを祝ひて云

ひめはしめ　諸説多し火水始正説ならん

馬乘初　騎馬を試むを云

藏開　和俗年始藏を開くを吉例とす

船乘初　船に注連を飾り水主を揃へ凡十段斗り乘出し又漕戻すを式とす

蹴鞠始　飛鳥井難波両家にあり

松囃子　昔は公武両家正月二日謠初式あり凡十五日迄之間大に唱謠し皷舞す是を松柏子と云

謠初　謠曲の内目出度きものを撰みてうたふ

舞初　舞は舞樂始なり

籟初　篳篥　尺八　簫　の類

書初　吉書　年甫の試筆を云

彈初　琴　琵琶　三味線の類

福引　餅の異名を福生果と云故に餅を二人して引あふことあり寶引福引是に始ると云

初商賣　初二日を例とすれとも商家によりては三日四日もあり

裏白連歌　連歌四枚の懐紙を中古誤りて一枚を書落したるを例とし五枚となして裏白と云

三物連歌　發句より第三迄を版行して賣しを云

三物俳諧　三物連歌に仝し

御降　三ヶ日に降る雨雪を云

掩門戸　元日民間門戸を掩ふは福神を出さぬ爲なり

水祝ひ　舊冬新たに妻を迎へたる男に水を祝ふとて其家に至りて水を浴せることなり

去年今年　去年今年は歳旦なり今年とはかりは句によりて歳旦となる

宵の年　宵の年は去りし年といふに仝し

三ヶ日　註に及はす

春異名

青帝　青帝は春の神なりと楚辭に見ゑたり

青皇　青皇も春の神なり青皇恩澤無窮限なと丶詩に作れり

東君　東君は日の神を云

勾芒　勾芒は木の神を云

蒼天　蒼天は氣のはしめて發し色蒼々たるを以て云

青陽　青陽は天地の盛德春は木にあり木の色青きを以て青陽と云

花蓋　花蓋は夏侯堪か賦に春可樂兮綴雜花以爲蓋と云ふより出たり

一月

乾坤

睦月　親屬舊知ともに來往なすを以てむつみ月と云

謹月　正月を謹月と云ふは始を謹むの義なり

太簇　太簇と云ふは春の陽氣に萬物すゝみ生する心なり

陬月　陬月とは寅の位を取りて云

暮新月　暮新月と云ふは年暮て新しき月と云ふ意なり

太郎月　太郎月といふは人の子のはしめに生れたるを太郎と呼ぶ故月の頭になそらへて云

初子の日　此日野邊に出て小松を引く小松引の條見合すへし

卯杖 卯槌
乙卯の日杖を大内に献せらる邪氣を追打つ義なり卯槌は糸にて飾り仝しく邪氣を拂ふ糸所より仝日献すると云

六日年越
七日式日なれは今日を六日年越と云

人日
正月七日を云一日を鶏とし二日を狗とし三日を豕とし四日を羊とし六日を馬とし七日を人とす

七日正月
七草の羹を焚き嘉儀とす

歳旦開
俳家にて正月吉日を撰み門人よりよみ來りたる歳旦の句を集め席をひらきて句の次第を定むるを云

十四日年越
十五日式日なれは今日を十四日年越と云

延年講
十四日の夜知友家族など打寄徹霄す俗によねん講と云

上元 花燈夕
正月十五日を上元と云ひ七月十五日を中元とし十月十五日を下元とす唐には燈籠を多くともして賑しきこと本朝中元の夜の如し是を花燈夕と云

粥杖
粥の木にて女の尻を打ては男子を産む呪ひなりとて打を粥杖と云

粥柱
正月七日又は十五日粥に入るゝ餅を粥柱といふ

藪入
走百病とも書く正月十六日男女とも山林に遊ふ等隨意にす奴婢は我宿所に歸る

注連内
元日より十五日迄をしめの内と云注連かさりある日數なれはなり

綱曳
綱ひきとて大綱を引あふて勝負をつけ其の年の吉凶を知ることなり諸國に行はる

左義長
爆竹 とんと 吉書揚 正月十五日清涼殿にて其式あり地方各神社にも行はる

廿日正月
今日鹽魚の骨に大豆を交へ煮て祝ふ故に骨正月とも云

鏡臺祝
正月廿日なり此日祝ふは廿日と初顔字音仝しき故なりと鏡臺に供へし餅を食ふことなり

店卸
商家にて前一ヶ年の收支勘定をなすことなり

帳綴
商家年中の賣物買物を記し置く帳簿を綴る帳書帳祝ひとも云

傀儡師　西の宮戎の神年の始衆生に笑ひを強いさせ富貴を守らんとの託宣にて西の宮より國々に出る

春永　初春より三春の季永きを云

凍解　土中の凍春陽にゆるむを云

氷解　池澤の氷春暖にとけ初るを云

餘寒　春になりて寒さ強きを云

冴返る　春暖催したる後再寒きを云

殘氷　山蔭などに春至りて殘れる氷を云

殘雪　峰谷蔭などに殘れる雪を云

春の雪　是迄か〳〵とて春の雪といへる古人の吟題意尽せり

雪解　山々の雪とけて溪川などの流れ俄に水嵩まさる体を云

雨水　雨水は雪散して雨となる季節をさす

以下三月亘

春の月　春の月夜なり郊外林間などの逍遙を趣味ある意とす

春の海　平穏にして霞めるさまなど題の本意なり

霞　春時空中朧にして曇るか如くなるを云

春かすみ　霞のあみは霞を見立て云

八重霞　霞くむは仙人の酒を流霞と名つく故に云

かすみ網

汲

鐘霞　春陽鐘聲の霞むか如く聞ゆるを云

鐘朧　右に仝しけれと鐘朧は夜体なり

長閑　春暖の天候人心と共に長閑なる意なり

麗　山野海川春色充滿の好晴を云

暖　殘寒退き春和來るを云

陽炎　陽炎糸遊仝物二名にて春氣地よりのほるを陽炎と云ひ空に

糸遊　ちらつき又降るを糸遊と云

春の水　雪解の候澤中に滿ち又は路傍なと長閑に流るゝ体を云

水温む　春陽を迎ねて水あたゝかなるを云

永日　遲き日　暮遲しとも云春日遲々たる意

佐保姫　春は佐保山の神より事起りて佐保山の霞の色によせて春を司る神を云

春色　芳景四方に滿るを云

山笑　春山いまた茂らす笑ふか如きを云

東風　春晴適順の和風を云

春風　春風は山野の行樂又は旅情を促す如く吹体を云

風ぬるむ　凄氣去りし春陽の風を云

春雨　春雨は降續きて眠たきを意とす

木地爐緑　茶人爐開より冬中塗緑を用ひ春に至て木地となすを云

春の宮　春の宮は大子東宮の御事なり　吳竹の園よりうゝる春の宮かねても千代の色は見わにき此歌の意にて知るへし

霞の洞　仙洞御所又は仙境をも云

萬春樂　萬春樂は踏歌の曲にて八句の詩なり是を漢音にうたひて句毎の間に萬春樂と唱ふるなり

春鶯囀　是も踏歌の曲なり天長寶樹樂と名つく

梅枝諷ふ　是も仝しく踏歌の曲なり

青柳諷ふ　右に仝し

春からぬ　月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我身ひとつはもとの身にして此古歌を意とす

春知らぬ　身に憂きことなとある人の春なから春とも知らぬといふ意なり

春に逢はや　春に逢はんと云ふこゝろなり

植物

小松引 子の日野邊に出て小松をひく小松は千年の壽あるを以て行末を祝ふこゝろなり

子日松 正月七日祝ふ處の羹に用ゆる爲これを摘む

七草 芹、薺、ごきよう、はこべら、佛の座、すゝな、すゝしろ なり

薺 七日の羹薺を主とす郊野に是を摘む

若菜 七種の若菜を略して七若菜とも云 雪間を分けて野につむ体多く歌によめり

磯若菜 磯邊の若菜なり

水入菜 洛の近郊畦の間に水を貯て作る是を水入菜と云

芹 水邊に生す其根白し故に根白草と云

ゑぐ ゑぐは芹の異名なり

摘嫁菜 二月莖を生す摘て食ろふよめかはきとも云

鶯菜 かふら苗二三寸になりたるを云

萌 冬枯たる草の春の氣によりて下より兆し出すを云

下くゝたち かぶらの苗なり本草に春は苗を食ひ初夏に心を食ふこれを薹子と云

ひこはえ 草木の伐株より芽の生するを云

土筆 筆つばなとも云土を抽て二三寸の頃形ち筆の如し

芥子若葉 九月種を蒔き春に至りて苗を生す

蕗の薹 土を去ること一二寸重々として薹をなすを云

片栗の花 形ち百合に似て花紫なり

若艸 新草初草春生ゑそむる草の總名なり

野大根 野蘿蔔土中にあるを堀人大根と云

木の芽 木の芽もやしと云春の氣の發動によりて芽立つを云ふ

梅 白梅 野梅 大梅 鑓梅 等種類多し

異名

氷姿　氷肌　玉瑞　玉肌　士渇　逸民　雪魂　清容

松の花　木母　花魂　參疑紫　花儒者　好文木　春告草　匂草

一二月はなくきを抽すること三四寸これを松の花と云

十回の花　十かへりの花は百年に壹度又は千年に壹度松に咲くよし云へり

畑打　畑かへす田をかへす田をすくいつれも土をならしすき返すことなり

以下三月亘

柳　青柳　はこ柳　こふ柳

異名白綿　点花　弱草　樹聖　風見草　根水草

春すゝき

はこ柳は圓葉の柳なり　こふ柳はまる葉にて山谷に多し

椿　玉椿　列々椿　伊勢椿等種類多し

野老　つる葉とも薯蕷に似て小白花を開き青き實を結ふ其根を食用に堀る

山葵　山中の水近き處に生す人家にも作る二三月芽を生す

慈姑　淺水中に生す一根歳毎に十二子を生す慈姑の諸子を乳するが如し故に名つく

苣　三四月苗を生す茹て食用とす

はうれんさう

獨活　波斯草　赤根草とも云孟春生して四月莖を起す莖に就て碎紅花を開く

三葉芹　此草風を受て動かす風なくして自ら動く故に名つく

防風　二月苗を生し發生して三ッ葉を付く

山にんしんと云海邊にあり若き時酢味噌にて食ふ五月花を開き實を結ふ

生類

猫の戀　春秋二度交る春は牡より牝を呼び秋は牝より牡を呼てつるむと云

白魚　鱠殘魚　銀魚と云江海に生し立春の候出つ人是を賞す

魚氷に上る　春氣の發動に乘し潑溂氷に上るを云

以下三月亘

百千鳥　諸鳥山野の春陽に飛翔し或は囀るを云

鶯　唐土の鶯は大きさ鳩ほとあり羽毛黄色なる故黄鳥とも黄鸝とも云ふ日本の鶯は形ち小なれとも音調多く異ならす　異名　商庚　楚雀　博黍　容鳥　谷鳥　黄公　百喜　倉庚　花見鳥　匂鳥　春告鳥　とゝめ鳥　經よみ鳥　歌よみ鳥　きなこ鳥

駒鳥　大きさ百舌鳥ほとあり其聲馬の轡を鳴らすに似たり故に駒鳥の名あり

鸞　琴彈鳥　形ち鶯より大にして黑く鳴時聲に隨ふて両脚をあけて琴を彈如し雄は晴を呼ひ雌は雨を呼ふ照うそ雨うそ此名による

雲雀　告天子と云褐色鶉に似て小さし日晴るゝの意にて此名あり日晴る時は高く上りて啼く

鳥囀る　春和諸鳥の囀るを云

水鳥囀る　水禽の囀なり

鳥交る　鳥の交尾を云

鱒　鱒は好て獨行す江鮭に似て小なり網をのかるゝことをよくすと云

鰆　春盛に出るを以て鰆の字を用ゆ

子持沙魚　虎沙魚衲沙魚等種類多し春月子を孕む

蜆　蜆は江州瀨田を最上とす字又顯に作る

蛤　泥中の蛤を取るこれをにじるとも云

あさり貝　蛤に似て小さし灰白色紫斑黑斑等の類あり東海に多し

馬刀　海泥の中に生す長二寸斗りにして大さ指の如し両頭を開く

衣食

薺粥　正月七日薺の羹を食せは万病を除くと云

鏡開　正月七日又は十五日鏡餅をはやして食ふ切るは忌詞ゆへひらくと云

具足鏡割　元日具足に備へし餅をはやして食ふを云

節振舞　朝節　夕節　とて親戚知友來往して賀宴をなすを云

町汁　正月十日町會所に一汁を設く喫し終れは法令を讀て聞かしむ是を町汁と云

小豆粥祝　正月十五日小豆粥を煮て嘉儀とせり

鶴の庖丁　正月十七日禁中にて大隅高橋の両家隔年に是を勤めしと云

廿日團子　廿日團子とて小豆の團子を食することなり

干蕪　冬至以前軒に掛て乾せしもの春月煮てこれを食ふ

干大根　右に仝し

子日衣　何にても子の日遊ひに着用の衣を云

柳衣　柳衣は表白裏青

梅花衣　梅花衣梅かさねとも云表濃紅裏紅梅

以下三月亘

酢蛤　蛤を酢に和し膾になしたるを云

青ぬた　芥の葉の青きを酢に和し魚膾を交へたるものをこれを青ぬたと云

木の芽漬　鞍馬より製して出す通草を漬たるものなりと云

干鱈　鱈の干たるもの色白きを上とし黄なるものを次とす

目刺　竹串を以て白魚の目を貫き相聯ね乾燥なしたるもの勢州桑名にて專ら製す

山椒皮　椒樹外面の皮を削り去て用ゆ其味辛し

鹿尾菜　海中に生す形ち鼠の尾の如く黑し

若和布　石蓴とも書石に付て生す色黑し

海雲　形ち亂糸の如く色青黑く滑なり

海苔　青海苔　甘海苔　淺草のり　櫻海苔　於期のり　其他種類多し殊に淺草海苔は東海の名產とす

神釋

祇園削掛　元朝未明祇園の社にて松の木の削掛にあたらしき火を切りて大福雜煮の爲に用ゆることなり洛中洛外より此火を受に參詣の輩他人のことを恣に口を極めて罵ると雖も爭はす恨みす是懺悔の義なるへしと云

毘沙門功德經　毘沙門天は福の神なり昔は陰陽師の輩元日民家に來り札を納め經を唱へ跡は目出度きことを云ひしと

船玉祭　正月二日船に酒饌を供し船神を祭るなり

天狗宴　正月二日愛宕寺の牛王加持なり京都淸水寺の西にあり今日弦指客殿に集まりて各宴飲す宴終て寺僧門扉に牛王の符を貼して惡氣をはろふの謂とす轉供酒盛の音を換て斯く云ふならん

玉せり　正月三日筑前筥崎八幡宮にて玉せり執行あり珠は陽と陰の二顆ありて諸人社前より海岸迄の間陽珠一個をせりあふ此珠を抱き當たるものは其年の幸福を得ると云ひ傳ふ仝社にては玉取祭と云へり實に一奇觀なり

箕面の富　正月七日攝州箕面の辨天に賽人來りて堂上に集り寺僧長き錐を以て富をつく今はなし

初寅祭　春下し　鞍馬山初寅詣は春を繩にて釣下し錢の多少に應し燧石を附與す是を春下しと云

鷲換　正月七日筑紫太宰府天滿宮神前に供へたる木彫に金箔を附せし鷲を神官參詣の衆人中に持來りて一人に授與す諸人仝形の鷲を購ひて互に換合ふ元授與せし鷲にあたりたる人其年の幸福を得ると云

住吉初卯　正月初卯の日攝州住吉神社に參詣する人殊に多し

榮摘川神事　大和芳野勝手明神の社毎年正月七日神人及氏子の男女此川邊に至り若榮を摘み勝手御前の神供となして祭をなす

御齊會　正月八日より十四日迄大極殿にて最勝王經を講し朝家を祈り奉り申すなり

御修法　正月八日より十四日に至る間紫震殿に於て修行あり是をみしほと云

大元師法　正月八日より十四日迄治部省にて行れし祈事なり師の字を讀ますたいげんの法と云

嚴嶋祭　藝州嚴島祭禮毎年正月下亥の日なり

居籠　正月十日攝州西の宮戎祭村民九日より門松を逆さまになし戸を閉て出すこれを居籠と云夜中戎の神騎馬にて仝地を巡らせ給ふ故なりと

初戎　正月十日戎神社祭禮大阪今宮殊に賑し

常陸帶　正月十日常陸國鹿島明神の祭日男女の名を布帶に記し社人是を取結ひ繫かれたるを以て婚姻を定むると云

住吉御弓　正月十三日なり其式は社人正鵠に准へし尺三寸の的を立て射る勝負を論するに非す神事なり

三保祭　正月十五日駿河國御穗神社祭禮なり參詣の人昔より馬を參らすることにて多く牽來ると云

遊行札切　一扁上人熊野權現より請られし遊行代々相傳の六字に名号の印を押るゝことを云

獅子頭神事　正月十五日より十七日迄伊勢度會郡山田鄕八社の神体獅子頭の祭禮なり

厄神參　正月十五日城州八幡宮へ參詣して蘇民將來の札守を受くこれを八幡の厄神參と云

長谷だゝ押　大和長谷寺觀音正月十八日參詣人群集して廊下を踏鳴らし押合ひてのほるを云

吉田清祓　正月十九日京都吉田の社にて厄神を拂ふことなり神樂岡に拾六本の幣を立て神祇宮亥の刻に修行せらる

御忌　法然上人の忌日なり正月十九日より廿五日迄京都智恩院黑谷白萬遍各本山にて法事執行せらる

初天神　正月廿五日京都北野東京湯島大阪天滿天神祭日參詣多し

初不動　正月廿八日緣日諸國とも參詣人多し

初庚申　正月庚申の日各寺庚申堂賽人多し

初甲子　正月甲子の日大黒天祭詣多し

繪踏　肥前長崎五島大村平戸にて衆人に切支丹の像を踏せるを繪ふみと云ふ邪宗を禁せしによる

公事故事

二宮大饗　正月二日にあり二の宮と申すは東宮中宮の御事なり公卿以下二の宮にて饗に就るゝを云

臨時客　正月二日攝政關白の家に大臣以下の公卿を招きて遊ひ給ふなり定まれる公務に非されは臨時客と云

朝勤　天皇年の始の壽として上皇へ行幸あらせ給ふ御事なり

叙位　正月五日六日諸臣の功勞を奏して爵位を賜ふなり

白馬節會　正月七日禁中にて白馬を御覽あり馬は陽の獸なれは春は白きもの青く見ゆる故あを馬の節會と云

女叙位　正月八日女の位階を叙せらるゝ事なり

女王祿　正月八日女王に祿を給ふことなり王祿と唱へて女の字を略するを口傳となす

御弓の奏　正月七日の節會に兵部省より御弓を奉る御弓の丈七尺五寸なり是をみたらしの奏と申す

外記政始　外記は恒例臨事の政事を執行ふ官なるゆへ正月には先つ當年の政事を行ひ始むる義なり

縣召　縣召除目と云正月十一日より十三日迄三ヶ日行はるゝなり

御薪　アカタとは郡國を申す諸國の司より任官せらるゝ故斯く云正月十五日左義長の爲百官悉く薪を奉り宮内省に納むこれをみかまきと云

踏歌　男踏歌正月十四日にあり殿上地下四位以下の輩御殿の然るへき處を巡りて催馬樂をうたひかなでるなり女踏歌仝十六日の夜なり昔京中の男女の聲うるはしくよく歌をうたふものを召れしためしもありと

かさし綿　踏歌に綿の作り花を額につけるを云

舞御覽　正月十七日禁裡にて伶人の舞御覽あることなり

内宴　正月廿一日仁壽殿にて行はる文人に題を賜はり詩を作り御前にて講せらるゝを云

葭灰飛　立春の日蘆の葉の灰を律管の端にもり置けは春氣至る時其灰自ら飛ふよし事文類聚に見ゆ

春盤　生菜　立春の日生菜を食ふ新を迎ふる意による此日春餅生菜を贈答するを春盤と云

五辛盤　生菜春盤なとも又菜盤と云芹等の生菜餅なとを盤に盛りて相贈りしより斯く云　本章綱目に　葱　蒜　蓼　蒿　芥是を饌ふを五辛盤と云

桃符　桃板　桃梗　皆仝し　桃の木を削り符を書くこれを仙木と云百鬼恐るゝ處なり是を元日に立て邪氣を防くなり

神荼鬱壘　二神の名これに象り桃板を門戸の上に立つ桃符と仝しく元日凶鬼を拂ふ呪なり

畫鷄　元日鷄を畫きて戸上に貼り置けは百鬼恐るゝと云

葦索　畫鷄の上に掛る索は葦を以て作る依て葦索と云

天穿　正月廿日唐の江東と云ふ處には今日紅の糸にて煎餅を繫き屋上に置く是を天穿又は補天穿とも云天に供する意に出たるものなりと

二月　乾坤

きさらき　正月は長閑なりしを此月冴返りて衣を更に着るこゝろにてきさらきと云

仲春　仲春はなかなり

夾鐘　夾鐘は律の名なり夾は百の物顯れうかみてそれ〳〵の種を分るなり

小草生月　小草生月　梅見月　雪消月　いつれも名の如くにて別義なし

梅見月

雪消月

二日灸　二月二日　灸するを云此日灸すれは諸病を未發に防く効ありと云へり

朧月　春氣の發生により朦朧たるを云

初雷　虫出し雷とも云はしめて聲を發すればなり

貝寄風　二月十九日四天王寺聖靈會の造り花に付る貝を住吉の浦へ取に行く此日其貝住吉の浦によるを以て貝寄風と云是龍神より聖德太子へ捧るものと云ひ傳ふ

芝居二の替　新年より二回目の興行を云

出代　奉公人の出代を云

社日　立春後第五の戊の日を春社と云ひて農家是を祭る云此日の雨を社翁の雨と云

社翁の雨

花朝　二月十五日を花朝節と云熙朝樂事に二月十五日を花朝節となし八月十五日を月夕となす

凧　烏賊幟とも云始て作りたるもの烏賊の形に似たるものなりしより此名あり

春分　大寒の後十五日を春分とす

驚蟄　地中に蟄伏せる諸虫春分の氣に發動するを云

袋洗　釀造に用ひし處の酒袋を洗ふを云

百日男歸　酒造家に雇はれたる男の故郷に歸るを云

植物

初花　初めてひらく花を云途次思はす見出たるさまなとを意とす

花待　花の咲出すを待意なり

花催　山野ともに時めきて花咲出んとする季候に近よるを云

初櫻　凡櫻の初て開くもの單山櫻の類なり

糸櫻　枝長く糸の如く下り垂る彼岸櫻より花稍遲し

彼岸櫻　花小さく白くして單葉彼岸の候ひらく小櫻とも云

姥櫻　此花枝上葉なきか如し老婆に譬へて斯く名つけしとそ

兒櫻　山櫻の一種にして紅色を含みて愛らしきを以て名けしとそ

紅梅　花紅色にして杏の如し香も又杏に似たり

未開紅　紅梅をさして云咲さる時も紅なるを以てなり

座論梅　花淺紅なり葉多く實は枝毎に四五顆むらかりて鈴なりとなる恰も人の座を爭ふに似たり依て此名あり

黄梅　正月に黄花を開く迎春花と名つく

接木　梨を接くは春分前十日柿を接くは春分の後十日をよしとす と云へり

杓杞　春苗を生し葉栢榴の如く和らかく薄し是を摘て食す

五加木　文章草　八角茶　五佳　と云一枝に五葉あるをよしとす若葉を取て食用とすウコギとよむ

接骨花　ニハトコとよむ春小白花を開く年經るものは實を結ふ

銀杏花　二月花をひらく青白色なり樹梢高ければ人これを見ること稀なり

苗代黄　二月實を結ふ大さ粟の如し

苗代　籾種を仮田に蒔て發生せしむるを苗代と云

種蒔　舊穀の種を水に浸し彼岸前後に取出して水田に下ろすを云

種　種ひたし　種井は種をひたす井なり

菜の花　菜種は花四瓣黄色滿野黄氈を敷たる如く春興是か爲に深し

薺の花　護生艸三絃草と云小白花をひらく

大根花　二月の末高く薹を抽て小花を開く紫碧色なり

若紫　紫草と云日に向てひらく莖赤く節青し紫白色なり

虎杖　三月苗を生し七月花を開き九月實を結ふ莖筍の如く斑点あり

草芳　春草を弱草又芳草と云

水葱　葉澤瀉に似て小く花青白色蒸して食用とすミナギツミと云

蕨摘　紫塵　初生葉なき時是を食ふ小兒の拳の如し

狗脊　苗青色高さ一尺斗に至れは莖葉齒朶の如く色黑く狗の脊に似たり

蒲公英　俗に藤菜又鼓草とも云たんぽゝは鼓草より出たる名なるへし

蓮根堀　蓮根は堀て食用とす

西瓜蒔　西瓜種を蒔くを云

さゝけ蒔　春分後貯へ置し小角豆を蒔を云

青芥　菘に似て柔毛あり葉深青これ常に用ゆるからしの原草なり

杉菜　此草杉に似たるより此名あり土筆の地下莖より出る

松　一名　塩蓬水傍濕地に生す葉蓬に似たり

百合根　百合根は衆瓣を以合成す或は人の病を治す故百合の名あり

菊根分　穀雨の候根を栽替るを云

菊苗　古根より生する苗を云

藪蕎麥　林中に多く生す葉苧の葉に似たり葉の際に十餘花あり淡紫色なり

角組蘆　あしの角　あしの錐　蘆の芽生は牛の角の如く小なるは錐の如し

蓬摘草　若き蓬を採て餅に和し食用となす爲是を摘む

摘　春は郊野の雜草を摘むを婦女子の一興とす

鬘草　三月苗を生して其葉二三寸麥の葉の如く叢生す女兒是を採り髮に結ふまねひをなす故に鬘草の名あり

燒野　枯たる雜草の類ひ一掃なす爲に燒く

未黑芒　スグロの芒とよむ春の野の燒けたる跡に生ゐたる墨黑の畧なりと云又未黑の畧なりとも云

苅生の芒　苅たる古根より生立つさまを云

切生の芒　切生の芒も前註に異ならす

荻若葉　荻の初生蘆の芽の如く生し漸く葉の形ち分れたるを若葉と云

萩若葉　苅株より叢生して繁殖するを云

馬蘭花　花は根元に接して開く紫色を帶て異体なり

山燒　枯たる雜草を燒て蕨の發生を容易ならしむ

韮　翠髮　中心莖を抽て白花を開く

蒜　香のあしきより憎む意にてにんにくと云

荅葱　山原平地にあり野人是を食ふノヒルとよむ

胡葱　形ち葱の如く根は蒜に似たり膾に用ふアサツキとよむ

生類

燕　乙鳥の巢燕は春來り秋去る其翔る事甚捷し人家に巢を作る

雉子　華虫又野鷄と云此鳥雛を愛する事切なり

歸鴈　去ぬる鴈行鴈北へ行鴈今はの鴈鴈の別れ乙鳥は春分にして來り鴈は春分にして去る

鴈風呂　秋鴈の渡る時小さき木を咥へ來る是を海上に浮へ羽の勞れを休め其木を南部外か濱邊に落し置き春又其木を咥へ歸るに殘れる木多くあるは人に捕れ又死せしものとし其木を拾ひ供養の爲風呂を焚て諸人に浴せしむ

かほよ鳥　貝鳥はこ鳥仝物にて貝美しき鳥をさすと云へり

はこ鳥　一說にかほ鳥はかほ〳〵と鳴く故に名つくよしにも云

松むしり　菊いたゝきに似たる鳥なり春松の綠を食ふ

孕雀　孕める雀を云瓦甓擔間の巢作りに忙しき体なり

雀子　巢中卵生する雀の雛なり

引鶴鴨　引は歸るを云鶴鴨の類春分後遠く引去るなり

鳥の巢　諸鳥卵を生む時樹梢などに巢を營むを云

泊り山　泊り山とは山野に出て霄に雉子の鳴し處聞置き未明に行て鷹に雉子を取らするを泊り山又は泊り狩鳴鳥狩とも云朝鷹は其狩に遣ふ故の名なり鈴子さすと云ふは鷹にかけたる鈴に鈴子と云ふものをさして鈴の鳴らさるやうにして鷹を合すことなり

繼尾の鷹 尾羽損傷して短縮なるものには他の鷹の尾を繼く故に繼尾の鷹と云

佐保姫鷹 佐保姫鷹は鷹の雛を云

登龍天 龍春分にして天に登り秋分にして淵に沈むと云

鷹化鶉と成 仲春鷹化して鶉となると云

龜鳴 池澤朦朧の夜に鳴と云

蛙 異名 石蜂 丁子螫 季とす 秋にわたりて鳴けども鳴初る時を

蛙子 春月池澤は生育す形ち小さき杓子に似たり

虻 虻は翼鳴る其聲寅々たり

蜂 蜂數種あり 蜜蜂 土蜂 大黄蜂等なり 蜜は夏月巣中に貯へ置冬籠の食とす

似我峰 此蜂は桑の木の虫を取り來て七日呪ひぬれは已か如き蜂になると云仍て似我蜂の名あり

蝶 蝶は種類多し異名を鳳車鳳子と云蝶は鬚美なり故に胡蝶と名つく鬚を胡となすなり

蛇穴出 仲春蟄虫皆穴を穿ち出るを云

石龍出 仝

地虫出 仝

蟻出 仝

蜘出 仝

田螺 田嬴とも云田圃中に生す煮て食用とす

寄居虫 形ち蟹に似て蜷の壳に宿る因てやとり貝の名あり

蜷 やとり貝 其形ち蝸牛に似て其類多し蒸せは肉自ら出つ人食用とす

諸子 湖水の小魚にして長さ二三寸に過す鱗光りありて味よし

鮒 漁人市に賣るを云

飯蛸　頭中に白肉滿つ煮て食へは其肉粒蒸たる飯の如し故に飯蛸と云

鹿角落　角解とも云　鹿生れて三年にして角自ら落と云へり

廐出し　北越の如き雪國にては冬季馬を廐に飼養し春暖に向ひ郊野に放つ是を廐出しと云

蠣船歸　初冬安藝廣島より大阪の川々に來り繫留せし蛎船の歸を云

衣食

治聾酒　社日酒を飲めは聾耳を治すと云

餅花煎　正月用ひし處の餅花を貯へ置て二月涅槃會に煎て供物とす

鮒鱠　鮒を截て膾となすを云

蒸鰈　若狹　越前より出る鹽水を以て蒸し乾燥して各地へ輸送す

神釋

初午　二月初午の日山城稲荷社參詣多し福參りとも云

水間祭　二月初午の日泉州水間寺觀音法會なり人の厄難を消除して福壽を得ると云參詣の土產に野老を求て歸る

本妙寺詣　二月初午の日江州三上山本妙寺馬頭觀音開帳諸人參詣ありしか今は舊跡のみ存すと云

東福寺懺法　山城東福寺にて毎年二月初午の日符を書て附與す疫病を除くと云

吉野餅配　二月朔日花供懺法の両行人本堂に御供神酒を献し廣庭にて餅を撒くなり

大原野祭　山城乙訓郡にあり春日の社と同体なり仁壽元年二月后宮御祈の爲此處へ勸請あり大原行幸ありしと云

園韓神祭　二月上の丑古へ宮内省にあり後禁庭へ移す參議一人祭る所に就て事行はるゝと云

鳥祭　二月上の末熱田の社にて行はる餅を烏に與へ其御供食終れは神事始まると云

春日祭　南都春日神社の祭禮也二月上の申の日にて奉幣使參向あり

二月堂行　水取　大松明　南都東大寺に於て二月一日より十四日迄牛王加持の行法あり上七日は大像觀音の前にて法事あり七日十四日夜水屋の井にて水取あり堂中大松明を焚く世俗此日數を水取の寒さと云

薪能　南都興福寺南大門にあり　金春　觀世　寶生　金剛四座の内より二月七日より仝十七日迄夜に入てこれを勤む芝能とも云

五穀祭　二月九日京都貴船神社に於て五穀祭あり

遺教經　訓讀會　二月九日釋迦尊遺戒の經なり京千本釋迦堂大報恩寺又八條大通寺にて十五日迄行はる是を訓讀會とも云

涅槃會　二月十五日　佛の別　釋迦入滅の日なり山城東福寺の像は兆殿司の畫にて日本無双の大幅なり

常樂會　二月十五日南都興福寺の涅槃會なり仝寺の涅槃像は金岡の筆なり

彦山祭　二月十五日豊前彦山祭禮あり彦山は彦の高根とも云

嵯峨柱炬　二月十五日嵯峨清涼寺釋迦堂の前にて大炬を建て火を点す釋迦を葬る遺意なりと云

西行忌　西行法師は藤原康清の次男俗名義清鳥羽院北面の武士　弓馬歌道の達人たりし保延三年薙髪して大實坊圓位と号す建久九年二月十五日卒す

積塔會　二月十六日盲人檢校以下京都高倉綾小路なる清聚庵に集り光孝天皇の皇子雨夜の君の爲積塔會を修し盲人六派の中より四人を撰みて平家を語らしむ

彼岸　彼岸は七日間を云中日は四日目にて晝夜長短仝しき時なり生死は此岸涅槃は彼岸たり煩惱は中流を渡りて彼岸に達する謂にて諸寺院讀經法談して會式を營む

天王寺踊念佛　彼岸中四天王寺念佛堂にて踊念佛あり天筆の名号とて廿八菩薩の畫像を掛て修す

時宗踊念佛　彼岸中京都御影堂にて是を修す

圓宗寺最勝會　昔は二月十九日執行ありと云　今寺跡絶たり御室仁和寺に其名ありと云

淺間祭　二月廿二日駿河國阿部郡淺間の祭なり　信州の淺間に非すセンケン祭と云

聖靈會　二月廿二日四天王寺聖德太子の鳳輦を聖靈院より六時堂に移し堂前の舞臺にて伶人の舞樂あり同寺年中第一の法會なり

比良八講　二月廿四日比叡山の衆徒法華八講を修す此日湖上多く烈風あり急事ならては船を出さす

祇園八講　八講とは法華八の卷の大意を論す祇園の八講は中絶せりと

北野祭　二月廿五日菜種御供今夜西京御供田より北野の社に献す供物の上に菜種を挿む年によりて菜種なきときは梅花を挿むと云

道明寺祭　二月廿五日河内道明寺天滿宮祭禮御自作木像開扉ありと云

水口祭　稻は水に非されは枯るゝを以て苗代水を引入るゝ口に幣を立て田の神を祭るなり

利休忌　二月廿八日茶道千家の祖利休翁の忌日なり京都家元に於て吊忌の茶の湯あり

公事故事

献生子　二月一日唐土の民間青囊に百穀瓜果の種を盛り相共に祝ふこれを献生子と云

列見　六位以下の藝能あるものを撰み式部兵部の二省より連出るを上卿たる政官に召よせて器量容儀を見立るなり上卿以下此時冠に花をかさす

紀元節　新暦二月十一日神武天皇御即位の日なり國民旭旗を掲けて祝す

釋奠　上丁の日孔子を祭るを云釋（たき）レ菜（さいを）奠（たゝへを）幣より釋奠をおきまつりと云へり

祈年祭　年中災なく四時順度ならしめん爲祈り給ふなり

春季皇靈祭　彼岸中日御代々の皇靈を祭らせ給ふ

三月　乾坤

彌生　此月をいやよひといふは春至りて萌出たる草のいよ〳〵生たつを以ていやよひ月を約めて云

季春　季春はするの春なり

蠶月　蠶月はかいこ作る月を云

殿春　殿春は春のしんかりといふ意

鶯時　鶯時はうくいすの啼時

殘春　春抄は春のおはり

殘春　殘春は春わすかになりてのこりをしき意

櫻花見月　さくら月花見月名の如きこゝろなり

雛　雛祭　立雛　雛遊

三月三日是を祭り遊ふは上巳祓の贈物人形より移れると云

柳　鬘　三月三日柳をさしはさめは蠃毒を免るゝと云

汐干　三月三日海潮大に乾く衆人來て蛤等を取りて遊ふ

土佐硯石取　三月三日土州西寺の御崎海底より取ると云

曲水　流觴　巴字盞　羽觴を飛す　めくり水　川の邊りに座を設けて流水に盃を浮へ其盃の我前を過さるうち詩を作り後ち盃を取ることなり本朝には顯宗帝の御宇より始まれりと云

八十八夜　立春の日より八十八夜に當る必霜あり

忘霜　此時農家種蒔の節とす立春より八十八日の夜なり名殘の霜又は別れ霜と云

初虹　季春初て見る虹を云虹は陰陽和せさる時此氣を顯はす日西を以て東に見ゆるなり

北窓開く　春暖至り北風寒からざるを以て開く

爐塞　爐は一般の稱故汎く用ひて可なれとも多く茶室の爐を塞くの意とす是春暖滿るを以て風爐に更る故なり

巨燵塞　暖氣至るを以てふさく

圍爐裏塞　仝

彌生山　名所に非す只春の山といふ意なり

竹秋　筍の發生に臨み竹皆衰ふさまを季節に云

清明　春分後十五日を清明とす萬物潔齊にして清明なる故なり

夏待　湖畔池邊に住める人夏季を待意なり

夏近　夏隣　夏近し夏隣いつれも春の限を云

暮春　行春、春の限　春の別、春名殘　三月盡　春の期盡るを云　行春　春の限　等いつれも同しこゝろなり

植物

桃　白桃　緋桃　姫桃　源平桃　源平桃は八重にして紅白咲分けなり　異名　助嬌　仙木　五渡　洞中仙　武陵花　三千代草

櫻　山櫻　八重櫻　緋櫻　家櫻　塩竈櫻　伊勢櫻　朱櫻　淺黄櫻　西行櫻　普賢像櫻　等種類多し　よし野草夢見艸あたな草　かさし草の名あり

伊勢櫻は緋櫻の種類にして花開くこと甚遲く終と尾張訓仝しきを以て隣國の伊勢を名にせしなりと云へり

普賢像は花の形ち菩薩乘る處の白象の如しとて　斯く名つくるとそ

註に及はす　花見、花守、花の主　花の宴、花の雲、花曇、花の浪、花の瀧、花の宿、花の雪、花吹雪、散花、落花、以上題となす

花

木蓮花　葉は辛夷に似て花蓮の如し白木蓮紫木蓮あり

海棠　林檎の花　楊梅の花　梨の花　ゆすら梅

からなし　睡れる花　唐にも元は海外より來る花故海棠と呼よし云へり

三月粉紅花を開く異名を文林郎と云

ヤマモヽ　高さ丈餘三月花開き夏實を結ふ

三月白花を開く滿目雪の如し

櫻桃梅と書く形ち梅に似て小さく小白花をひらき夏あかき實を結ふ

杏の花　アンス和名加良毛毛其花美しく唐音を呼てアンスと云花紅にして八重なるもあり

李の花　スモヽ三月花咲單葉五出白色實は桃に似て味酸し酸桃と呼ふ

藤　松見草　藤波は波に見立てゝ云

華鬘艸　下り藤

仙臺萩　花の形ち華鬘を釣たるに似たり高さ尺餘淡紅色なり

山吹　萩に似て花黄なり苜宿といへる草の類なりと云

高麗菊　棣棠を正字とす　酴醾花　王蓋　銀葩

東菊　花の紀念草　鏡草　面影草の名あり

あらせいとうの花　春花を開く菊に似たり春菊とも云

母子艸　其葉初生は蒲公英に似たり一莖一花菊の花に似て淡碧色なり關東曠野の路傍に多し故に此名あり

荒世伊登宇花と書く三月開く花紫色なり

鼠麹艸　又佛耳草と云三月三日是を團子に和して食ふ近世多く蓬葉を用ふ

櫻草　九輪草の一類異種なり三四月花を開く單の淡紫或は白花櫻の如く最艶美なり

金蓋花　莖頭に花を開く金黄色形ち蓋の如し

金鳳花　高きもの尺餘一枝三葉三四月小黄花を開く

ゑひね　化偸草と書く葉車前子に似て厚く長し三四月莖を抽てゝ開く肉紅色又は淡黄等數色あり其根鰹に似たりと云

五形花　漢名碎米齊俗五形又蓮華艸と云其多き處錦を地に布か如く野遊の一興とす

春蘭花　春の末花を開く深紅白なりホクリと云

茄子苗　三月畑に畝を作り是を栽移す

棗の花　葉の間に小白花を開く棗は夏芽より出たる名故芽出し花とも夏なりといふ説あり

柿の蕾　柿の蕾は柿の若芽なりと云

馬醉木花　アセボ山谷に生す高きもの一二尺葉長く鋸の如き齒あり馬此葉を食へは醉ふ

蘇枋の花　三月紫花を開く花終て葉出つ

長春花　薔薇の類なり花深紅厚き瓣あり

沉丁花　高さ三四尺花丁香の如くにして紫色なり開て後淡紫となる

石南花　石間陽に向ふ處に開く故に名つく葉厚くして長く三月の末花咲く深山に多し

辛夷（しでこふし）　柿の葉に似て白花のものは小幣の如し是を幣こふしと云紫木蓮に似たり

連翹　枝長くして点々黄花をつくいたち草と云

果櫚の花　木李　木梨　花五弁　淡紅色なり外國の花櫚とは別なり

雪柳　小米花　小樹叢生す三四尺葉挾く長し花は小米の如し俗呼て小米花とす

小粉團花（すゝかけ）　木の高さ四五尺葉挾く花の形ち小手鞠に似たりすゝかけとも云

茶摘　八十八夜前後を摘順とす

桑摘　蠶飼の用に是を摘む新桑摘とも云

令法　ハタツモリ高さ三四尺槐の葉に似たり茹て食す又乾燥して茶となして飲む

躑躅　もちつゝじ　岩つゝじ　深山つゝじ　岡つゝじ　羊の性至孝なり此花の赤き萼を見て母の乳と思ひ躑躅して膝を折り是を飲む故に名つくと云

薊　高さ尺餘刺多し心中に花頭を出す人呼て千針草と云大薊は眉作の花と云

董　壺董花紫色なり壺董は墨壺の形ちなる故に云

馬蘭　葉薤に似て長く厚し三月紫碧の花を開き五月實を結ふ

茅花　花の形ち白刃を拔列ねるか如し根を荑蘭根と云

茗荷　はしかみの葉に似たるもの若き時は莖も又食用とす

なもみ　莽耳（ナナセミ）　豨薟（ノナセミ）　莽耳は其葉青白く白花にして莖細し豨は葉長

く節に對して葉を生す

若菰　池澤の中に生す二三月白き芽をふきて筍の如し

櫨の花　木櫨は葉槐に似て長く細き白花を開く

通草花　アケビ蔓艸なり鞍馬の木の芽漬はあけひなりと云三月紫花を開く

水蕗の花　三月葉を生す多く水澤中にあり俗に鷄盤頭又は鬼蓮と云

三月大根　暮春に至て出つ形ち細く長し

三月菜　多く晩春に出つ茹て食用とす

青麥　麥の未た出穗せさるもの菜花と共に美觀也

萍初生　穀雨の候はしめて生す

生類

鷄合　禁裡清涼殿南階前にて鬪雞勝負を決す

呼子鳥　古今集三鳥のひとつなりとてさま〳〵の説あれとも只深山に啼て春なから寂たる鳥と心得て詠むへし歌にも覺束なく又は呼と云ふ縁によせてよめり

雲に入鳥　雲に入鳥は古巢に歸る意なれは海上の空遠く霞に紛るゝ景狀なり

鳥歸雁　鴨等諸島の古巢に歸り去るこゝろなり

鷹の巢　蓊鬱たる喬木に營むと云

鶉の巢　巢を草中に營む雀の巢に似て甚秘なりと云

郭公の巢　郭公は巢を營む能はす鶯の巢に依りて卵を生む

鳶の巢　人目屆き難き老樹に營むと云

田鼠化して鶉となる　三月田鼠化して鶉となり八月鶉化して田鼠となるとそ

麥鶉　麥の中に子を哺する鶉なり此時啼くをひゝなきと云

めかり時　蛙のめかり時と云蛙の鳴頃人の眠を催すは蛙人の眼を借るよしに云

若鮎　鮎汲　小鮎　上り鮎　鮎は春生れ夏長し秋衰へ冬死す故に年魚と云　往々若鮎を今年鮎と云へる句あれと甚誤なり

柳鮠　河湖の中に多し　形ち鮎に似て淡黑なり柳の葉に似たるを以て柳鮠と云

櫻鯛　櫻の花開く頃魚人多くこれを得て市に出す是を櫻鯛と云

櫻貝　櫻貝と稱するもの恰も櫻の散て地に敷か如し

烏賊　多く月夜に漁す春月味ひ優るを以て市に多し

いかなご　かますこ漁人海濱に於て熱湯を通し市に出す

蠶　蠶飼　是を飼育する爲設るを蠶棚と云ひ飼育する人を蠶守と云ふ極めて清淨を要とす

雛鶴　巣中を離れて林間なとに遊へる体を題意とす

獸つるむ　深山幽谷の諸獸も春陽の發動を受てつるむを云

上り簗　若鮎の水に泝るを追下して簗に入れ漁するを云

櫻魚　常陸　櫻川　に春暖を得て多く登る若さきと云ふ魚なりと

衣食

草餅　母子餅　蓬餅　三月三日　婦女　是を採て蒸し搗て餻となす

菱餅　青黃白の三色菱形に截たるもの三月三日雛祭の供物とす

桃の酒　三月三日桃花を浸してこれを飲めは百病を除くと云

茶の試　今年の新芽を採りて製したるものを試む　利茶　喚茶とも云多く製造家に於てなす

櫻衣　表白　裏赤等二三種あり

山吹衣　表青　裏黃　三月三日是を用ゆ

白酒　糯米を以て製したるもの雛祭是を用ふ

神釋

須磨御祓　是は光源氏須广へ左遷の時三月一日巳の日にて浦邊の船に人形を立させ給ひ祓の具とせられしより春の季とす

經供養　三月二日四天王寺　太子堂にて如意輪觀音經供養あり

石山祭　江劦幡宮　石山寺鎮守　三社祭禮　三十八所明神　新宮大明神　近津尾八　三月一日より三日に至る

粟津祭　三月三日江劦粟津鳥々川の御靈祭禮なり

水尾祭　三月九日丹波桑田郡愛宕山の傍水尾神社祭禮

安樂花　高雄法華會　ヤスラヒ於は三月十日　西加茂　上野　川上村　の三鄕より囃子物を出し高雄法華會の安らかに勤め終らんことをやすらひ花と云ひはやすとそ

吉野會式　三月十一日吉野山　子守　勝手　両社の神輿　本堂へ渡御あり花會式と云

初瀨千部經　三月五日より十一日迄大和長谷寺に於て千部讀經の會式あり初瀨山の櫻花名あるを以て參詣多し

梅若忌　三月十五日隅田川木母寺大念佛會あり　梅若は吉田少將の子人に欺れて東海に趣き病にかゝりて死す塚に柳を植て今に至る迄吊ふと云

善導忌　三月十四日善導大師忌日也京都智恩院中善尊院等にて修す

順峰入　往昔　役行者　入峯の道を慕ひ本山派熊野より葛城大峯に入るを順の峯と云

壬生念佛　三月十四日より廿四日迄京壬生寺にあり土人俳優をなす是を壬生狂言と云融通念佛の餘流なるへし

中山無緣經　三月十六日より廿二日迄攝州中山寺觀音無緣經あり參詣多し

鎭花祭　大神　挾井の二祭を云　春花飛かふ頃は疫神分散して人をなやまし故此祭ありとかや　神祇宮　又は地下の神社にも行はる

淺草祭　三月十八日東都淺草觀音堂を創設せし三人を祀りたる三社祭禮なり雷神門の邊りにて簑を賣る是を淺草の簑市と云

人丸忌　三月十八日人麿忌播州明石人丸社にて修す此日歌人多く歌會を開く

御身拭　三月十九日嵯峨清涼寺釋迦御身拭なり此堂を建立せしもの父牛に生れしよし如來の告に依り佛果を得んため如來を拭ひし衣を牛にうつし葬りたり是より毎年如來を拭ふ白布を參詣人に授く

稲荷御出　京都油の小路七條の南稲荷の神出現地なり後稲荷山に移せしを以て此地を御旅所となし三月二の午祭禮の時神輿こゝにあること廿日間是を稲荷の御出と云

御影供　三月廿一日弘法大師入定の忌日にして高野山をはじめ京東寺高雄其外國々同宗の寺院に法事あり

大原春さし　三月廿三日丹後國大原神社へ參詣して蠶棚に置くところの石を受て歸る俗に是を猫石と云ふ鼠の害を防く爲なり仝社は蠶の守護神とて蠶飼なすもの殊に崇敬す都て參詣の地に向ふをサスと稱するを以て是を大原の春さしと云

公事故事

踏青　三月三日山野を跋渉するを云

鞦韆　半仙戲　ふらこゝ　冐素彩れる長き繩を高木に懸け士女其上に立てゆる是寒食中の遊戲なり

寒食　冬至より百五日目清明節前二日を云此日より清明に至るの三日間晋の文公の仕へし介子推と云ふ人の焚死を吊する爲唐土にて火を禁するを云

杏粥　棗粥　桃花粥　桃花粥　など豫め熟物を辨して寒食の用となす

榆柳の火　唐土の政年中の火を改むるに春は榆柳　夏は　杏　秋は柞　檜冬は槐檀の火を取る清明の節榆柳の火を近臣に賜ふと云

油花卜　三月上己の日婦女薺の花を油に浸し水に洒く竜鳳花卉の形をなすときは吉兆なりと云

尚齒會　齒は齡なり齒をたつとふ會と云ふ意なり高壽の人を上座として順次席に列り會合なすを云

春終

夏異名

朱明　朱夏　炎夏　光明　長嬴　仲呂　執衡　南訛　正陽　假宣　氣陽　南爲

夏之部

朱明とは陽色なりあかく照り明らかなるを云
朱夏　炎夏　光明は朱明の解に同し
長嬴とは物を養ひ長するなり
仲呂とは陽散して外にあり陰實して中にあり旅陽功をなす故に仲呂と云
執衡とは南方の神炎帝離に乘り衡を執て夏を司るなり
南訛とは訛は化なり南方陽氣に向ひ萬物生々として育つなり
正陽とは陽氣正しき時節を云
假宣とは假大と云ふに同しく物長大にのひしくなり
氣陽とは陽氣此月に充滿する故なり
南爲とは南方の陽氣を以て物のなる事なり

四月 乾坤

卯月　首夏　孟夏　初夏　新夏　早夏　立夏　餘月　槐夏　清和　六陽　花殘月　夏初月　小滿

卯月は卯の花月を略して云

首夏　孟夏　初夏　いつれもはしめの夏といふこと

新夏はあたしき夏なり

早夏ははやき夏を云

立夏は四月節の名を云へり

餘月は陽餘る月と云ふこと

槐夏はゑんしゅ花咲く故に名つく

清和は陽すみ和らくを云

六陽は冬至を一陽として四月を六陽とする故なり

花殘月は春より咲殘れる花あるを云

夏初月はなつは月とよむ夏の初勿論なり

立夏より十五日の後を小滿と云ふ萬物次第に長じて滿る義なり

梅天　三月の雨を迎梅と云ひ五月の雨を送梅と云ふ梅子雨を得て成熟なすの季節なれは四月を梅天と云へり

和清天　初夏の晴天を云ふ樂天の詩に孟夏清和天と云へり

卯の花降　卯の花降しは四月の雨を云

短夜　夏至を短夜の極度とすれと初夏より明易きを覺ゆればなり

大矢數　明易き夜　洛東三十三間堂々前にて弓術あり通り矢の數超過するを名譽とす

松前渡　南部　津輕等の商人産物交易の爲蝦夷　松前へ渡るを云北海は冬春の寒氣強く海上浪荒きを以て四月始て出帆し九月を限り歸國す渡るを夏として歸るを秋とす

以下三月亘

蚊帳　蚊幬とも書く麻織を主とす薄絹木綿もあり

葭屏風　葭を以て製したるもの

よし簾　前註に異ならす

汗

汗手拭 炎暑人の身体に流るゝを題意とす病の汗寢汗雜なり

扇 一二尺の布両端を縫ひたるもの
扇は蝙蝠を見てはしめて作りし故一名かはほり又仁風手馴草の名あり

夏の月 清光涼氣を愛るさま又短夜の白らみ易きさまも題意なり

夏の霜 夏の月影を霜に見立て云

夏の夜 明易きを意とす

夏山 蒼翠滴るか如きを云

團扇 翳に似て物を打つへく故にうちわと云

日傘 夏日々を防くに用ゆ傘紙に油を引かさるもの

編笠 藺を編て作りたるもの暑さを防く用とす

ふのり干 海中石崖の間に生すること三四寸是を採りて乾燥す

晝寢 三尺寢とも云ふ日脚三尺の間を眠る意なり

植物

牡丹 花王 夜白艸 富貴草 名取艸の名あり
葉は牡丹に似てせまく花紅紫白の數種あり花の宰相ゑひす艸の名あり

芍藥 其葉菖蒲に似たり花は紫色を正とす

燕子花 一名賽牡丹 葉白菖の如く三四月莖を抽て花ひらく四辯にして紅白又は半紅のものあり

罌粟の花 花四辨罌粟に類して小なり唐頂王の婦人虞姫の墓畔に生せしを人呼て美人艸と云

美人艸 葉尖りて薄く花黄白紅の數種あり墻に依て叢生す故に薔薇の名あり

薔薇 小白花にして香氣高し羹に加へて賞す

花抽 てまり花と云ふ木の高さ五七尺葉は圓く皺あり四月花をひらくはしめ淡青後純白となる

繡毬花

白丁花　高さ二三尺四月小白花をひらく一種千葉のものあり籬墻又は人家の雨たれ落に植ゆ

柿の花　四月花をひらく黄白色落ること頻繁なり

椶櫚の花　莖に苞あり是に孕みて開く黄白色なり

要の花　扇骨木葉は挾く細かなる鋸齒あり四月小花をひらく其木最も堅く扇の要となすに堪へたり故に名つく

藪椿　鼠もちの花葉椿に似てきざなし五月細かき白花を開く姫椿藪椿と云

厚朴花　葉は柏に似て花の形ち牡丹に似たり色淺紫木質朴にして皮厚し故に此名あり

青木の花　花紫黯黑にして美ならず葉は常盤なり

王孫花　つちはりと云ふ長孫海孫はりくさ是藥草にして療病の功ありと雖も其草識るものなし里俗のつちはりと稱するもの証としかたし

岩梨　苗の高さ二三寸葉地に敷て生す小白花をひらき實を結ふ揚梅の如し三井寺の山中に多しと云

覆盆子　木いちこ蛇いちこ蔓いちこ砂いちこ桑いちこ種類多し白黄花を開き四五月實のる熟して赤し

青蠶豆（さや豆　はしき豆）　葉の形ち蠶に似たり其莢上に向く故俗に空豆と云

若葉　諸木新葉なり青葉は雜とす

若葉の花　若葉交りに咲殘る花を云

餘花　餘花は春に後れて深山に咲けるを云

若楓　楓樹の新葉なり

新樹　諸木の新綠を云

木下闇　樹林などの繁茂して下道の暗きを云

わくら葉　若葉のうち稀に變色して異容のもの是を病葉と云

葉柳　晩春より葉の長成するを云

葉櫻　首夏新緑中殊に賞す

櫻實　大豆斗りにして初め青く熟すれば赤黑し俗に櫻坊と呼ふ

卯花　揚櫨　山空木　筥根空木　唐空木等種數あり山中に多し人家の籬に植えるものは多く山空木なり木は皆空なる故にうつきと名つく葉圓形にして長し小白花をひらく愛すへし

桐の花　葉大にして尖りあり初夏紫花をひらく

茨の花　山林の間に叢生す刺あり四月白花を開き後實を結ふ是を營實と云

麥門冬　葉厚く五月莖立て穗の如く連りたる紫花を開く

踊草　葉小葵に似て兩々相對す花白色に少しく赤みを帶ふ人の笠を着て踊るに似たり

蕙　莖を立て葉を生す秋蘭に似たり白花紫花あり

文字摺花　莖の長さ尺に滿す葉百合の如し四五月花をひらく紅白花一莖に十餘連なる

石蔚　石上に叢生して紅花を開く節の上に根髭あり

蘭の花　一名　燈心草　又鷺の尻さしと云

寶鐸艸　形ち鈴鐸の如く倒さまに垂る花青白色なり

樊噲艸　葉蕗に似て股あり黃花を開く

盧陀草　ルウダ　ヘンルウダ　二種ありヘンルウダは海外より來ると云三四月黃花を開き細葉なり

玉卷芭蕉　新葉未だ開かず卷たるものを云

玉卷葛　葛の葉の芽出し玉の如く卷きたるを云

鷹爪　樹の高さ丈餘初夏黃花を開く綠豆の花の如し一種ゑにしだと云もの花淺黃色にして鷹の爪に似たり

鸚實　ウスノミ和名字久比寸と云山林に在て小木なり葉つゝじに似て兩々相對す三月に小花を開き四月實熟す

下毛　葉すゝかけに似て花眞紅又淡紅なり愛すへし

葵　高さ五六尺に至る花の形ち木槿に似て深紅又は白等數種あり下より順欠咲のほる

麥秋　穀は其初生を以て春とし熟するを秋とす因て麥秋と云

茶挽草　苗葉小麥より小にして穗細し小兒穗粒を爪の上にすれは回旋すること茶臼を挽か如し因て此名あり

著莪　四月花をひらく一八に似て小さし灰白色黄の文あり

一八　紫羅傘と書く葉射干に似たり杜若の類にして花紫碧色なり又白花もあり

風車花　鐵線の類なり花八瓣にして蒼碧色風車に似たり

夏枯草　ウツボ原野に多し高さ一二尺穗をなす穗中淡紫の小花を開く穗の形ち矢筒の鞆に似たる故に此名あり

千日紅　木の高さ二三尺淡紫色花千瓣冬に至て葉萎むと雖も花凋ます故に此名あり

山苣の花　賣子木　苣の木と云高きもの一二尺葉梅嫌に似て花野梅の如く三四月花を開く此木の葉野菜の苣に似たる故名つく

苣の臺　三四月臺を起し四五月黄花を開く

天蓼　マタタビ山中又は人家にも是を植る其蔓青黑くゆすらの葉に似て皺あり三四月白花を開く形ち梅花に似て小さし

羊蹄花　ギシ〳〵俗しのねと云葉の長さ尺餘小黄花をひらく

蓮のはゐ　蓮の若根これをはゐと云

岩藤　花葉とも藤に似たり三月より四月に至て花をひらく紫色又白花あり

廬橘　昔艸庭古艸　軒生草　橘は柑類の總名なり世に橘と稱するものは包橘なり

花橘　去年の實今年花咲く迄落すして黄熟したるもの是をはなたちばなと云

常盤木落葉　四時凋まさる諸木の新葉生して後古葉の落るを云

茂　蔚林　茂林　茂草　總て草木の繁茂を云

金柑の花　其樹橘に似て高からず五月白花をひらく

橙花　樹葉とも柚に似たり四五月白花をひらく實を結へは七八年落す依て代々の名あり

九年母花　乳柑と云橙に似て長く花も橙に等し

枳殼の花　高さ五七尺○橙の如くにして刺多し初夏白花をひらく

筍　たかんな四月盛に出つ淡竹を上とし苦竹を次とす

篠の子　小竹の筍を云

豆植る　夏至十日以前種を下す九月莢を結ひ十月これを收む

芋植る　粒芋　唐の芋　青芋　等種類多し夏至前後種を下す

以下三月亘

夏木立　萬木の新緑生ひ茂れるさまを云

青山椒　山椒の實未た熟せさるものを云

茄子花　夏より秋に至て紫花をひらく

蕗　葉葵に似て廣く圓し其莖を食ふ

蓼　二三月苗を生し四五月繁茂す秋に至て穗をなす

苅葱　初生針の如し羹とせす生にて食す酢味噌に和せはよし是春葱なり

根芋　和名いもから根芋と稱するはすいきなり煮て食用とす

海松　形ち松の如くにして滑なり

生類

時鳥　子規　郭公　杜宇　杜鵑　不如歸　霍公鳥　蜀魂　四手田長　沓手鳥　早苗鳥　田哥鳥　戀し鳥　無常鳥　夕影鳥　妹脊鳥　勸農鳥　百聲鳥　冥途鳥　橘鳥　三月過鳥　童子鳥　賤鳥　俱伎羅　以上異名　初て夏を主とす秋聲を收めて冬月深山に蟄すと云

巣鷹　四月捕るところの鷹を巣鷹と云

鷹塒入　四月鷹を塒に入て毛を替さすことなり　鳥屋踏　塒籠　塒鷹とも云鷹の塒と云へは雜なり

かんこ鳥　正字未詳　形ち杜鵑に似て少さく赤色を帶ひ腹白くして黑點なきのみ山林に栖んで家に近付す是かんこ鳥なりと云かんこ鳥は喚子鳥の字音唱へ誤れるものゝよし加茂眞淵翁は云へり

よし切　よし原雀　行々子　形ち鶯に似て大さ雀の如く青灰斑色尾長し好んで葦中の虫を食ふ啼聲甚喧し故に行々子と云

鶯附子　鶯の子は春巣より捕來て夏月これを飼ひ親鶯の引音を習はしむるを附子と云

老鶯　亂鶯　初夏より鶯の老聲に移るを云　亂鶯と云へるも此意に異ならす

蝙蝠　蚊食鳥　其形ち小鼠に似て灰黑色薄き翅あり日沒より夜に飛て蚊を食ふと云

燕の子　燕は春分より來りて人家に巣を作り生む處の子を夏月成育せしむ

羽蟻　羽ある蟻なり人家又は堂宇の古き柱より生して群飛す

蜘の子　蜘の子は袋を破りて右往左往す其數幾百なるをしらす

枝蛙　背青くして腹白く雨降んとする時啼く木の枝にすむ故に此名あり

蓼喰虫　此虫蓼を辛しとせす世俗蓼くふ虫も好々と云へるは是より出たる諺ならん

蚯蚓出　孟夏の濕雨蚯蚓の出るを云

蚕の蛹　蚕の白色透明になりたるものを撰み麥藁菜種殼を用ひて蛹を作らしむ

蟹の子　蟹の類なり江海に生す大なるもの味美なり鹽水にて煮熱し甲を脫して白肉を食ふ

初鰹　鎌倉小田原の海邊これを釣て東都に送る早きものを初鰹と稱して殊に賞味す

鹿袋角　初生未た頭皮を貫かす恰も物の袋に入りたる如き狀を云

夏野の鹿　夏野の鹿は角生初て短きさまを云

以下三月亘

つゝ鳥　蚊母鳥　一名蚊母鳥又ヨタカとも云軀幹尺餘口甚大にして羽色は全身淡灰色褐色の斑紋あり　晝間は茂林中に接息し夜間出て蚊又は他の小虫類を吸食す

螢　丹鳥　夜光　宵燭　丹良　暉夜燐　夜半受　熠燿　以上異名

蝸牛　土牛兒　霖雨あるとき　壁などに登り人の手を接觸すれば忽ち畏縮す俗出出虫と云

蛞蝓　附蝸共に蝸牛に似たる故なり蜒蚰螺は引すり行く形ちを云

蜒蚰螺

蠅　夏出て冬蟄す　蛆を生し脫化して蠅となる

蠅虎　專ら蠅を捕へて食ふ

蚊　蚊は文なり人の肌膚に文するの義なり

蚊柱　楠其他の生木を煙らすを云總て物を追拂ふを遣ると云ふなり

蚊遣火　夏日人家濕熱の氣より生す

蛩　山谷等樹林に多し蚊に似て小さし晝出て人を螫す

蛭　蛭は水中に生す一種山蛭は茂林を傳ひて登るものありと腐水中に生す浮沉の時恰も棒を振か如し

子子　一名　鼓虫　圓くして黑く豆ほどの虫なり水上に回旋す

まいゝ虫　池澤小川に多し五六分斗りにして黑く長し其臭飴に似たるを以て俗アメンホウと云

水馬　蒼鷺は鷺に似て小さく色蒼黑く脚綠色なり

青鷺　一名方目鳥大さ鳩の如く嘴尖り脚長し人を見れは啼く故に鷺と名つく

鷸　凡水鳥は春月古巢に歸る中に稀々池中に常居するものあり是を通し鴨と云

通し鴨

翡翠　背尖りて長く足紅色にして短し背綠色翅黑色池川に在て好て魚を捕る

鵜飼　岐阜　長良川の鵜飼名高し夏月納凉を兼て諸國より觀覽多し

鵜舟　鵜遣

鵜匠　鵜縄

鮎　若鮎小鮎は春　鮎とはかりは夏　落鮎澁鮎秋なり

胡鰣　鰤の小なるもの五六寸の時をつはすと云

鮴　一名石首魚石間に臥伏す網を下し流れを截ちて是を取と云

水鱧　五月の頃磯邊によるを網にて取るこれを水鱧と云一説に大阪より大和地方へ送るに水に浸す故に此名ありとも云へり

水鰊　大さ五六寸より尺餘に至る夏月これを賞す畿内にて潮水に浸したるものを切流しと云

魚簗　魚簗とはかりは夏なり上り簗を春とし下り簗を秋とす

衣食

更衣　綿入衣類を袷に着更るを云

初袷　前註に同し綿拔は布子の綿を拔去て袷になすを云

（袷綿拔）

卯花衣　表白裏青四月これを着る

煮酒　夏日酒の氣味を失はさる爲煮酒の法を用ふ

新茶（古茶）　今年製したる茶を云古茶は新茶に對しての名なり

生節　鰹に塩水を用ひて蒸乾し生々しきものを云

煮取　鰹節を作る時其液の滯るものを取てこれを收む其味美なり

以下三月亘

新麥　早きもの四月晩きもの六月に出つ

麨　麥を煎り細末になしたるもの俗に麥焦しと云

青さし　青さしは青麥を調し合せたる菓子なりと云

冷し汁　夏月羹を器物に收め冷水に浸して食用となすを云

煮冷し　前註に異ならす煮沸せしものを冷却せしめて用ゆるを云

洗鱸　夏月其肉をさし身に作り冷水に洗ひて食ふこれを洗鱸と云

蟹　鰭

蟹を塩漬になしたるを云

干鱧

十頭斗り宛列ね白乾になしたるもの

干鰒

多く名古屋鰒の乾燥したるもの夏月奠として食す

干烏賊

塩烏賊干烏賊ともに海濱遠き地方へ送る

鮓

鱠。鮨共にすしと訓す江州の鮒鮓　濃州の鰷鮓和州吉野の鮎鮓（これを釣瓶すしと云）城州宇治の鰻鮓（これを宇治丸と云）攝州福島の江鮒鮓（これを雀鮓と云）和州今井の鯖鮓等古く名物とせしなり

はたゝ鮓

早鮓は熟することの早きを云ひ一夜鮓は一夜に馴さするの意なり

風爐の茶

羽州秋田にて鰶に似たる魚を以て作る

四月より風爐を立て茶を點するを云

神釋

筑摩祭　鍋祭

四月朔日江州坂田郡筑摩明神祭禮なり祭る神市杵島姫命なりと此祭禮には里女婚をせし數に應して鍋を戴くを例とす近世は紙張の鍋を冠りし少女神幸に從ふと云

筑摩鍋

貴船神事　虎杖競

四月朔日加茂の氏人騎馬にて詣つ歸る時市原連理の芝と云ふ所に於て虎杖を爭ひ取り其大少多少を論すこれを虎杖くらへと云

花供

四月朔日弘法大師の御衣を更るの日なり金堂にて僧侶藥師會を行ひ花を供する日なる故此名あり

神武祭

新暦四月三日神武天皇御祭日國民旭旗を掲ゝ

住吉卯祭

四月上卯の日攝州住吉祭神宮卯杖を持て神輿に從ふ

稲荷祭

四月中卯のの日山城稲荷社祭禮神輿五基を出して賑へり

八瀬祭

四月上の辰山城愛宕郡八王子神社天滿宮両社祭禮なり

山科祭

四月上の巳北山科茂登岐明神祭禮なり

多賀祭

四月二の午江州多賀の大社祭禮粟栖村御旅所へ渡御あり

堅田祭

四日上の巳堅田祭禮祭る神神田明神なりと云

平野祭

四月十日京都平野社祭禮なり

當麻祭　大和當麻麿子王子命比賣命の二座祭禮

杜本祭　四月上の申河内舊安宿郡杜本宮祭禮

梅宮祭　四月上の申山城葛野郡にあり祭る神四座此祭禮今は絶たり

松尾祭　四月上の酉山城葛野郡松尾の社祭禮なり

當宗祭　四月上の酉河内舊志紀郡當宗の社祭禮なり

大津祭　四月上の亥江州大津の四の宮祭禮なり

山崎日の使　四月三日山崎離宮より行列して八幡宮へ參る此使を勤るを日の頭と稱し其人を日の長者と云一郷中富豪の輩なりとそ

龍田祭　四月四日大和龍田の社祭禮なり龍田は風の神とて豐年を祈ると云

吉田祭　四月中の子京都吉田社祭禮なり

久世祭　四月中の己山城乙訓郡久世神社祭禮なり蓼妻明神と云

菅宮祭　四月中の午近江野洲郡大宮二の宮三の宮祭禮なり

國祭　四月中の申加茂の社は山城の國の地主なる故今日は國より祭る明日の祭は内裏より執行せらる

山王祭　四月中の申江州阪本山王祭四の宮御旅所へ渡御ありて其式等甚賑し

關白加茂詣　四月中の申加茂祭の前日關白公の參詣ありしを云

加茂祭　葵祭　御形の日　葵かつら　諸かつら　下加茂の御祖加茂別雷二神の祭なり祭とはかりは此祭に限る今日人々葵のかつらをかくる故に葵祭と云御形の日とも書く加茂の神生れたまひし日なれはなり葵かつらは葵と桂とさす故諸鬘と云ふ葵は靜原より桂は松の尾より伐來りて飾とす

神祭　忌さす　榊さす　加茂祭を云忌さす榊さすは忌竹といへるものに榊をさすことを云

中山祭　四月中の酉京都冷泉院におはする石神祭禮なり

近江八幡祭　四月中の卯祭禮あり江州蒲生郡八幡村に在しを後日杉山に移す祭神石清水に仝し

日向明神祭　四月中の辰山城乙訓郡西岡向日明神の祭禮なり

水屋能　四月四日五日南都水屋川の南水屋の社祭禮地人能樂を勤むを云

戸明　四月八日より信徒大和大峯山上へ參詣すこれを戸明と云九月八日を限とす

山崎祭　四月八日山城酒解の神社祭禮なり

戒壇堂開帳　四月八日江州比叡山戒壇堂開帳あり諸人參詣す女人常に登山を許されす今日女人に許して花摘の社に詣しむこれを花摘と云

花摘

灌佛　四月八日は釋迦降誕の日なり釋尊を浴するに香水を以てす是を五香水と云　像を安置する小堂花を以て飾りたるを花御堂と云甘茶は浴湯なり參詣の衆生これを乞ひて咒ひに用ゆ龍華は菩提樹を名すけて云此樹下に彌勒始て正覺を唱へ給ひし故龍華會の名あり今日人家竿頭につゝしの花を束ね屋上に供するを竿つゝしと云

五香水甘茶御堂花龍華會竿つゝし

浅間登山　四月八日信州淺間山今日より參詣を許す

鼻高　四月八日南都興福寺にて行ふ佛生會なり舞を奏する假面の鼻高きを以て云

地主祭　四月九日京都清水地主權現の祭禮なり獅々舞田樂舞あり

嵯峨祭　四月中の亥の日愛宕權現祭禮なり屋臺傘鉾を出して風流なり

練供養　四月十三日十四日大和當麻寺にて修す中將姫忌日なり惠心僧都始て此法會を行ひ給ひしと云

神衣祭　四月十四日伊勢神衣祭は氏人麻をうみて和妙荒妙の神衣を織て奉るを云

土塔會　四月十五日四天王寺土塔塚の前土塔の宮あり仁王經法則舞等あり

千團子　四月十六日江州三井寺鬼子母神へ、今日諸人參詣す此神一千の子あるを以て一千の團子を供す

日光祭　四月十七日日光社祭禮なり

和歌祭　四月十七日紀州和歌山東照宮祭禮なり

泣祭　四月二十日奥州平泉安部宗任女の墓里民男女共に白衣を被り踊りて吊意とす是を泣祭と云

以下三月亘

夏籠　夏安居中飲酒魚類を斷つを夏斷と云安居中經文を書寫するを夏書と云諸靈有緣無緣の菩提を吊ふ爲日々供するところの花を夏花と云一夏は九旬の間一旬は十日則九十日間を云ふなり

結夏　夏居斷書經花夏

夏行

一夏

公事故事

青簾　青葉の簾とて四月朔日より大内に新らしき簾を懸らるゝを云一説に加茂の葵を翠簾にかけらる故青葉の簾と云ふとそ民家の青簾になしたる作例多し汎く活用して可なり

扇を賜　季節あらたまりたる始とて臣下に扇を賜ふとそ扇の拜と云へるも意味同し

扇拜

五月

乾坤

皐月　皐月はさなへ月を畧して云

仲夏　仲夏は夏のなかなり

鶉月　鶉月は月令に日月令鶉首といへる故名つく

蒲月　蒲月菖蒲を云ふなり

夏蒲　夏五は夏のなかはなり

五月　夏半も夏五に同し

半月　早苗月は早苗を取る月なれはなり

苗月　月見す月は雨多くして月を見ぬなり

月見す　端は初なり午は古にて五と通用す因て五月五日の稱とす

端午　五月五日は菖蒲の露又は藥草なとを用ひて邪疫をさくる故藥の日と云

藥の日

幟　五月五日男子の成長を祝してこれを建つ其家の紋所又は武將を描きたるもの多し

飾兜　五月五日男子ある家には甲冑兵器の類を飾りて祝ふ

菖蒲太刀　端午に用ゆる處の木刀を云其形ち相似る故なりと小兒石戰の戯れに帶す

神水　五月五日午時雨降れは急に竹を切るへし竿の中に滴る水ありこれを神水と云此水を飲めは百病を治すと或は丸藥を製するもよしと

印地打　五月五日兒童柳の木を以て大小の刀を作り鳴川のほとりに出て右左につらなり礫を打つ是を印地打と云

竹醉日　竹迷日とも云五月十三日竹植る日なり

虎か雨　五月廿八日降るところの雨を俗に大磯の虎曾我祐成に別れし泪變して雨となるよしに云

黴雨　立春後凡百三十五日を黴雨とす諸物皆黴腐る

入梅　入梅は立夏の後庚の日を入梅とし壬の日を出梅とす梅の實黄はみ落んとするを以て梅雨と云其間降雨連日物濕潤して鬱々し

五月雨　五月降續く雨を云さみたれはさつき雨降るの略なり

五月晴　五月雨の晴るゝを云

五月闇　五月雨降續て暗黑なる夜のさまを云

船風　入梅中小雨降なから折々晴んとする景色あるを白はゐと云

黑はゐ　入梅中今も降へき空の明るくなるを黑はゐと云

半夏生　半夏藥草なり夏なかは生す故に季節に比して云

芒種　小滿より十五日後を芒種の節とす芒生して穀を種ゆる故なり

夏至　芒種より十五日の後なり日の永き極なる故夏至と云

富士野男　富士山雪解の頃野男の鍬をかたけたる形ち顯はる農民此時を考て田を植ると云

植物

菖蒲葺　五月五日邪氣を避る爲菖蒲蓬棟を軒に葺く

菖蒲引（蓬ふく　あふらふく）　池沼なとにて引くを云

揀を佩ふ　五月五日あちふの葉を佩れは惡氣を逐ふと

蘭湯　五月五日蘭湯に入浴すれは邪氣を除く

菖蒲湯　五月五日菖蒲湯に入浴す前註に同し

競苅　五月五日百草を採ることなり競駈競狩とも云

藥草摘（蓬苅）　五月五日收採るをよしとす殊に蓬を苅てもくさを製す

鬪百草（草合）　五月五日種々の草をよせ合せて爭ふことなり草合とも云

花かつみ　諸說多し花かつみは菰のことにて花ある菰なりといへり

眞菰苅　水中に生す葉蒲葦の如し五月を苅順とす

田植　早苗取　早乙女　田植唄

菱の花　五月苗代田より拔取るを早苗取と云農民男女混同して苗を挿むを田植と云苗を植るものを早乙女と云各音を揚て颯ふを田植唄又は田唄と云

川骨　水中に浮ひ両々相差ひて蝶の翅の如し五月小花をひらく

藻の花　葉は芋に似て厚く光ありて黃花をひらく

藻種類多し葉の長きものを馬藻と云ひ葉細きものを水蘊と云點々小花をひらく

萍の花　葉圓く小にして一莖一葉根水中にありて五月小白花を開く

蓴（ぬなは）菜　水上に浮ひて生す莖葉ともに滑にして食用とす五月黃白色の花をひらく

花菖蒲　一莖を抽て花を生す燕子花の如し水菖蒲に似て花をひらく故花菖蒲と云

紅の花（末摘花）　花紅色葉は藍に似たり此花初め末より次第に咲けは隨て摘む故に末摘花と云

鐵線花　苗古根より生す六瓣黃白花莖細くして甚强し故に鐵線と名つく

萱草花　五月莖を抽て黃紅色の花を開く六出四垂朝に開き夕に萎む

紫陽花　莖叢生す花葉とも繡毬に似て淡色碧四葩なり開て後或は淡く或ば濃く變色す

石菖　水石の間に生す葉韭の如し一種錢蒲と稱するもの葉一寸はかりなり水盆に栽て机上に置けは眼を害せすと云

酢漿艸　一名酸母苗高さ一二寸叢生てし地に布く夏日小黃花を開く

南天の花　五月小白花をひらく此樹長し難しと雖も山陽の地には大木ありと

無花果　一名映日果其實初め青く熟すれは紫黑色味甘し

未央柳　一名金糸桃高さ二三尺葉は柳に似て叢生す

梔子の花　葉兎の耳の如くにして深緑なり白花を開く酒盃の形ちに似たるを以て梔子の字を用ふ

さるとり花　菝葜と云さるとりいはらなり山野に生す葉柿に似て黄なる花を開く一説にさるとりの花は秋咲よし云へりされと俳諧の季には古く夏に用ひ來る

金銀花　忍冬の花なり初てひらく時白色二三日を經れは黄色となる新舊咲交りたるさまを金銀に見立て名つく

榊の花　榊は四時凋ます小白花をひらき實を結ふ

皐月つゝし　杜鵑花又は石巖花と云此花杜鵑啼く頃開く

合歡花　五月花ひらく花上半は白下半は肉紅なり暮に至て合ふ故に合昏と云

栗の花　高さ丈餘葉櫟に類す花青黄色なり

柘榴花　柘榴種類多し花深紅なり又白花黄花あり

楝の花　あふちは葉蜜にして槐の如く五月花をひらく色紫紅なり雲見艸と云

生胡桃　花は栗の如く實は青皮肉ありて是を包む其形桃の如し

桑の實　正字甚なり桑の實は初め青く漸にして赤色熟して黑紫色なり

百合の花　姫百合鬼百合　黑百合　博多百合　透百合　鹿の子百合　種類多し葉竹に似たり花種類によつて大小異なり

袂百合　花大にして上に向き又横に垂る溪間に多し繩に縋り下り僅に袂に入れ又縋り上る故袂百合の名ありと

苔の花　陰濕の地苔蘚に生する花しべの如きものを云

鴨足艸　一莖一葉小葵に似て小花を開く淡紅色陰濕の處に繁茂す

朝露草　銀錢花　花楮に似て白青く葉五出にして高さ二尺斗朝に開き夕に萎む

草石蚕　チヨロキ異名　甘露子　滴露　地瓜子　五月根を堀り蒸して食ふ味百合根の如し根の形老蚕に似たる故名つく

蚊屋釣艸　此草香附子のな雄りと云茎二稜あり小兒中間を裂き廣け蚊屋釣の狀をなし戯とす

蛇牀子　ヤブジラメ芹に似て食へく實の大さ麥の如し両々相合して毛あり人の衣に附く

夏菊　菊は秋を最上とす夏冬ひらくもの品種劣る

朝菊　四五月花開く野菊の如し朝にひらき夕にしほむ

撫子　大和撫子　唐撫子　川原撫子　鶯撫子　藤撫子　種類多し撫子　石竹　常夏　三品同種なり葩のめぐりきさみあるものを瞿麥とし切れはなれなきものを石竹と云盛り久しければ常夏と云へり花紅紫にして愛らしきを以て撫子の名あり

常石竹夏

十薬　一名　菹菜　花四ひらにして白し葉腥きを以て魚腥草と云

天南星　三月苗を生す茎の高さ一尺葉蒟蒻の如く五月黄花を開く

杏子　酸味を帯るもの梅杏と云ひ黄にして橘の如きもの金杏と云

青梅　未た黄熟せさるを云

楊梅　形楊子の如くにして味ひ梅に似たり故に名づく

李　五六月熟す　皮薄く紅なり味甘き中に少しく酸し

枇杷　四五月實る黄色にして小毬を連ねたるが如く皮うすくして味甘し

青抽瓜の花　青く小さきうちを取り割烹に添へて香氣を賞す　花黄色　越瓜　胡瓜　等總て瓜類の花を云

越瓜　地に付て蔓を伸す淺く塩積となして食用とす

胡瓜　三月苗を生し四五月黄花をひらきて瓜を結ふ

茄子　一名　紫瓜子　崑崙瓜　草鼈甲　夏盛に生育して秋に至る

粟蒔　五月種を下し八月熟す

秬蒔　四五月種を下す小秬は六月にも蒔と云

胡麻蒔　四五月雨後濕りある時蒔をよしとす

稗蒔　五六月時を定めず洪水旱損などの時苗の跡へ蒔て作る

蠶豆引　そら豆は莢上向く故此名あり引は取收むるなり

豌豆引　一名　胡豆　胡戒とも云是を引收むるなり

莧　莖葉　赤紫色　五六月細花を開く

馬齒莧　其葉並ひて馬の齒の如し六七月細花を開く

あかざ　藜は四月苗を生す莖葉ともに大也若き時は食用となり老て莖は杖となる

早松茸　松茸は八九月の頃を盛とす五月出るものを俗に早松茸と名つく

夾竹桃　葉桃の如く枝柔にして竹に似たり花紅白二種あり

若竹　筍の成育せしもの今年竹と云

竹植　五月十三日を竹醉日と云此日竹を植れは極めて生育容易なりと

海帶苅　荒布は昆布に似て色黑く長きもの四五尺あり海人鎌を以て苅る

和布苅　南海に生す紫苔に似て色青く苅ること前註に同し

生類

蟬（初せみ）　蟬は両翼啄長く腹部の側面に薄き膜あり此膜の振動により て聲を發す初聲をはつ蟬と云

鶯音を入　仲夏鶯歌の歇むを云

水鳥の巣　水禽は菰葦の類ひに依りて巣を營む

鳰の浮巣　鳰はかいつふりを云蘆の莖に巣を掛け水量に隨ふて浮ふ其さま巧妙なり

水鷄　頭翅とも蒼黑の斑あり大さ鳩の如くにして尾短く脚長し夜啼て旦に至る其聲人の戸を敲くに似たり水邊に有て曉を告る故此名あり

鴨の子（かるの子）　輕鴨の春月去らすして生む處の子也野水田溝に生育すかりの子とも云

羽抜鳥　諸鳥羽毛の脱落を云

五位鷺　昔神泉苑へ帝御幸ありし時一羽の鷺宣旨そと承りて飛歸り捕はれたる神妙を叡感ありて位階を賜はり五位鷺と云とそ

鹿の子　五月漸く成長す麋鹿の子なり

獣狩　闇夜樹蔭に篝を焚獣を狩るを照射と云小炬を串にさすを火串と云妻戀る鹿など火影により來り牝牡目を見合す時其目を的として射るをねらひ狩と云さつをは其狩人を云ふなり

照射
ねらひ狩
火串
さつを

小鰺　鰺の小なるもの

麥わら蛸　仲夏風味のまされる時を云

虹　糞土中に生する虫なり

蠁　酒酢の上に群かる小虫なり大さ一分に過す

蛇衣を脱　木石の間又人家墻上などに脱す

蚊袋　布又は紙袋を竿頭に結ひ付て蚊を取るの具とす

蠅叩　厚紙などを曲け柄を付けしもの蠅を減殺なす具なり

蟷螂生　原野雜草中蟷螂の初生を云

衣食

粽　角粽　錐粽　九子粽　菰粽　飴粽　蘆粽　笹粽　かさなり粽　粽は千卷なり多く卷といふこゝろなり端午嘉儀の物とす

柏餅　五月五日米の粉を調和して餡を包み柏の葉を抱合して蒸したるもの

菖蒲酒　五月五日菖蒲を切て酒に浸し是を飲めは疫病を避る

帷子　夏月用ゆる處の麻織衣類を云

羅　都て薄織の絹布を云

單衣　衣の裏なきもの

單羽織　夏月着用する處の薄羽織をも云

辻か花　紅染帷子をつゝし花に見立て云

晒布　麻布半さらし等總てを云

木布　木布は麻布葛布等のいまた晒ささるものを云布さらす又は布とはかりは雜なり

新茄和　茄子の和物を云

酢を作る　夏月は酢の需用多き故なり

神釋

松本祭　五月朔日江州大津松本村平野大明神祭禮なり

加茂足揃　五月朔日壯者廿人を撰み烏帽子淨衣着用して初め一人宛馬にて馳せ其遲速を考へ後二人をして乘らしむ是を足揃と云

鮎取神事　五月朔日山川祭とて伊勢宮川にて千三百三十三尾の鮎を取り是を神供とす

藤の森祭　五月五日山城藤の森祭禮なり社家甲冑騎馬の行列して神輿に供奉す藤の森の馬場にて走馬あり其式壯觀なり

加茂競馬　五月五日なり競馬は五穀成就天下泰平の爲寛治七年より始る乘る處の氏人廿名左の方は赤袍右の方は黑袍にて先つ第一番をはしむ初は左右馬一頭宛馳す是を空走りと云其後各並ひ馳て勝負を決す

生玉流鏑馬　五月五日大阪生國魂神社流鏑馬執行

新宮祭　五月五日江州三井寺山中新羅明神祭禮なり

宇治祭　五月八日藤原忠文公祭禮當社を宇治の離宮と云平等院に向はしめて此寺の鎮守とす青梅苣の両種を神饌に供するよし云へり

室祭　五月十三日播州室明神の祭禮なり當社は京都上加茂と同体なり

今宮祭　五月十五日山城愛宕郡紫野牛頭天王の祭禮なり

両社祭　五月廿三日江州　若宮　酒井両社の祭禮を云

團扇撒　五月十九日南都招提寺開山忌なり今日本堂にて團扇をまく參詣の人拾ひて雷除の守となすよし云へり

有無の日　五月廿五日村上天皇の御國忌なり廢務の日に非されとも政行はれす急事に應して俄に政事ある故有無の日と云

富士垢離　五月廿五日より六月二日に至る迄富士川の邊に出て垢離をなすこれ富士參詣に同しと云

住吉御田植　五月廿八日攝州住吉の神田を植るを以て神事を行ふ古例に因り堺乳守の遊女早乙女を勤しか今は浪華の遊廓より出る

大原志　五月廿八日丹後大原神社祭奠參詣多し春の部三月廿三日大原春さしと云へる條に委しく註したれは照し合て見るへし

山田御田扇　五月廿八日伊勢山田太神宮の御田植なり寶前にある處の扇を御田扇と云是を以て田を煽く形容をなす虫の患を除く爲なりと

曾我祭　五月廿八日は曾我兄弟の忌日なり東海道厚原と云ふ處に兄弟を神に祭り八幡と號す

祇園御輿洗　五月晦日加茂川にて祇園御輿洗ありしを云今は絶ゑたり

公事故事

騎射　五月五日豊樂院に於て昔は弓術を御覽せし事ありこれを馬弓とも云

菖蒲輿　五月五日左右の近衛兵衛の六府あやめの輿を南殿の東西に立ることなり

菖蒲の机　五月五日菖蒲を机に載せて奉るを云

左近眞手番　五月五日左近の馬場にて騎射する事なり右近の馬場は六日にあり引折の日と云ふは近衛の隨身褐の尻を引折て着る故なり左近の荒手番ひ五月三日右近は仝六日にあり

艾虎（艾人蒲人）　五月五日唐土にてはよもきを以て虎の形ちを作る故艾虎と云同しく人形を作りて艾人と呼ひ菖蒲にて作りたる人形を蒲人と云何れも是を門戸に掛て邪惡を避るよしに云へり

守宮を塗る　五月五日守宮を取りて飼置丹砂を以て彩り次の歳此日是を搗て人の臂に塗れは邪疫をはらふと云

藥玉　五月の玉　五色の糸を以て百草の花を貫きしもの是を臂に掛れは惡氣を拂ふと云

長命縷　續命縷　五彩糸　朱索　條達五月五日色糸を以て作りしもの是を臂に掛れは瘟を病すと云

五月鏡　五月五日午時唐の楊子江にて銅を百度練て明鏡を鑄る是旱天に雨を祈れは驗ありと

梟の羹　梟の灸　五月五日梟の羹を作て百官に賜ふよし漢書に見ゆ此羹又灸を食ふは梟は惡鳥故滅殺の意なりと

桃印符　五月五日彩る絹に篆字の符を書き屏風又は凡帳に掛置けは惡氣を退くと云

赤靈符　赤靈符も同しく此符を書く是兵乱を避る咒咀なりと

競渡　五月五日屈原汨羅に沈み死せし日なり是を救ふ心にて今日競渡とて小舟に乘りて先を爭ふ

飛鳧車　舟の輕く早きを水馬と云越人船を車と云ひ揖を馬と云鳧車飛鳧は其舟の輕きに比してなり

粉團　唐の宮中端午の日　粉團を作りて金盤中に置き小弓を以て是を射せしめ的中するものは食ふことを得ると云水團を白團と云ひ花果などの形方に作りしを滴粉團と云これ皆遊戯なり

白滴粉團

六月　乾坤

水無月　みな月は水なし月を約めて云

旦月　旦月は爾雅に六月を旦と云

庚伏　庚伏は六月火盛にして金火を畏る庚日心を伏すより出つ

元陽　元陽は旱を云

季夏　季夏はすゑの夏なり

晩夏　晩夏はおくれたる夏を云

林鍾　林鍾は衆なり鍾はあつまるを云林鐘と書くは甚誤也

風待月　風待月は風の稀なる月なれはなり

鳴神月　鳴神月は雷多き故名つく

溽暑　溽は濕なり土の氣潤ふか故に蒸鬱として濕暑となるを云

氷室　氷室の氷は四月朔日より九月迄献するものなれとも六月一日を專とす氷を奉るを氷のおものと云ふ氷室の雪は氷室に圍ひたる雪を云氷室守は氷室を守る人なり氷室山は　丹波大和　河内　山城等所々にあり

氷室守

小暑　夏至より十五日の後を小暑の節とす

大暑　小暑節より十五日の後を大暑節とす

極暑　炎熱極まるを云

暑き日

暑さ

炎天　金を流し石を爍す大暑の空を云

日盛　炎威逞しき日午を云

三伏　夏至より三の庚日を初伏とし四の庚日を中伏とし立秋より初の庚日を末伏とす是を三伏と云ひて炎暑の極とす

土用　土用は四季ともにあれとも夏を以て正とす何故なれは春は木　秋は金　冬は水　なれはなり土用中は十八日間を定數とす一ヶ年合して七十二日なり十九土用と雖も晝夜の差別を以て起算すれは全くの日數は十八日となる割合なり

温風　温風はあたゝき風なり是小暑の節に至りて吹を云小暑節は前に註せり

薫風　炎暑中に吹ける東南の風を薫風と云

涼風　苦熱を慰する夏日の風を云

月涼し　霽月の涼氣を云

露涼し　露は秋最も多けれとも晩夏露ある故露涼しとして夏季とす

納涼　夏月清流等に臨みて涼をいるゝを云

川原すゝみ　夕すゝみ　納涼床

船遊　暑を避ん爲酒肉など携へ舟を泛へて遊歡なすを云

青東風　土用中一点の雲なく青みたる天氣に吹東風を云

青嵐　前註に異ならす

雲の峰　夏雲奇峰の如き狀を云

夕立　夏天の暴雨を云

滴　山中岩間などのしたゝり水を云

泉　水の本を源と云源を泉と云いつる水を略せしなり

泉殿　泉の邊りなとに造りたる殿舍を云

清水　岩間又は路傍なとに流るゝ清涼の水を云旅中の苦熱を慰するなと題の本意なり

清水むすふ　清水かもと

土用干　土用中晴天の日衣服書畫等曝すを云

虫干　虫拂

さらし井　井戸替　六月井を浚ゆれは瘟疫を去ると云

富士の初雪　凡毎年六月中旬を富士初雪の期とす

嘉定喰　昔室町家納涼の遊ひに揚弓を射て負たるもの嘉定錢十六文を出して何にても喰物を買ひもてなしけるとそ嘉定は宋の年號にて七年迄毎年錢を鑄さしめしるしあるを以て此元年よりの錢十六文を用ゆる故嘉定喰嘉定錢とも云

掛香　薫衣香香囊なり夏日衣類に佩て惡臭を避く

簟　簟は竹筵なり夏日之れを敷く

竹婦人　籠枕　青奴　抱籠　脚馬　竹奴　夏月の夜これを抱きて涼を取る具とす籠枕は籠にて製したる枕なり同しく涼氣を呼ものとす

香需散　暑氣の頃專ら用ゆる藥餌なり

霍亂　中暑の病名なり

夏瘦　苦熱の爲身体の疲瘦なすを云

夏ぶし　暑中發する小兒の頭瘡を云

汗瘡　熱沸瘡とも云夏日汗の爲身体に小瘡の發するを云

黐搗　其樹數種あり深山にあるは葉大なり木の皮を剝て水に浸し爛らして是を製す

夏引の糸　夏引の糸は麻のことなり夏引の白糸は夏蚕の糸を云

秋待　秋涼の來るを待意なり

秋隣　秋近し　秋深し　夏の別　秋隣秋近し等何れも夏の限を云

植物

氷室の櫻　氷室山の時候後るゝを以て六月に開く櫻花を云

蓮　池見草　露堪草　水堪草　異名なり　白蓮　紅蓮　あり

蓮の實　蓮の實夏なり蓮の實飛ふ秋なり

澤瀉　一名燕尾草燕の如く葉先尖りて後ろに岐あり小白花を開く

ひつゝ艸　河骨の類にして其葉蓮の如く夏日午時に至て開き未の時萼む故此名ありと睡蓮とも云

蒲の穂　蒲の花の形ち鉾に似たり蒲鉾とも云

夕顔　棚を搆へて蔓を這しむ暮に至て花開く故に夕顔の名あり

鼓子花　朝貟に似て稍小なり日午開き暮に至て萎む依て晝貟の名あり

風蘭　一名桂蘭小にして花葉共蘭に似たり風を好んで茂生す故に此名あり

時計艸　細く蔓を出して竹木に取付て登る花の形ち鐵線に似たり朝開き暮萎む花開く時回る藥あり時計の機械に似たる故此名あり

射干　ヒアフギ高さ一二尺葉狹くして長し横に張ること鳥の翅の如し花黃紅色なり

日向葵（日車）　葉大く莖高し六月花開く頂上只一輪日に付て廻る故に日廻り又日車とも云

玉簪艸　葉車前の如く六七月莖を抽て黃なる蕊を吐き頗香し簪の形ちに似たり

鷺艸　六月莖を抽て花をひらく白色形ち鷺の如し故に名つく

眠皮　春苗を生す六七月花を開く紅白咲分なり蕓春羅と書く眼皮は俗字也

葎茂る　二月苗を生す莖に細き刺あり葉節に對して生す夏月繁茂す葎とはかりは雜なり

釣鐘艸　一名地參莖を抽て丶紫花又淡紫色形ち釣かねに似たり

虎尾草　長く尖り莖の長さ二尺餘白花開て穂をなす獸の尾の如し

楮花（紙漉艸）　カウゾ花萩に似て黃なり夏の末花を開く此草の皮を剝て紙を漉く

麒麟草　高さ尺餘葉淺緑にして鋸齒なり花黃色

赤草　一名山酸漿高さ七八寸はかり夏日其莖葉眞紅なり

青鬼灯　青しと云ひて夏季とす

綿の花　四月種を下し晩春花開く葵の如し雨濕多ければ害あり

紫蘇　春芽を生す長して漬梅の資料となす

茗荷の子　葉甘蕉に似たり俗に夏あるものを夏茗荷と云ひ秋生するを秋茗荷と云へり

麻苅　麻を夏とし二番苅を秋とす櫻麻は其花櫻に似たる故なり

藍苅　四月苗を植凡七十日斗りにして苅る

菅苅　菅の葉は茅に似たり苅て乾燥し笠に縫ふ

蘭苅　土用に入て苅る疊の表に用ゆ

櫟の花　四五月花開く栗の花の如し

青田　青稻數里に連なり矚目限りなき景狀を云

田草取　植て後廿日前後田の雜艸を除き去り其根を固くす秋に至る迄三回是を一番艸　二番艸　三番艸と云

豆　蔓長く其莢尺餘實凡十八斗あるもの俗呼て十八さゝけと云

隱元豆の花　春實を植蔓生す紫花を開く

糸瓜の花　六月黃花を開く胡瓜の花に似たり

瓜　甜瓜　越瓜　姫瓜　胡瓜　等總名なり

眞桑瓜　美濃本巢郡眞桑村より出るもの上品とす因て瓜の總名眞桑をさして云へり

姫瓜　色白く甘き故姫瓜と云小兒眉目を畫きて玩にもなす

凌霄花　樹に纏ひて蔓生す一枝數葉花五瓣頗黃色にして細点あり

葛の花　蔓長く豆の花に似て大なり實も亦黃色豆の莢の如し

百日紅　高さ丈餘花紅なり四五月始てひらき接續して六七月に至る幹滑にして猿登ること難し故に猿すへりと云

早桃　桃の實の一種早きものを云

林檎　文林郎果と云五色林檎を最上とす

木耳取　朽木に生す一名木峨と云六月是を取る

竹の皮拾　筍成育して籜を脱す是を拾ふを云

昆布苅　土用中北海に波穏なる時是を苅ると云

生類

練雲雀　六月雲雀毛を替る時を練雲雀と云此時飛こと速ならす鷹を放ちて捕はするを雲雀鷹と云

鷹羽遣ひ習　季夏鷹の雛屢飛ふことを習ふなり

腐草螢と成　腐草暑熱の氣至れは變して螢となるよしに云

空蟬（せみの殼）　蟬の皮を脱したるもの

蟬の諸聲　土用に至りて山野に多く鳴立るを云

火蛾　俗云火取虫夏の夜燈火をめくりて終に燈油中に死す

狗蠅　一種犬に寄る蠅を云

夏虫　夏の諸虫なれとも殊に火蛾をさして云古歌には螢を夏虫とせり

金亀子　雄は緑色光あり雌は灰色にして光なし寸餘細長く六足あり俗玉虫と云

毛虫　大小あり灰色又は斑毛人を螫す後羽化して蛾となる

蠓　マクナギ　蠅に似て小さく灰色にして大さ一分に過すひとつは上りひとつは下り臼つくか如し此虫飛散するときは必雨近しと云

蟐　スクモムシ　其形ち蚕の如し濕熱の氣に化生して蟬となるよしに云

蠛蠓　微細にして人目に解れす蚊の睫に集り居るよし云傳ふ目に見ぬ鳥は此異名なりと

海月取　海母とも書く中國九州の海中月夜漁舟を出して取る

鯖釣　能登海邊殊に多し數千浪に漂ふ處を漁す

川狩　夏月種々の漁具を携へ魚を取る夜に狩るを夜振と云

纏　纏は竹を交叉して張たる小網四ッ手は大なるもの

四手網

衣食

氷餅 六月一日舊冬雪水にて製したる粉餅を食ふ是を氷餅と云

一夜酒 醴は邪氣を拂ふものなりとて夏月多くこれを飲用す

麻地酒 麻地酒は豊後より出るを佳とす其法糯米粳米を等分に合製して冬日寒水を用ひて是を釀し土中に埋め草茅の類ひを以て覆ひ夏土用に至て堀出す炎暑の候飲用して是を賞す

夏切茶 夏月新茶壺の對を切るを云

水の粉 水の粉は麥を焦さす製したるを暑中砂糖に和し冷水に浸して飲む

葛水 葛の粉を夏月冷水に和して飲めは渴を解き胃を傷はすと云

砂糖水 冷水に砂糖を和したるもの

振舞水 夏日店頭に瓶を置柄杓茶碗を添へて往來炎暑に苦しむ人に飲しむ是を振舞水と云

心太 石花菜 瓊脂菜 寒天にて製したるもの夏月冷水中に突落し砂糖を用ひて食す

氷賣 氷店 夏日氷室の氷を街衢に賣歩行を云

削氷 削氷は削り碎きたるもの

切麥 切麥は温麵のことなり温麵は細き温飩なり

冷麥 冷麥は切麥を冷水に浸したるもの

冷蕎麥 何れも其物を水に冷却して用ゆる義なり

干飯 糒は糯を飯に焚き乾燥したるもの夏日冷水に浸して食す道明寺糒と同物なり

干瓜 新瓜を切て塩を當日に乾したるもの酒に浸して食す

奈良漬 酒糟に瓜類を漬けたるもの

煮梅 熟せし梅の實の煮たるを云

梅漬 梅の實の熟したるものに紫蘇を和して塩漬になすを云

納豆仕込 干梅 塩漬になす時日に晒すこれを干梅と云

醤油造 僧家にて多く是を製す鹹豉の法より出ると云

六月を釀造の季節とす

干瓢剝　土用中取りて薄く剝て乾燥す雨に逢ふときは色を變すと云

沖鱠　海邊船遊の時沖にて漁りたる魚を直に酢に和して食ふを云

皮鯨　皮鯨は夏月味噌汁又は酢味噌和へなどになして賞す

掛鯛下ろす　新年竈の上に掛けたるもの六月朔日下ろして是を食ふ邪疫を避るものなりと

洗飯　夏日飯を水にて洗ひ用ゆるを水飯とも云

水飯　夏日飯の腐敗し易きを防く爲笊櫃を用ゆ

笊

腹當　夏日小兒腹部の露出を厭ひて用ひ

汗取　袖の端なきもの又は管製の襦袢なとも云

神釋

富士詣　六月一日より廿日に至る間諸國より富士山に攀登して參詣なすを云

愛染參　六月一日愛染祭大阪北野太融寺殊に參詣多し

六月會　六月四日叡山にて是を行ふ傳教大師の忌日なり傳教會又は長講會とも云

富士市　六月一日東都駒込權現へ參詣多し賽人氷餅を求て歸る

鉾鬮　六月六日祇園鉾行列の前後抽籤を以て定むると云其中に長刀鉾　函谷鉾　放下鉾　等鬮に及はさるもの有と云

六月七日より十四日に至る祇園祭禮なり

長刀　放下　岩戸　孟宗　占出　郭巨　琴割　蟷螂　白樂天

太子　木賊　芦苅　山伏　花盜人　天神　傘

以上の鉾　七日

鯉山　橋辨慶　黑主　惡候　行者　鈴鹿　鷹觀音

以上の鉾十四日

西は三條より東は京極を經て四條通を過て各本所に歸る京都祭禮中の冠たるものにして美觀なり

祇園會

鉾

津島祭　六月十四日十五日尾張國海部郡藤波の里津島の社祭禮なり數千の提灯水面に映して頗壯觀なり

住吉御輿洗　六月十四日攝州住吉海濱にて神輿を洗ふ參詣の人其潮水を浴す是皮膚の病を除く爲なりと

東都山王祭　六月十五日東都山王祭は練物鉾の類を出して頗賑し

竹生島祭　六月十五日竹生島祭禮湖上に船を浮へて音樂を奏す

博多祭　六月十五日筑前博多櫛田神社祭禮木偶に鎧を着せて階上に立るると云

吉田祭　六月中の子京都吉田社祭禮倭舞あり

伊勢祭禮　六月十六日度會宮祭仝十七日大神宮祭禮なり

相國寺犢法　六月十七日京都相國寺閣上に於て犢法を修す寺中定家卿の墓あり

座頭納涼　六月十九日撿校勾當京都淸聚庵に集り納涼なすを云

上難波祭　六月廿一日大阪上難波祭禮俗に博勞町稻荷祭と云

熱田祭　六月十九日尾張熱田神社祭禮五穀豊登を祈る爲なりと

鞍馬竹伐　六月廿日鞍馬樂師堂前にて竹二本を横たへ法師廿人山刀を以て伐る是れ峯延和尙の呪文にて一蛇を斬り又開山鑑禎和尙の一蛇を救ひ護法神となせし遺意なりと云

座摩祭　六月廿二日大阪座摩神社祭禮御旅所へ渡御あり

嚴島祭　六月十五日より十七日迄藝州宮島祭禮諸方の商人六月初旬より群集す是を町入と云

愛宕千日詣　六月廿四日京都愛宕へ參詣すれは平日の千度に當ると云廿三日の夜より諸人松明を携へ登山なすと云

天滿祭　六月廿五日大阪天滿天神社祭禮船渡御ありて川筋は篝火又は數萬の燈火にて壯觀なり

橋立祭　六月廿五日丹後橋立切戸文珠會橋立祭禮なり

石奠參　六月廿八日相州大山石奠大權現へ參詣す是を初山と云又七月登山するを盆山と云志願あるものは大小の木太刀を携へて納む是を納め太刀と云

辛崎參　六月卅日唐崎大明神へ參詣すれは平日の千度にあたると云

御手洗詣　京都下加茂東の川邊にて祓を修す六月十九日より晦日迄諸人糺の納涼を兼て參詣多し是を御手洗詣と云

住吉御祓　六月晦日攝州住吉の神輿堺御旅所へ渡御あり是を荒和の祓と云

道饗祭　鎮火道饗は共に疫神なり鬼魅の京路に入らさらん爲路上に供物を供へ六月晦日道饗を祭る

鎮火祭　卜部氏の人火を打て宮城の四つの隅に祭る火災を防かんか爲なり

雨乞　旱天農民の諸神に雨を祈るを云

夏祓　六月晦日夏祓をなす名越とは神を和す義なり夕祓とは夏の夕方涼風を得修するの意なり御祓川は御祓をなす川を云

名越祓

夕祓

御祓川

麻の葉流す　夏祓に麻の葉を切て幣とする故御祓の川瀨に流すなり麻の葉を祓草と云

祓草

形代　紙にて人の形を作り身体を撫て御祓の川に流すなり撫物とも云

川社　夏祓の時川邊に棚を搆へ神を祭るを云

茅の輪　六月三十日茅萱にて作りし輪を諸人に潜らしめて災を脱せしむ是れ蘇民將來の古事より起るよし云へりこれを輪越の祓と云

小蠅なす神　小蠅なすとは夏の蠅の散り亂れたる如くあしき神あるか爲祓をなすと云

公事故事

一夜酒供　六月一日より七月三十日迄醴を奉るよし是邪氣を拂ふ爲なり

忌火御飯　六月一日御飯御汁四種和布御汁内膳司より奉る忌火とは火を忌むの義にて不淨の火を打かゆることのよし是は神今食の御神事始めらるゝに因ると云

神今食　六月十一日伊勢大神宮を勸請ありて天皇神膳を供しさせ給ふ御事とそ

御躰の御占　六月十日神祇官の官人　主上の玉躰に御つゝしみあらんことを占ひ奏するよ一公事根元に見ゆたり

解齋御粥　六月十一日神今食の後奉る御粥を云

月次祭　是は六月十二月の両度諸社へ御幣を奉らせ給ふ事なり

節折　六月晦日竹にて主上の御丈の寸法を取りて折當るを節折と云節折の命婦宮主に仰せて御祓をつとむるなり

雷鳴の陣　雷聲三度高く鳴る時大將以下御殿へ候して　天皇を守護せしよし公事根元に見ゑたり

蒜根食　土用の入是を食へは疫疾を除くと云

施米　山寺の貧僧に米塩を施さるゝを云

夏終

秋異名

白素摯金短金木金士菊蓐爽少收金朗

藏商歛德暑落勁行感時秋皙成商景

白藏といふは白は秋の金色藏は收藏なり
素商は素も白なり商は秋の律なり
摯歛は收めいるゝなり
金德は盛德在金
短暑は短き日かけなり
木落は木葉落るなり
金勁は金氣方に勁し
金行は德盛んに行はるゝなり
士感は大夫秋に感すと云ふ諺に因る
菊時は時候をさすなり
蓐秋はあつまり收むるなり
爽籟は秋の聲なり
少皙は秋の帝に配す
秋成は收めなすなり
金商は秋の德商は秋なり
朗景は秋の景色なり

秋之部

七月 乾坤

文月　孟秋　上秋　擎秋　首秋　開秋　新秋　夷則　盆月　涼月　めてあひ月　なゝよ月　あきは月

文月とは七夕に供するとて色々の文をひらくゆへ文ひらきの月を略して云

孟はしめなりはしめの秋を云

上秋は三秋の上に立つ故なり

擎秋はしめといふ義

首秋も同し

新秋はあらたなる義

開秋はしめて秋になる月と云ふ意

夷則は律の名なり

盆秋は此月盂蘭盆會をなす故なり

涼月は此月涼風至る故名つく

なゝよ月は牽牛織女と互に愛あふ月を云

あきは月は秋のはしめを約めて云

立秋　けふの秋　今朝の秋

立秋は七月の節なり然れとも和歌連俳には七月一日となせり

東にも立や都のけふの秋　宗祇

凌霄の花吹消して今朝の秋　乙由

來る秋　みそきして歸りもあへぬ袖の露　師繼

曉かけて秋は來にけり

初秋　芦すたれ夕暮かけて吹風に秋の　後嵯峨院御製

こゝろそ動き初ける

殘暑　秋の暑なり句作には殘といふ意たしかにすへし

初嵐　山の氣を嵐と云初秋吹下せはなり

秋の初風　今朝の間にねさめ涼しき夏衣　龜山帝御製

ひと夜に立ぬ秋の初かせ

身にしむ　秋氣膚に感するを云

ひやゝか　秋冷なり涼しといふよりは重く寒しといふよりは輕し

律の調　物に律呂の調子を十二月に分つ時は春秋は律にして夏冬は呂なり秋の聲は律なるを以て季とす

新涼　天高く風清く秋涼はしめて至るを云

花火（はしめて涼し）　夏月より河邊の遊興とす

稲妻　稲の殿　稲つるみ
秋の夜晴て電光を見る此時稲實る故稲妻稲つるみの名あり
稲光は雑なり

七夕　朝貞姫　梶の葉姫　百子姫　薫物姫　さゝかに姫　秋霧姫
糸織姫　以上七姫と云
七夕祭を乞巧奠と云ふことは巧はたくみとよみて女の業の器用になんやうに乞ひ祈る奠は祭なり

七夕笹賣　七月六日明日二星に供する詩歌の短冊を結ふ處の笹を賣る

星合　七月七日夜牽牛織女の會合を云星の契も同し意なり

星祭　星の契　星の手向　七月七日夜庭に筵を敷き机を置瓜果等を供して祭る乞巧の爲なり

天の川　銀河　銀漢　雲漢　星河　河漢　雲の如き白氣空に顯る是を天の川と云

願の糸　七夕祭に竿の頭に五色の糸を掛て思ふことを祈るを云

烏鵲の橋　七夕二星の會合に烏鵲羽を並へて橋となし織女に銀河を渡らすよしに云

庭の立琴　七月七日夜庭上に十三絃の琴を呂と律との調子に合せて柱を立瓜果の類を机に供へて祭る

七箇池　星を祭るに七箇の盥に水を入れて鏡をつけ星の影をうつすを云

ともし妻　ともしは乏の字是稀少の義なり織女をさして逢ふことの乏しき妻といふ意なり

机洗　七月六日机硯を洗ふは二星に手向るものを書ためなり

梶の鞠　七月七日飛鳥井難波両家にて鞠會あり是七夕祭の爲なり

中元　七月十五日を中元と云ひ一月十五日を上元とし十月十五日を下元とす是を三元と稱して嘉儀とす

衝突入　ツトイリ七月十六日器物或は妻妾娘等常に見たしと思ふものを客間居間に限らす深く入て恣に見るをツト入と云近世迄伊勢山田に此事ありし故山田の衝突入と云ひて名あり

踊　踊は遊戯なり本朝神代よりあるもの是なり盆踊とて豊熟の村々に催す

捨團扇　扇置扇忘

秋冷來りて人皆扇團扇を棄つるを云

生身魂

蓮飯　さし鯖

世俗七月に生ける二親に供養として饗應なすを生身魂と云
これも盂蘭盆の修行なり

二百十日

立春より二百十日目なり秋の氣變動する時故必風あり中稻花盛りなれは一大厄日とす

處暑　餞暑

七月節より十五日の後を處暑といふ暑氣既に潛まり處るを以て名つく餞暑は暑さを送るの意なり

不知火

筑前の海上夜陰火の如きものを見る何の故たるを知らされは俗呼て不知火と云ふ江の島の龍燈と云へるも此類なり燐火なるへし

以下三月亘

相撲

両々相あたりて力を競ふ故に角觝と云ふ禁中の外地下に催すものを辻角力と云

龍田姫

秋は龍田の神より事起りて紅葉を詠する故に秋を染る神を龍田姫と云

露　白露の玉　袖露の露

露は陰液なり結ひては霜となる
袖の露は袖の時雨なと云ふに同し泪にも限らす露に潤ひし袖をも云へり

霧　霧の笆　霧の海　霧の雨

霧は立と云ふ露の變するものにて朝夕に深し
霧の立隔てたるを霧のまかきと云
霧の海は野原に下りたる霧の渺々として海の如きを見立て云霧深くして人衣の濕るさまを霧雨と云へり

秋風

秋風は吹すさみ身にしみて哀れを添るさま題の本意なり

秋の水

秋の水は澄て透明なる心又は押水の如き意をも云へり

秋の聲

何となく物に觸れて淋しく凄き聲を云

秋の雨

哀れなるものなれと春雨五月雨の如く晴やらぬこゝろはよろしからすしとしと〳〵降る夕暮のさま又は夜の明やらぬ意なとを題の意とす

秋の山

秋の山は畫ける如く鮮明なるけしきを意とす

秋の宮

皇后宮の御事なり皇太子の宮を東宮又春の宮とも申奉る皇后宮は中宮とも秋の宮とも申奉れは御名によりて季となす

千秋樂　總て舞樂の終りには必しるす萬物の終りを千秋樂と云へるも此義なり千秋の名によりて季とす

新澁　柿一斗に水二升五合を和し碓に搗て搾る其用甚ひろし

植物

梶の葉　梶の歌　七月七日詩歌を書く是二星に供するなり

秋七草　萩　尾花　葛　撫子　女郎花　藤袴　朝貞　撫子　連俳にては夏季なれとも秋にわたり七草の内て咲ものゆへ加はる

芋の葉の露　露とり草　露とり艸と云ふ棚機の歌を書くに芋の葉の露を取る故なり

桐一葉　一葉舟　一葉落て天下秋を知る　一葉舟は水に浮ひたるを舟に見立て云

柳散　蒲柳の質初秋の風を受て散る事早し

楓　青楓　本名を鷄冠木と云和名を楓と云ふは蛙の手に似た故なり　青楓は染さるうち勿論なり

木槿　此花朝に開き暮に落つ僅榮一瞬の義なり

柞　高きもの二三丈葉柏に似たり九月紅葉して冬落つ柞の森雜なり

櫨　漆の類にして秋早く紅葉なす實を蠟に取る

楸　高さ一二丈皮赤龍の鱗の如し葉は三ッに尖り夏小白花をひらく落る事早き故楸と云

木の瓜實　其實は小瓜の如くにして鼻あり花の落し處にして蔕に非す

槐の花　葉細くして青緑なり六月末より七月に至り花をひらき實を結ふ合歡の類ひにて夜眠る

常山花　葉の形ち楸に似たり甚臭き故クサギの名あり白紅交はりし細花を開く

桃の實　桃の質成育し易く木兆に隨ふ十億を兆と云其實多きを以てなり

なつめ　大なるを棗と云ひ小なるを棘と云

蒲萄　棚上繁茂する事數丈三月小花を開き八月實を結ふ連なりて星の如し紫白の二種あり

朝顔　朝毎花開くを以て名つく

蘭　一幹一花にして滿室盡く香し

藤袴　原野にあり女郎花の枝に似たり薄紫の花をひらき香は葉にあり

秋海棠　一名斷腸花　性陰を好む花の姿色海棠に似たる故此名あり

桔梗　桔梗は紫碧のものを正色とす白花又は紫白相交るものあり

女郎花　花は人のよく知る處なり名によせて戀歌に詠す

男へし　花女郎花に似て白し俗をほとちの花を斯く呼へり

芭蕉　和らかなる地に植て育ち易し青葉を生して秋に至る

旋覆花　ヲグルマ野徑水溝の邊に多し一重又重瓣のものあり野菊の黄なるか如し

鼠尾草（水かけ艸）　穗の形ちを以て名つく花赤白の二種あり聖靈に水を手向るこゝろにて水かけ艸と云

五味子　五味子は皮肉甘く酸く核辛く苦く都て鹹き味あるを以て五味子と云

萩　天竺花　鹿鳴草　胡枝花と云　眞萩　糸萩等種類多し

玉みつき　其實は梅嫌に似たり葉を去り實を殘して花瓶にさす

翁草　麥門冬の一種葉大にして麥門冬に等し菊の異名を翁草と云へは混すべからす

觀音艸　葉蘭に少しく挾く短し莖を抽て小花穗をなす淡紫愛すへし

藥師艸（弟切草）　劉奇奴草　青藥とも云花小にして黄なり此草金瘡の藥になる故此名あり

仙翁花　剪紅羅花の形ち刻み有て鋏を以てきりたるか如し秋深紅の花を開く

頼桐　唐桐と云高さ二三尺に過す夏紅花を開く花繁くして盛久し

灸花　和らかなる蔓艸小白花をひらく兒童其花を取唾にて灸するの形容をなす

鳳仙花　高さ二三尺花に紅白二色あり葉長くして尖り桃柳の葉に似て鋸齒あり

夏解艸　夏解草は麥門冬の大なるものなり僧尼夏解の日壇家に送る故此名あり吉祥草とも云

益母草　葉は麻に似たり節々に小花を開き實を結ふ此草婦人の病又眼を明らかになす功あり故に益母と書てめはしきと訓す

曼珠沙華　死人艸　異名烏蒜　枝箭花は莖を抽て色赤く糸を結ふか如し俗死人草と云

鬱金花　異名を王金と云葉芭蕉の如く花白く質紅にして蕗の薹に似たり染色に用ゆるは此根なり

相樸草　石菖に似て穗をなす莖强し小兒引合ひて切れたる方を負とす

茗荷の花　七八月根の側に子を生す是花なり花伸ひさるうち摘て食す

蓮の實　飛　秋に至り黑くなり飛て水に沉む石蓮子と云

夕顔の實　青　瓢　瓠　壺盧　品類多し夏季夕貞の條通はし見るへし

星草　澤中水田に叢生す一莖を抽て形ち蘭に似たり莖頭に圓き白花あり俗太皷のぶちと云

粟の穗　種類多し早中晩あり早晩は皮厚く實少し

稻葉の雲　稻の葉生茂りて雲の如く見ゆる景色を云

室の早わせ　古說さま〳〵あれと夫木集に紀の國の室の早わせと詠みたれは牟婁郡の早わせと云ふ說たしかなりと思ふ

稻の花　富草の花水影草を異名とす

早稻　六七月收るもの早粳とす

刀豆　莢の形ちを以て此名あり

隱元豆　春種を下し秋實多し若きうちは莢共に煑て食す黃檗　隱元禪師來朝の時種を齎せし故此名あり

西瓜　黄檗隱元入朝の時携へ來り長崎に種ゆ　瓜中水多き故此名あり

南瓜　南瓜は元南蠻より渡りしと云ふ黄花を開て瓜を結ふ

以下三月亘

澁柿　柿の種類中品劣り澁み有て食ふに堪へす

野菊　原野に自然と生する菊を云

蔦　蔦は蔓物の總名なり品類多くして其中には紅葉せぬもあれとおしなへて秋の季とす

荻　水邊に生して葭の如し荻に吹風を荻の聲荻の上風と云

芒　葉茅の如くにして長さ四五尺長き莖を抽て穗をなす

糸芒　糸芒は葉細く長さ三四尺一株に數百の莖叢生す抽て花穗をなす

篠芒　篠芒は穗に出ぬ芒を云

縞芒　縞芒は縱に白き文あり

酸漿　一名燈籠草　桂金燈　姑娘菜　四五月に花をひらき秋實を結ふ兒女種を去り舌上に鳴らして翫ふ

草花　秋開く諸草の花を云

草の實　右に同しく結へる實なり

忍草　苔の類にて蘭の葉に似て短く一株六七葉を生す古き築地朽たる軒端などに生するを云

蕃椒　一名天井守　大小長短尖りたると圓きとの二種あり初め青く熟すれは紅なり天井守は悉く上を向くより此名あり

辨慶艸　一月苗を生す葉綠色にて厚く夏小白花を開く枝を折て土中にさせは旬日にして生育す其質强きを以て辨慶に比す

萱草　萱草　萱軒端　萱は秋月苅取て家根を葺く用とす

若烟艸　陀波古　番語なり天正年中南蠻より渡來せしと云へり七八月葉を取り繩に挾み乾燥す是を若烟草と云

綿取　其實桃の如し四つに裂けたる處より綿を取る

午房引　秋月雨後の濕りを量りて引收るなり

糸瓜　花胡瓜に似たり瓜の長さ一二尺深綠色瓜頭鼈の首の如し

冬瓜　大サ西瓜に等しく外面白粉を塗たる如し味ひ甚淡薄なり

芋　粒芋　紫芋　薯蕷　平芋　等種類多し花開くものは長き夢あり

ぬかこ　薯蕷の蔓に生す食用となす

琉球芋　甘藷　元祿の末琉球より薩摩に渡る暖土に適して寒地に成育せす俗薩摩芋と云

生類

鷹の塒出　片塒　両塒　両片　鵰

四月羽毛を替んとする時鳥屋の内に放つ日を逐ひ脱落して新毛を生す七月中旬に至りて舊の如し是を片鳥屋と云二歳毛を替るを両鳥屋と云ひ三歳毛を替るをモロタカヽヘリと云

鳥屋勝　鷹新毛を生し羽翼全く備はり鳥屋を出る時勢ひ特に勝れるを云

初鷹　初鳥狩　はし鷹　塒出の鷹を始て遣ふを初鷹とも初鳥狩とも云塒出の鷹とは羽の出揃ひたるを聖靈會の箸に火を點し夜塒より出す是を箸鷹と云へり

鷹の山別　鷹の山別は七月下旬なり鷹の巣を立ち親鳥に別るゝを云

初鮭　形ち鱒に似て肥大味美なり秋月初漁を得て賞す

虫　虫籠　虫は總名なり虫籠は加茂の社司より出せしもの甚奇巧なりしと云

虫合　虫の音のよしあしを合せて遊ふことを云

松虫　褐色にして髭長く腹黄なり野草又は松杉の籬にあり

鈴虫　月鈴兒　俗云て尻大なり薄暮より鳴く其聲鈴を振るか如し

轡虫　翅薄青く腹黄色両脚長し鳴聲馬の轡に似たり

馬追虫　螽に似て小なり色青く人家近く鳴て其聲牛馬を追ふか如し

蟋蟀　螽に似て黑く翅あり角あり立秋後夜鳴く其聲細し秋の末迄鳴故古歌には霜夜に詠めり

竈馬　蟋蟀に似て髭長く竈のあたりにありて夜鳴く

茶立虫　此虫形ち小にして一歩に満たす二本の鬚ありて灰褐色なり古き障子などに接みて閑寂の夜チャツ〳〵と鳴く故に茶立虫の名あり

絡線虫　其形ち螽に似て大なり六月より七月に亘りて野叢中に鳴く俗キリ〳〵スと云ふは非なりギイといふは機音チョンといふは筬打音機織又はギスと云

蟿螽　ハタ〳〵螽の類ひ大なるは長さ二三寸方なる首目の上に二ツの髭ありよく跳て捕へかたし俗ハッタと云

螽　稲田中に生す此虫性嫉ます雄虫數虫につるむ一母百子を生む故に五百虫イナゴと云

稲虫　螽に類して首に王字あり稲葉を食ひて害す

蜻蛉　秋津虫　種類多しかけろふと云へるは水邊の木蔭に栖みて飛ふ其影水上に閃々として電の如くなれは陽炎に比して云

蟷螂　両臂斧の如く轍に當つて避けす故に蟷螂の名あり

稲春虫　長さ一寸斗りにして青色小兒両足を捕ふれは身を伸し俯くさまを稲搗く形ちに似たり故に名つく

くさきの虫　常山の木の心を食ふ虫を云

秋の蟬　はかなきさまを題意とす

蜩　蟬より小にして多く山中の日沒に鳴く故に日暮しと云

藻に鳴虫　我から鳴　蚤の苅藻に付て我から身を亡すによりて我から鳴とも云

蓑虫鳴　一寸斗りの小虫にして恰も人の簑を着たるか如し父戀しと鳴に似たり

蚯蚓鳴　鳴聲長し故に一名歌女と云傳ふ

秋の蝶　秋の蝶は衰へたるさまなり

殘る蚊　秋の暑と共に殘れるを云

殘る蠅　右に同し

殘る螢　纔に草葉を照らすさまを云

田の虫送　蝗の害を退けん爲農民鐘太鼓を鳴らして野外に送る

以下三月亘

小鷹狩　小鷹狩といふは鶉雲雀なと小鳥を狩る故なり依て秋季とす

荒鷹　鷹の雛巣を離れ自から衆る時網を以て捕ふ是を網掛荒鷹と云

鳩吹　鳩を取るとて掌を合せ鳩の啼やうに吹ならすなり

鶉　原野に捿む歌には多く深草野を詠めり其性淳にして横草を越にす地に隨ふて安んす故に聖人鶉居すと云へり

片鶉　片鶉は夫婦離れて居るを云ひ鶉の床は鶉の臥處とする叢を云、

鶉床

鳴　鳴の羽搔　百羽搔

鴫　鴫の羽搔　田鳥とも云鳴の字は田鳥を合せたるなり是正字に非す種類甚多くして田野に捿み夜更て已の背にて羽を鳴らす故羽搔百羽搔と云閑寂趣深し

鴫の早贄　形ち鳩に似て小さく鷹の種類なりと云鴫の早贄又早莖といふは蛙なとを草木の枝にさし貫くを云

鴫の早莖

鴫落し　鴫を取るを鴫落しと云目を縫ひて聲を起さしめ囮とす

鹿笛　鹿は妻を乞ひて鳴くさまを秋の季とす

鹿垣　鹿笛は鹿角の根なとにて作りたる笛を以て牝鹿の聲に僞り牡鹿の來るを弥又は陷穽に捕るを云鹿垣は田圃を荒らすを防く爲に設る垣なり

鱸釣　大なるもの二三尺あり海と川との境にあるもの味よし漁人是を釣る

江鮒走　江鮒は鯽の小なるものなり秋月多し

鰐九萬疋　シイラ鰐に似て小さくはまちに似て大きく土佐の海多く漁す其名熊引と云

沙魚　江海に成育す秋月是を釣る人頗多し

鰻簗　鰻は冬春泥穴に蟄し夏に至て游き出て流れに從ふて下るを簗にて捕る

芋虫　大なるもの拇指の如し青色褐色あり後に化して鳳蝶となる

案山子　鳥おとし田圃中草偶に弓矢を持せ鳥雀を防く

添水　流水を利用して自ら鳴る樣に仕掛て田を害する獸類を逐ふ

鹿鼓　添水の仕掛に異ならす

引板　板に木を添へ綱を付けて引鳴すなり

鳴子　形ちは人の知る如し秋の田畑に鳥獸を驚して追ふ具なり

鳴竿　竿の先に鳴子を付て片山里に田畑の獸を逐ふ

燒帛　小家に嗅き物を焚て田を荒す猪鹿を追拂ふ鹿火屋といふも此類なり

鹿火屋

鎌帛　鎌に鍬を立添へ菅笠を着せて立てたるを鎌帛と云獸類を驚かす爲なり

衣食

刺蜻蛉　中元の日の祝物とす春より骨に添ひて割開きこれを鹽物とし二枚を一重として一刺と云

蓮の飯　蓮の飯聖靈に供し又親戚に贈るを禮式とす蓮の葉を以て蒸せる糯飯を包み觀音草を以てこれを結ふ此草佛名あるを以て用ゆ

朝茶の湯　日中の暑を厭ひ未明に催す茶の湯なり

燒米　青稻の籾を去り是を鍋て燒米とす

ぬる麥　ぬる麥は切麥を湯にてぬるませたるを云切麥は六月食類の部にあり照らし見るへし

あつ麥　あつ麥は切麥の煮て熱きを云

踊浴衣　盆踊に着用する好み浴衣を云

踊帷子　右に同しく用ゆる帷子なり

神釋

北野御手水　七月六日京都北野天滿宮にて松風の硯に梶の葉を添へて神前に供す是を御手水と云

北野煤拂　京都北野天滿宮毎年七月七日內陣にある神寶を幣殿へ出して曝す其間宮司內陣外陣の煤を拂ふ是を北野の煤拂と云

池の坊立花　七月七日京都六角堂方丈へ池の坊門人集り二星に手向として立花を興行す立花は當住職專慶法師より始る

本願寺立花　七月七日東西本願寺に立花あり又數品の草花にて作り物あり是を本願寺の立花と云

文珠會　七月八日京都東寺西寺にて行はる仁明天皇御宇泰善大法師はじめて此會式を修せられしと云

六道參　六道は五條の北建仁寺の南にある彌皇寺といへる寺へ參るを云

清水千日詣　七月九日十日諸人此所に詣て聖靈を迎ふるとて此寺の鐘をつく是を迎鐘といへり又槇の枝をとゝのへ歸り持佛に置俗に聖靈槇の葉にのりて來ると云へはなり

部靈祭　七月九日十日京都清水觀音へ參詣すれは平日の千度にあたるとて夜に入りて賽人殊に多し

鬼の洞念佛　ブリノタママツリ七月十日常州鹿島明神に於て行はる神官寶劔と弊とを捧けて神前に進む參詣の衆人皆刀脇差を扳かさし社前に到る甚奇觀なり

施餓鬼　山城八瀨河の西山中に俗鬼の洞といふ處にあり昔酒顛童子此洞より丹波の大江山へ移りしと云ひ傳ふ七月七日より十五日に至る間村中の兒女此洞に集り鉦を鳴らし彌陀の號を唱へ先祖を祭ると云

せかき棚　七月一日より十五日迄各寺院にて有緣無緣聖靈を吊ふ川施餓鬼とて河岸に壇を構へて修するもあり

攝門待茶　七月初旬より廿四日頃迄供養の心にて往來の人に湯茶を施す是を門茶と云

盂蘭盆會　釋迦の弟子目蓮尊者の母地獄に墜ち餓鬼道中にありて食することを得す依て百味の食を十方の諸佛に供養せしめて母食を得たりと此說に因りて盂蘭盆會をなす盂蘭盆は梵語にして倒懸救鬼と云ふ事なり倒懸はさかさまにかゝるとよみ地獄の苦しみを救ふ爲供へをなす救鬼は救器ともかきて盆は其器をさしたるなり

盆の市　草市七月盂蘭盆會に供する處の諸物を賣る

魂祭　昔は在家に佛壇を銝り置事なかりしより七月十二月魂柵を設けて聖靈を迎へしと云

靈棚　柵經は菩提寺の僧來りて牌前に誦經なすを云

經　青柿　ありの實　茄子　桃の實　枝豆　掛そうめんの類を供ふ

麻柯の箸　聖靈祭に供する箸なり

迎ひ火　七月十三日黃昏の門前に麻柯を焚て聖靈を迎ふ宗旨により一日の前後あり

送り火　七月十六日焚くを送り火とす

墓祭　七月朔日より十五日に至り各祖先の墳墓に詣するを云

夏書納　夏行中書寫せし經文等解夏の後堂塔伽藍に納め三界萬靈に回向す是を夏書納めと云

夏解　夏は四月十六日に入りて七月十六日解く是を解夏と云一夏は則九句なり此日僧尼より壇家へ夏解草を送る夏解草の註は七月植物の部にあり

禁裏御燈籠　御家門方より禁裏へ燈籠を献せらる花鳥等金銀を鏤め奇巧なり七月十四日禁門を許され衆民拜覽せしと云

燈籠　中元の夜より晦日に至るの間家々佛に供する爲燈籠を釣す

高燈籠
切子
折掛燈ろう
廻り燈ろう

三井寺女詣　七月十五日江州三井寺は平日女人の登山を許さず今日女人に參詣を許す

閻魔參　七月十六日なり閻羅王は地獄の主鬼官の總司にして造惡者を靜息す今日を大齊日と云故に閻摩堂へ參詣なすなり

施火焚　七月十六日施火は送り火焚とも云京洛外の山々にて文字等の形ちに薪を積て焚なり其間一丁二丁にも及ふ何れも甚壯觀なり

大文字火
鳥居火
妙法火
船形火
釣舟火

水燈會　七月十六日宇治黄檗山より宇治川へ三百六十の燈を浮へて寺僧誦經あり是を水燈會と云

經木流　七月十六日攝州四天王寺經寫堂にて經木の法名を記し寺内にある龜井の水に手向て靈魂を吊ふ川々にも行ふ

松ヶ崎題目踊　七月十六日京都松ヶ崎妙泉寺の堂前にて男女打交り題目に節を付けて聲をかしく踊る

宗祇忌　七月十八日なり俗姓は飯尾治郎右衛門と稱せし人にて紀州の武家たりしか世を逃れて薙髮し京師に住て生涯を雲水に任せて行脚せし連歌の達人なり文龜二年齡八十七歳箱根湯本の客舍に歿す

送行　夏籠の僧夏解の日別るゝを云

御靈御出　七月十八日京都御靈の御出は崇道天王等八座の祭禮なり京極通り上御靈の御旅所に在すの間を御靈の御出と云

文覺忌　七月十八日文覺上人忌日なり在俗の間は遠藤武者盛遠と云傳記は人の知る處なれば略す

地藏會　七月廿四日今日地藏を祭るは秋の金氣を扶けん爲神道に石を祭るに比して因由あり諸國にて行はる

愛宕火　七月廿四日攝州池田伊丹にあり彼の地の愛宕山に燈籠提灯夥しく点して山上の權現を祭る其灯近郷に映す

六齋念佛　豐太閤の時京都下加茂の東干菜寺より始まる盆中近在の農民笛太鼓鉦を合奏し獅々頭を出し洛中を巡り家々の所望によりて之を行ふ

御射山祭　穂屋作　七月廿七日信州諏訪明神の祭禮なり此祭芒を以て幣とし昔は勅使参向ありし今日芒にて神殿を作る是を穂屋作と云人家にも芒を葺く

逆の峰入　秋は當山派の大峰より熊野に出るを逆の峰入と云春は本山派の熊野より大峰に入るを順の峰と云本山當山の両派あり

公事故事

相撲使　禁中にて年々角力御覽あり諸國七道に使をして相撲人を召す之を部領使（ことりつかひ）と云

揪の葉戴く　唐土にては立秋より揪の葉を求めて童女花の形に切て戴く是邪疫を避る爲なりと云

八月　乾坤

葉月　桂月　桂秋　清秋　仲商　白露　南呂　長月

葉月は此頃木の葉色付初る故葉染月を略して云
桂の花開く月故名つく
桂月に同し
此頃空明らかに清き故なり
仲商は仲秋のことなり
白露は節の名なり
南呂は律の名なり
長月は夜はしめて長きを覺ゆる故なり

八朔田面の日　八月朔日を田の實の節とす中世農民稲の初穂を禁裡に奉りしより田面の節とも云ひて嘉事とす

繪行器　造り松虫　造り鷺

八月朔日行器の小さきを作り目出たき繪をかきたるものに眞粉餅などさまざまの物を入れ互にたのむ意にて贈りあふを云兒女つくり雀等いろ〳〵の物を行器に添て贈る

竹の春

此月竹盛んになるを以て竹春と云

秋分

八月節より十五日の後を秋分と云晝夜長短同しき時なり

長夜

長夜は冬至を極とすれとも八月秋分等しき時にて夜長きを覺ゆれは秋々夜長とす

夜寒

冷氣募りて秋夜の寒さを云

朝寒

朝寒と云ひて秋なり寒き朝と云へは冬の寒さとなる

肌寒　そゝろ寒　うそ寒

物にふれて寒さを覺ゆるなり　そゝろ寒　うそ寒　やゝ寒　意義多く異ならす

水初て涸

池澤流水の涸初るを云

雷聲を納む

仲秋に至て雷聲の歇むを云

鴈わたし

秋北方より吹風を云

鮭颪

奥州にて鮭漁の期節に赴く時吹風をさして云

秋の暮

秋の夕暮なり淋しきを題意とす

初月

八月四日五日六日頃をさして云滿て名月になるを賞してなり月は三秋に亘る故初月を七月乾坤に加へたるものあれと古書には見わす

月見

夏は蒸雲大熱冬は繁霜大寒秋は夏に後れ冬に先たち實に清光賞すへきの時なれはなり

待宵月　名月　望月　夜月　月月　新月　良月　芋名月

十六夜

いさよふとはたちやすろふ意なり十六日の月暮て後しはしありて出る故なり

以下三月亘

月

さやけき月　月さやか　月の桂　桂男　桂影　盃の影

月立居伏更亥廿三夜月　待待待待待中月待

月の都　三日月　有明　殘月　弓張月　上弦　のほり月
下弦　月の雪　月の霜　月の氷
以上何れも題に用ゆへし
異名　玉兎　銀兎　玄兎　暉素　常蛾

星輝きて月夜の如きを云

星月夜

植物

八朔梅　八朔の頃より開く花小にして八重あり

初紅葉　初めて樹梢の染るを云

名の木散　楓　櫨　櫻　柞　等の類此頃紅葉して散初るを云

梅嫌　葉圓く尖り野梅の葉に似て小さく五月小白花を開き實を結ふ葉落て實紅に熟す

木犀　八九月花を開く黃あり白あり香氣高く人を醉はしむ

漆の花　桂の花　樹の高さ二三丈葉椿に似て花は槐の如し

銀杏　其葉鴨の水掻に似たる故鴨脚と名つく其形小杏の如くなれは銀杏と呼ふ核の色白きを以て白果と云

柘榴　皮の内蜂の巢の如く膜を以て實を隔つ人の齒の如し

芙蓉　此花蓮の如し故に芙蓉木蓮の名あり紅白黃千葉のものあり

牡丹根分　八九月赤き芽を出す是を移し植るを云

芍藥根分　八九月根を削りて植るを云

黃蜀葵花　トロヽノハナ葉深綠色五つの尖あり鵝黃色六瓣あり

雀麥　葉毎に五葉莖相對す花は始青く後黃なり女郎花に以て枝葉違へるのみ

鷄頭花　花の形ち鷄の冠に似たるより此名あり紅黃二種あり盛久し

鳳來紅　葉鷄頭を云葉眞紅に紫を交ゆ鴈渡り初る頃色付く故に云

花芒　芒の穗を尾花と云穗の形ち獸の尾に似たり花芒とも云

尾花
穂芒
十寸穂芒　穂の長さ一尺斗りあるを云ますかゝみを萬葉集に十寸鏡と書けり

木賊苅　長さ尺斗り叢生す一幹にして葉も花もなし寸斗りに節あり木を磨擦するに用ゆ木の賊又は砥草と訓す秋月之を苅る

茜花
茜堀　茜は赤根なり十二月苗を生し蔓を延す七八月花を開き實を結ふ堀るは染料に用ゆる故なり近世は蘇方を以て茜に代ふ

濱ゆふの花　萬年青に似たり俗濱おもとゝ云海邊に生して七八月白花を開く

蘆の花
蘆の穂
澤桔梗　此花風に吹揚れは雪の如く地に集まれは綿の如し

浮薔　莖大にして葉繁く花は桔梗に似たり淡碧色なり

龍膽　コナギ葉葵の形ちに似たり夏の末より秋に至りて碧花を開く水草なり

葉笹に似て厚く九月花を開く紫にして形ち鈴鐸の如し又白花のものあり笹龍膽と名つく

鶉草　粟の異名なり

敗荷　池澤の蓮葉老て破るゝを云

花紫　紫草を云日に向て開く莖赤く節青し秋植るもの春開き春植るもの秋開く

紫苑
鬼のしこ草
花野　三月苗を生す葉二三相連なり紫白の花を開き黑子を結ふ千草の花野に咲亂れたるを云

宇治花園　宇治は應仁天皇の離宮なりしを後皇太子桐原日桁の宮と申せし時の御園なり花園は萩を專とせり由舊記に見ゆ

縷紅艸　莖葉共に細く杉菜の如し莖より蔓を出し八月小紅花をひらく形ち丁字に似たり

杜鵑草　葉篠に似たり高さ一二尺莟は筆の如く花六出小紫の点あり

水引の花　長き穂を出し紅色の小花点々として水引に似たり

白粉花　春苗を生し冬枯る高さ二三尺葉淡青花紅色胡椒の如き實を結ふ實中白粉あり夕にひらき朝萎む

檀特花　高さ三四尺葉芭蕉に似て小さく實を結ふ圓くして堅し念珠に作る

露草　露草は碧嬋花と云三四月苗を生す莖紫にして葉竹に似たり若き時食ふへし

月草　月草仝物なり萬の花は朝日影に咲けと此花月影に咲故此名あり

金剛草　山野處々にあり高さ三尺莖枝花葉共萩に似て小さく七月花を開き莢をなす其根甚強し俗呼て駒繋きと云

烏頭　トリカブト高さ三四尺葉蓬に似て花紫碧色穗をなす

大根蒔　八月種を下し彼岸苗を出す

菜種蒔　油に絞る物故油菜とも云八月種をまく

芥蒔　からし數種あり八九月種を下す

けし蒔　八月十五日種を蒔けは生育よしと云へり

胡广苅　一名　青囊八月の初種を下す

貝割菜　菜の種土を切て漸く二三寸二葉の形ち貝を割たるに似たる故に云大根蕪仝時なり

間引菜　大根菜の葉の繁を省くを間引菜と云

中抜大根　彼岸苗を生し稍長して鼠の尾の如きものを中抜大根と云

粟苅　八月是を引收む

秬苅　キビ苅右に同し

稗蒔　ヒエ苅右に同し

玉蜀黍　俗南蠻黍と云よく人の知るものなり

蜀黍　トウキビ關東の俗たうもろこしと云

松茸　松の氣を以て生す茯苓多き處は茸少しと云

茸　狩茸　木の子狩とも云山に入て取る秋月第一の遊興とす

初茸　初茸は形ち小にして味甘し諸茸より先に出る

椎茸　椎茸は椎の根より叢生す

革茸　革茸は形ち松茸に似て傘の外黑くして革の如し

鼠茸　鼠茸は朽木又は老樹の根に生して淺鼠色なり

平茸　岩茸　紅茸　しめし茸

平茸は山林の濕地に生し松茸に似て傘瘦て平たし
岩茸は巖上に生して甚得るに難し
紅茸は陰濕の處に生し傘紅色裏白く毒あり
しめしは數十連なりて生す形ちは人の知る處なり

松露

松露は松樹ある陰濕の沙地に生す　一名麥蕈と云

藥掘

秋山野にて藥草を掘る

苦參引

クラヽ葉槐に似たり春生し冬萎む花黃白根は黃なり

胡黃連引

タウヤク千振なり高さ五六寸一根に數莖七月花を開く小にして黃色なりこれを引く

千振の花

蘆艸

カリヤス葉竹に似て細く薄し煮て黃色を染む極て鮮明なり

蓼の花

馬蓼　犬蓼

二三月繁茂し秋に至て穗をなす細花をひらく紅白數品ありと云馬蓼は葉大きく犬蓼は似て非なる故犬と云へり

そはの花

蕎麥は花白く莖の下赤し實は三角なり

車前子

オホハコノミとよむ春の始苗を生し葉地に敷く數莖を抽て穗をなす花小にして實を結ふ

茴香の實

和名くれのおも古根より苗を生す高さ三四尺六月花開く色黃なり麥粒の如し

くこの實

春苗を生し葉柘榴に似たり八月赤き實を結ふ

萇の花

八九月莖の頭に紫白の細花を開く

烏瓜

新羅葛　玉章　藪の中に多く生す葉馬蹄の如く六月花あり瓜は細長くして赤し結ひ文のさまあるを以て玉章の名あり

荔枝

ツルレイシとも書く苦瓜五月苗を生し七八月小黃花を開く五瓣碗の形ちの如し二三寸の瓜を結ふ

通草

通草の實は味甘美なり此草莖に細き空ありて両頭に通す故に名つく

蓼の實

一名蔆又沙角水中にあり其實を取り茹て食用とす

種瓢

瓢を軒下に釣り水氣を去り種を取る是を種瓢と云

種茄子

黃色に變する迄殘して種を取る是を種茄子と云

稻苅

秋晴を見定て苅收む

田苅　右に同し

中稲　早稲晩稲に對して中稲と云

八束穂　豊年の稲穂長きを云

稲莚　莚を敷たる如く稲を生したるを見立て云ひ又稲をこなす爲に敷く莚をも云

稲こき　古くは小さき管を繩に繫き握り持て穂を挾みて扱しを近年は機械を以てす

稲干　稲干稲垣何れも稲を干す用にて別義なし

稲舟　稲を積たる舟を云川瀬の早くして舟の頭のふれるを人の物を否と云ひてかふりふるに似たれは稲舟の否と云詞出しと

落穂　豊年には稲餘りありて落たる穂を賤しき婦女の拾ふに任すさまなと歌にも詠めり

毛見　農民年の貢を納むるに當り縣吏田地を巡檢す是を毛見と云稲の未た苅らさるものを立毛と云へはなり

小田守　小田守　山田守　何れも田に人畜の障害を防く爲なり

竹を伐　木六月　竹八月と云て此月竹を伐れは虫の患なしと云へり

生類

燕歸鴈　乙鳥春社日に來り　秋社日歸る故に社燕と云

鴈の形ち鵝に似て大なるものを鴻と云ひ小なる物を鴈と云八月初候に來るを初鴈と云鴈かねは鴈か音なりと云ふ說あれと萬葉集に鴈金の今は啼きぬと詠するを以て考れは鴈の名なり眞鴈　鴈金　白鴈の別あるか

初鴈　かりかね　渡鴈　來鴈　天津鴈

蓼喰鴈の大なるもの鴻に同し

腹斑鴈の一種なり腹毛斑なる故に云

色鳥秋月渡り來りし色々の美しき小鳥を云

渡鳥八月諸鳥畢邦より群飛して山林江湖に來る是を渡り鳥と云

鶸ヒハ雀より小さく全体黃色に青みを帶ふ一種唐ヒハと云へる物あり

小陵鳥　形ち山雀に似て小さく山林に多し頭黑く頰背腹白し身輕くして其聲滑なり

日雀　四十雀に似て小なり頭背赤色頰のほとり黑白交る一書に鵠と記せり

目白　頭背淡蒲黃眼の廻り白圈ありて胸白し群を好み一枝に集りて押合ふの奇癖あり

頰赤鳥　五十雀形ち雀より小さく背の色も亦似たり其頰赤く胸白し

眉画鳥　形ち鶯より大きく灰赤色眉白く畫きたるか如し

山雀　形ちは人の知る處なり此鳥好て胡桃を食ひ藝を能くす

四十雀　形ち雀に似たり頭黑く両頰白く胸灰青腹白色よく囀る五十雀は四十雀より稍大なるものなり

五十雀　形ち雀の如く頭背胸赤色翅黑し

連雀

三光鳥　鳥鳳を三光鳥と云紺碧色背の上に赤みを帶ふ腹白く羽黑くして少し赤し其尾長きもの壹尺餘其聲日月星と云ふか如し

啄木鳥　一名寺啄き此鳥大小ありて大なるものは鴉の如し瓜剛く嘴利く樹の虫を啄て食ふ昔天王寺建立の時此鳥群れ來り軒を啄き損す守屋か怨靈鳥となりしと云

菊戴鳥　形ち目白鳥に似て背翅青綠色頂の上黃毛花の如きものを戴く故に名つく

翠雀　大さ雀の如くにして頭背翠色胸腹白く其聲淸し

ましこ　猿子鳥と書く大さ雀の如し全体灰黑尾の下両端白し又一種照ましこあり

豆廻し　桑鳥と書く嘴黃にて毛鼠色なり大豆を口の內にて廻して皮を取食ふ故に名つく

鵯　蒼灰色頭上の毛亂れ眼の邊赤色尾長くして脚短し好て草木の實を食ふ

鶫　形ち鶉の如く胸に白き圈あり背毛紫赤浪の如き文あり性露霜を懼れ紅葉なとの散るを背に負ふと云

蒿雀　アチシとよむ此鳥形ち鵐に似て色青く黃なり鵐と仝物にて青鵐と云ふを略してアヲシと云へり

鵲子鳥　アトリとよむ形ち雀より大なり此鳥山林に栖み不時に百千群飛して天を蔽ふ

椋鳥　椋の木に接む故椋鳥と云形ち小鳩の如くにして頂白く背灰黑色なり

鶸　ヒタキとよむ大さ雀に似たり頭黑く白き彪ありて霜ふりの如し

鶺鴒　庭たゝき　石たゝき　形ち雀の如くにして尾長く腹白し好て水邊に棲る異名を雪姑と云ひ和名をつゝなはせ鳥とつきおしへ鳥と云

稻負鳥　いにしへより諸說多し鶺鴒といへるはことはり近し古今三鳥の一なり

太刀魚　江海中に生す魚の形ち太刀に似て銀箔を塗たるか如し

落鮎　澁鮎は九月水草の間に子を生みて後流れに隨ひて下る是を落鮎と云

河鹿　蛙の一種なり好みて山川にあり夏より秋に至りて鳴く其聲鹿に似たるを以て河鹿と云

鮭　カシカとよむ杜父魚の類なり水底にありて鳴く國に依りては此魚を河鹿と云

鮭　形ち鱒に似て肥大北海に多し

鰤　ハラ、コ鮭の子なり胞中數千透明して南天の實の如し酒家甚賞す

江鮭　琵琶湖の名產なり大きなるもの三尺小なるもの尺に滿す鮭よりは膩多く味美なり

下り簗　落鮎を取る爲設ける簗を云

崩れ簗　下り簗の破れたるを云

あふれ蚊　長く殘れる蚊を云

蛇穴に入　蛇の類仲春より出て穴に蟄するを云

衣食

碪　四手打　綾卷　衣打　しころ打　きぬを卷き對座して是を打つ綾卷は衣を卷たる木なり　四手打はしきりに打つ　しころは打つ處の槌の名なれとしころ拍子とて面白くうつ音にも云

新絹　新糸にて織たる絹なり武州　野州　上州は重なる産地なり

ぬかこ飯　零餘子は薯蕷の蔓に生する實なり是を飯に和して焚たるを云

醂醴酒　醪は滓酒なり俗濁酒と云

新酒　今年の釀造酒なり伊丹灘西の宮等競ふて出す

中及古酒　中汲は造酒の半清半濁を云古酒は註に及はす

新米　今年米とも云注に及はす

たれ口　垂口は釀造酒槽の口より垂るゝを云

鯷　小鰯を塩に漬たるもの

鰯黒漬　伊豫の産なり宇和鰯と稱するもの腸の黑汁を塩に和して魚黑し是を黑漬と云

茹蓼　蓼の實の茹たるを云

神釋

彼岸　春に對して後の彼岸と云ふ二月釋敎の部彼岸の條に委しく註す

三村祭　八月一日二日泉州堺　開口村木戸村原村氏神祭禮なり

堺天神祭　八月三日泉州堺天神社祭禮夷島渡御あり

白髮開帳　八月五日近江打蔵　白髮大明神開帳なり

敦賀祭　八月十日越前敦賀氣比大明神祭禮諸商人放下師等集りて賑し

大鳥祭　八月十三日泉州大鳥神社祭禮和泉國一の宮なり

放生會　八月十五日諸國此事ありと雖も男山八幡宮の放生會最も名高し

野口念佛　八月十五日播州加古郡敎信寺にあり僧徒多く集りて念佛を唱ふ加古川の庵に住せし僧敎信賊の爲に害せられしを吊ふ爲なりと

菅大臣祭　八月十六日京都四條の南菅神の祭禮なり是れ菅神降誕の地なり

御靈祭　八月十八日京都御靈社祭禮七月十八日御靈御出の註照らし見るへし

定家忌　八月廿日なり定家卿は京極中納言と申父は俊成卿母は若狹守親忠の女なり應保二年に生れ貞永元年出家せられ法名を明靜と云仁治二年八月廿日八十歳にて逝去せらる小倉山莊和歌の色紙は世に有名なるものなり

菩薩祭　八月廿二日唐の舟玉神なり姥嫗神と云肥前長崎に唐人の寺四ヶ寺あり此寺にて今日菩薩祭あり僧徒唐裝束にて修行す唐人叅詣して棒を遣ふて踊る是を菩薩踊と云

西院祭　八月廿八日洛西葛野郡西院村春日神社祭禮

公事故事

駒牽　望月の駒　霧原の駒　上野の駒　武野の駒　穗坂の駒　信濃の駒

駒迎　引分の使　諸國の牧場より禁中へ駒を貢く是を駒牽と云八月十六日信濃國勅旨の牧より江州逢坂山迄牽來るもの右馬寮左馬寮宮人受取て禁庭へ奉るなり天皇南殿へ出御なりて公卿以下次第に御馬を賜る又次將を以て院の御所及東宮へも叅らせ給ふ此勅使を引分の使と云

秋季皇靈祭　彼岸中日御代々の皇靈を祭らせ給ふ

釋奠　春秋にあり二月公事故事釋奠の條に委しく註せり

司召　司召は秋の除目なり京官除目と云諸官人才德勝れたるを奏して爵祿を賜ふ日なり

秋社　秋分後第五の戊の日を秋社と云五穀の神を祭るなり

九月　乾坤

菊月　季秋　梢秋　晩秋　寒露　玄月　素秋　無射　寢覺　長月

菊月は菊花の咲出る月ゆへなり
季は末なり秋の末といふこと
梢秋は諸木紅葉する故なり
晩秋は暮の秋なり
寒露は九月節の名なり
玄月は玄はクロシとよむ黑きは純陰の色なり
素秋は白し秋は金氣金の本色白けれはなり
無射は虫魚の類蟄伏し潛みムサボルことなし
寢覺月長月共に夜長きより云

木染月　木染月は諸木紅葉すればなり
小田苅月　小田苅月は稲田を苅る故なり

重陽　九月九日九を陽數として日月並ひ應する故に重陽と云菊花滿開の時なり

風炉の名殘　茶人炉開の時候に至るを以て風炉の名殘と云

後の雛　春の雛祭に對して後の雛又は菊の雛と云

海嬴廻し　海螺の殼に蠟を充たしたるもの兒童爭ひて勝負を決す

後の名月　九月十三夜月を賞する事は寛平法皇より始まると云

十三夜月の名殘　月の名殘は觀月の名殘を云

漆搔　漆の木の枝に悉く鋸を以て挽目をつけ其挽目より發する漆を搔く紅葉にも限らす總て山野等秋の滿たるさまを云

秋の色　紅葉にも限らす總て山野等秋の滿たるさまを云

山粧　秋山明淨にして粧へるか如し

露時雨　暮秋の露置餘りて點々滴るさまを見立て云

露寒し　露盛んにして冷氣彌加はるを云

露霜　露霜は露の氣の凝んとするを云

秋霜　草木などに薄く置くさまを云

秋深し　何れも秋の未又は秋の限と云ふ意なり

暮秋　仝

行秋　仝

秋惜む　仝

秋より後　仝

秋過て　仝

冬待　仝

冬隣　仝

冬近し　仝

秋の名殘　仝
秋の別　仝
九月尽　仝

植物

菊　黄菊　白菊　大小菊　承和菊　月精　隱君子　落英　佳友　黄花　月朶　延壽客　離客　まさり草　百夜草　星見草　形見草　齢草　千代見草　契リ草　黄金草　翁草　乙女花　長月草　いなて草　草のあるし　花の弟　たきもの草　のこり草　以上異名

承和菊と云ふは黄菊を云
承和帝黄菊を愛し給ひし故なり
承和帝は仁明天皇の御事なり

菊合　殿上人の御遊なり左右の色香を鬪して勝れるものは是を殿庭に植ると云

草牡丹　葉は牡丹に似て單の白花をひらく是牡丹芍藥の種類なり

仙蓼　珊瑚葉と書く實は赤くして珊瑚珠の如し小なる鉢に植て愛すへし

萬年青の實　實は天南星に似たり熟して赤し四時葉凋まさる故万年青の名あり

岩蓮華　草の形ち蓮花に似たり花開きて實なし佛甲草と云

秋牡丹　貴布禰菊　紫衣草　菊に先立て開く初め深紅にして後淺紅なり京都にて貴ふね菊と云

我木香　葉細長く鋸齒の形ちに似て青色花紫黑色なり

小蓮花　岩蓮花に同しく葉細長し

蒟蒻の花　古根より苗生す芋頭の如し莖斑にて花紫なり

蘆の穗綿　蘆の花の絮を云

尾花散　芒の穗の散るを云

鵯上戸　白英と云葉朝貝に似て小白花を開く白英は花の時の名なり
鬼目　實を鬼目と云ふ鵯好んて此實を食ふ

破芭蕉　晩秋風雨を受て葉の裂るを云

未拈　草木のもとつ葉より色付枯るゝを云

野山の錦（野山の色）　草木彩り滿目錦繡の如きを云

草の錦　諸草錦の如く染なすを云

枯野の色　晩秋野草彩り盡して枯初るけしきを云

枯野の露　枯野枯草は冬なれとも露を結ひて秋とす

草紅葉　暮秋諸草の紅葉を云

蔦紅葉　喬木の幹あるひは軒端なとに蔓こりて紅葉したる樣趣深し

紅葉　楓　柞　櫨　梅　櫻　等紅葉する物の總名なれとも楓の紅葉勝れたる故紅葉と云へは楓を主とすもみちはもみだしにてたしの。反。ち。なれはもみちと云

楓紅葉　何れも其木の紅葉せしなり

櫨紅葉　仝

梅紅葉　仝

櫻紅葉　仝

杏子紅葉　仝

柞紅葉　仝

柿紅葉　仝

槻紅葉　仝

楢紅葉　仝

漆紅葉　仝

白膠木もみち　仝

下紅葉　木立の下草紅葉せしを云

紅葉かつちる　紅葉の少しつゝ散るを云かつ〳〵ちる意なり

紅葉焚　林間煖酒焚紅葉と云白樂天の詩より出つ

川の紅葉　紅葉の川面に映したるを云
水のもみら　右に同しく水面に映したるなり
色變ぬ松　諸木凋落の季に向ひて獨蒼翠なるを云

青松毬　松かさとも松ふぐりとも云松の實と云ふは松毬中にあり仁と稱して別なり
新松子
松の實
柾の實　冬も葉青く光澤あり夏小花を開き秋實を結ふ
南天の實　晩秋紅の實累々穗をなす
漆の實　液は木より出て物を塗る用となり實は絞りて蠟となる木に異種ありて實と汁を取るに別あり
榎の實　榎は葉桑に似て筋多し實は胡椒の大きさほとありて熟すれは黄なり
橡の實　山中大木あり三四月花を開く黄色なり實は栗より少し大なり餅に作り又麪となして食す
椿の實　形ち圓く枯る時殼四つに裂け中に實あり
椋の實　椋は枝葉とも椿の如し五六月白花を開き九月實を結ふ大さ小銃の彈丸に似たり
たもの實　天竺桂の實なりあさたの木と云實の油を取りて蠟に製す
梅檀の實　一名　金鈴　形ち鈴の如し熟して黄色なり
菩提子　昔宋より移し得たりと云高さ丈餘枝葉共に椿に似て實は枇杷の如し念珠に作る
枳殼　高さ五七尺にして刺多し春白花を開く人家の生垣とす
九年毋　乳橘と云木は蜜柑より高く實るも早し
柚　抽は形ち橙に似て皮苦く橙は皮甘し
柑子　柑子は柑類の總名なり俗柑子を橘と云
橙　九月黄熟なす故季とす
蜜柑　柑類中の重なるものなり其實熟するときは蜜の如し故に名あり

金柑　一名金橘と云實を結ひ秋より冬に至りて黄熟す

佛手柑　實の形ち人の手の如し故に佛手柑と云

果櫚　花木瓜に似て高木あり實はマルメロの如し

雲劫橘　葉蜜柑より薄く實は蜜柑の如し

皂角　サイカシ　鷄栖子と云葉槐に似たり夏細き黄花を開き秋實を結ふ

楹　マルメロ　梨子の如く風味も亦梨子に似たり此實に砂糖を和し菓子に作る

榛　榛樹小にして低く荆の如し實は櫟に似たり

桐油の實　荏桐木は桐に似たり實は毒ありて食ふへからす此油を取て青漆の如くなす法ありと云

瓢樹　ヒョン　蚊子樹其實を蚊の宿りと云吹けは笛の音あり此木火に近つけは風を吹とて火除の生垣に栽ゆ

茱萸　ひよんの實　山茱萸吳茱萸の種類あり春細き黄花を開き秋赤き實を結ふ

樫の實　三四月白花を開き穂をなす栗の花の如し實の大きさ橡の實に似たり

團栗　團栗は橡の一種小楢といふ木の實なり味澁くして食ふへからす

栗　河東飯　天臺道果と云

落栗　落栗は木にあるうち外皮裂て自ら地に落たるを云毬栗は其實苞中に在るものしは栗さゝ栗は指の頭ほとの小なるもの

毬栗

さしは栗

梨子

青田果　百菓宗　快菓　玉乳　種類多し空閑梨子は肥前より出る

水なし

軒の妻なしは家根の端に植たるを云軒は家根の妻なれはなり

木なし

山なし

空閑なし

軒のつまなし

熟柿　樹にありて柿の熟したるを云

椎　椎は其實尖りて錐に似たる故に椎と云

椎柴　椎柴は椎の木の柴になりたるを云椎は小枝多き故柴に用ゆ

まては椎　まては椎は椎の大なるものを云

柿　御所柿　似透明柿　朱筆柿

柿種類多し左に註す
和州御所村より出るもの最上とす和州にては平柿と云
似柿といふ者御所に似て味劣れり
透明柿は味さよ〳〵として肉透通るか如し朱柿はこねり柿
なり形ち鷄卵の如しこねりは小形の義なり
形ち小にして長く筆に似たり

新榧子

大木多し木に雌雄あり各花あれとも雄は實を結はす雌は枝
横に垂れ雄は枝上に立つ

豆引

凡夏至十日以前種を下し七月花を開き九月莢を結ふ是を引
收むるなり

遲稲　晩稲

稲早中晩の三收あり九月收るものを遲稲又晩稲と云

干土生

干土田　稲孫　稲田の苅株より再ひ芽の生するを云古
名おろかおひと云

落水

稲を苅て後田の水を落すを云國によりては苅取らさる以前
落すもあり

生類

紅葉鮒

深秋其鰭の紅色に變するを云

尾越鴨

山の尾を越して江澤に通ふ朝夕ほのくらき時なりこれを尾
越鴨と云

鵐

シトヽ形ち雀に似たり此鳥目の外に圓きふちむり都て器物
の穴の縁を金物にて覆ひたるをシトヽメと云へり此鳥の目
に似たれはなり

霜踏鹿

霜かれは尾花ふみ分けゆく鹿の
聲こそ聞かね跡は見わけり　定家

熊の栗棚

熊樹に登り好んて栗を食ふ又枝を折並へ石巖枯木中に設る
もの是を熊の栗棚と云

雀海中に入て蛤となる

晩秋の候雀海中に入て蛤となるよしに云

豺祭獸

狼の獸を祭るは天を祭る意なりと云

網代打

城州宇治近江の田上等氷魚の網代木を打を云冬季網代守の
條照らし合せ見るへし

衣食

菊の酒

九月九日菊酒を飲み茱萸を袋に盛りて帶ひ高きに登れは災
厄を免るゝとそ是汝南の桓景か故事に起因す

栗祝ふ（燒茹栗栗）

九月九日節句の嘉儀として栗を祝ふ

葡萄酒

葡萄の實を以て酒を造る

温酒

九月九日は寒温のさかひなり今日より酒を温めて飲用す

柚味噌

柚の肉を去り味噌を入れて蒸せは香氣よ〳〵美味なり尙製し方さま〳〵あり

橡餅

栗より大きし餅に作て食す九月橡の實の條照らし見るへし

新そは

そは苅は冬なれとも其早きを賞味す

黄柿

澁柿を二三日石灰又は蕎麥殼に浸し置けは味甘く變するなり

甘干

澁柿を糸にて繫きて干せは味甘美となる

九日小袖

菊襲九月九日縹色の小袖を着すこれを九日小袖と云

紅葉衣

表蘇方裏黄

新綿

今年の木わたを云

鱧子

鱧子は赤鰡の子なり

神釋

野々宮別

古昔伊勢の齊宮は山城椿原にあり此所嵯峨野故野の宮と云内親王齊宮に籠り物忌給ひて伊勢神宮へ旅立給ふ此時御暇乞として參内あり天皇御手つから由豆の爪櫛を齊宮の御頭へさし給ふ是を野の宮の別れと申すなり

山口祭

九月中巳午の日周防仁壁の神社祭禮

北野芋茎神輿

北野天神祭は八月なれとも中絶せり九月廿三日氏地より芋茎御輿とて菜菓を以て神輿を作り渡御のまねひをなす

桂の宮相撲

九月八日京都六條の北桂の宮に催るゝ相撲なり

泉涌寺（舍利會）

洛の泉涌寺舍利殿にて毎年九月八日舍利會を行ふ音樂あり

貴船祭

九月九日山城貴船神社祭禮

鞍馬祭

九月九日鞍馬由岐の社祭禮

御香の宮祭

九月九日山城伏見京町の東御香の宮祭禮

生玉祭　九月九日大阪生國魂神社祭禮

醍醐祭　九月九日山城醍醐祭能樂あり

四の宮祭　九月十日江州大津四の宮祭禮

下鳥羽祭　九月十日山城下鳥羽午頭天皇祭禮

五條天神祭　九月十日祭る神少彦名命なり京都の俗天使の社とも云

金山祭　九月十日諸國金銀銅山の山神を祭るを云

太秦牛祭　九月十二日京都太秦廣隆寺にて牛祭執行あり寺中の行者紙衣を着牛に乘り祭文を讀む此祭文懺悔の詞にして甚奇なり昔慈覺大師唐より歸朝の時摩多羅神に順風を祈られしに起因す　祭文の寫編者藏す

御難餅　九月十二日蓮上人相州鎌倉龍の口にて厄難あり白刃の下僅に一命を全ふせらる今月像前に供する餅を云

白川祭　九月十三日洛北白川の里天滿宮祭禮

相撲會　住吉升の市寶の市　九月十三日攝州住吉神社神輿渡御社内にて相撲あり古昔神前へ黃金の升に稻を奉りしに依り農家に用ふる升を賣る升市寶の市是なり

神田祭　九月十五日東都湯島神田明神祭禮引山練物を出して甚賑し

岩倉祭　九月十五日洛北長谷村の西岩倉にある八所明神社祭禮なり

小倉祭　九月十五日豐前到津の社祭禮

河内一宮祭　九月十五日河内牧方村牛頭天皇祭禮

岡崎祭　九月十五日洛東岡崎東天王祭禮

度會新嘗會　伊勢両宮へ内裏より初稻を奉らる外宮は九月十六日内宮は仝十七日なり

桂川御祓　九月十六日なり伊勢の齊宮に立給ふ皇女九月十七日發途し給ふに依り前日桂川にて御祓を修す

伊勢御迂宮　伊勢神宮廿一年毎に造營替遷宮あり十五年目木引あり三年にして木引成り又三年間に造營終ると云

穴織祭　九月十七日池田綾羽大明神祭禮なり應神天皇卅七年百濟より吳の國の絹織女四人を召して織しめ給ひしなり今吳服と云ふは此起因による

津村祭　九月十七日大阪平野町御靈神社祭禮

吳服祭　九月十八日池田田圃中に祠あり事實は穴織に同し此所昔絹を織たる所とてくれはの里と云へり

城南神祭　九月廿日祭る神七社王城より南にある故城南宮と云

上難波祭　九月廿日大阪博勞町稻荷社祭禮

婆利女祭　九月廿日婆利女は京都室町の西にあり辨才天を祭る

八幡花の頭　九月廿日昔は山城八幡山の社僧花の頭を修せしを云弟子社僧の列に加はる時花臺を飾り酒宴を催す是を花の頭と稱す

座摩祭　九月廿二日大阪座摩神社祭禮

淀祭　九月廿二日城州淀小橋の東伊勢向の神社祭禮

大原秋志　九月廿三日丹後大原神社へ參詣して春さしに受たる石を納めて歸る是を秋さしと云三月神祇の部春さしの條照らし見るへし

逆髮祭　九月廿四日江州逢阪山蟬丸の社に合祀せる姉宮の祭禮なりと云

天滿流鏑馬　九月廿五日大阪天滿天神社流鏑馬あり

北山祭　九月廿七日洛北鹿苑寺の西南にある北山祭禮

鳴瀧祭　九月廿八日京都鳴瀧社祭禮京の俗是を五器洗ひ祭と云

住吉の神送　九月晦日攝州住吉御祓を修し出雲石と云ふ處にて出雲を遙拜す是を神送りと云

公事故事

重陽の宴　九月九日は九の數陽に叶ふ故節會行はれしを云群臣に菊酒を賜ひしなり

例幣　例幣とは伊勢太神宮へ御幣を奉らせ給ふ毎年の事なれは例幣と云

虫撰　昔は殿上人嵯峨野あたりに逍遙して虫を撰み給ひしを云

不堪田奏　諸國凶年田の損亡したるを目錄にして奉る爲に租稅の幾分を免し給ふことあり作るに堪へさる田を奏すと云ふ事なり

御灯

三月九月の両度昔北山の高き峰に火を灯し北斗星に奉られし由公事根元に見ゆ

勸學會

春秋両度に行はれしなり京都二條の北壬生の西今の雀の森其跡なりと云

肩抜鹿

神代には鹿の肩骨を抜き波々加木を取て占ひに用ひられし由古事記に見えたり

高登

佩茱萸

九月九日菊酒を飲み茱萸を袋に盛りて帶ひて高きに登れは災厄を免るゝとそ

秋終

冬異名

玄上三九清

英天冬冬冬

玄英は爾雅の註に氣黑くして清英なりと云へり

上天は天氣上騰の意なり

三冬は冬三月なり

九冬は冬を玄冬九冬と云

清冬は皮日休か詩に冬を清冬と作れり

冬之部

十月

乾坤

神無月

孟上開玄しくれ月初霜月

冬冬冬冬冬

神無月には諸説多し貝原益軒翁の説に十月は純陰にて陽無し神は陽を司る故陽無月の事にて出雲へ神の集るなとは跡方なき俗説なりと云へりさもありぬへし然れとも風雅の上には此論に不拘神なき心をよむ方趣味あらん

孟冬はしめの冬なり

上冬も右に同し

開冬は冬の小口と云ふこと

玄冬も同しくはしめの冬なり

しくれ月は時雨しは〳〵ある故なり

初霜月は霜降初る月なれはなり

立冬　立冬の節を云初五日水初て氷り後五日地はしめて氷ると云

小春　十月は天候和暖春に似たり故に云

小六月　小春の暖和を暑氣に比して云

答る鐘　寒威凜として鐘聲の身に答るを云

下元　十月十五日を下元と云三元の一なり一月乾坤の部上元の條に詳解せり

亥の子　玄猪　猪は多子なるものにて毎年十二子を生む故に婦人あやかりて餅を供して神を祈る

時雨　液雨　初時雨　夕時雨　小夜時雨　晝夜分ちなく時々急雨あり液雨と云ふは立冬後十日を入液と云ひ小雪の節を出液と云ふ百虫之れを飲て皆蟄伏すと云へり

木枯　諸木の葉を吹落す意にて木枯と云

初雪　初雪消る　初雪は積らぬさまを題の意とす故に消ると云ひても冬なり

初氷　初氷解る　立冬後五日を初氷の候とす

初霜　初霜消る　初て置霜なり別義なし

冬ざれ　風吹すさみ山野は勿論街衢に至る迄一様に寂れ行さまを云

冬籠　冬月寒威を厭ひて居室に籠るを云ひ又草木の精氣地中に籠るをも云

冬構　寒氣を防く爲風除なと設るを云

北窓塞　冬月寒風北方強し是を防く爲窓を閉つ

爐開　爐を開て寒を凌く茶人も爐開をなす

巨燵切る　亥の子の日を以て炬燵を明け初るなり

以下三月亘

雪　六花　飛瓊　玉塵　銀樟　六出　六霙　異名なり

霜　霜は裘なり其氣慘毒にして物皆裘ふ

三つの花

○十月乾坤

氷　江沼湖澤を始總ての氷結を云

氷面鏡　氷張詰て鏡の如きを云

寒　寒き夜　寒き朝　寒き夜といへは夜寒にあらす　寒き朝といひて朝寒にあらす

つめたき　つめたきは寒の手足に答る義なり

冴る　月色鐘聲など總して物の冴るを云

冬の月　冴て凄氣あるさまを云

山眠　冬山慘淡をして眠るか如し

爐　すびつ　和名　炭櫃の略茶の湯にこれを用ゆ

塗爐縁　茶室十月より塗爐縁を用ゆ

巨燵　置炬燵　炬燵なき以前は物に腰をかけ足を煖めたるよしに云へり

埋火　爐中の火を保たしめんか爲埋めるを云

火桶　桐火桶　木をくり内部　眞鍮　銅　などを張りたるもの種々あり

火鉢　註に及はす

榾　木材の根又は節などを晝夜爐に焚て山家の寒を防く

手爐　火爐の小なるもの形ち種々あり

懷爐　銅を以て作りたる小爐なり藥灰に火を移し懷中して老人寒氣を凌く料とす

湯婆　大さ枕の如くにして小さき口あり製は多く陶器なり熱湯を盛り炬燵の代用となす

炭　炭は日向土佐等產地多し

炭竈　炭竈は山中炭を燒く竈なり

白炭　小枝を連ね燒たるもの白灰色なり細炭とも云切炭の間に交へて爐中の飾とす

炭團　粉炭を海鼈にて丸く堅めしもの

助炭　爐を覆ふ具なりこれを助炭と云

皸　俗赤切と云霜燒胼何れも凍傷なり

霜燒　同

胼　同

植物

落葉　落葉は地に布くさまも落るさまも題意なり

木の葉　木の葉とのみは落たる意なり吹ちるさまなと云て題となゝ

木の葉時雨　木の葉の一頻り宛時雨の如く吹散て窓なと打つを見立て云

木の葉雨　木の降るを見立たるなり

茶の花　花は白薔薇の如く實は梭欄に似たり

山茶花　花實ともに椿の如く葉は茶の葉に等し花紅白單八重種類多し

歸り花　冬月諸木或は草花の纔に開くを歸り花と云時候仲春に同しけれはなり忘れ咲とも云へり

朽葉　落葉の朽たるものを云

冬木の櫻　冬枯の櫻を云

冬櫻　小樹なり花葉とも彼岸櫻に似て冬月花を開く

松風の時雨　松風を時雨の音に聞なして云

室の梅　室の内或は土藏中に火爐を置煖むる時は火氣に感して開く

枯柳　葉盡く零落せしを云

枇杷の花　葉の形驢耳の如く毛あり冬月小花を開く

八ッ手花　葉楓の如くにして甚大なり白花を開き黑き實を結ふ

柊の花　五出細き白花を開く

榧の花　雄は花咲き雌は實のると云九月榧の部照らし見るへし

紅葉散　紅葉かつちるは秋にして散るは冬なり

冬牡丹　八月より葉出て十月花開く人巧の培養に依る

草枯る　諸草の枯るゝなり

枯尾花　尾花の枯たるなり

菊枯る　いつれも其ものゝ枯るゝを云

萩枯る　仝

葛枯る　仝

荻枯る　仝

枯蘆　仝

ゆきの下　虎耳草と書く花は四月なれとも雪の下といふ名によりて冬とす

石蕗の花　莖葉蕗に似て厚く光澤ありて枯れす冬月黄花を開く

麥蒔　十月種を下し早春芽を發す

蕎麥苅　新そはを秋とし苅るを冬とす

蕪　江州に産するもの最も大きし霜を得て生育よし

大根引　凡十月を引順とす

以下三月亘

冬木立　冬木立は悉く葉の脱落したるを云

水仙　花單千葉あり一重のもの勝る花白く心黄なり

寒菊　冬菊を寒菊と云京師に培養するもの最もよし其葉紅に照りて茶人殊に賞す

枯野　千草の枯たる野を云

朽野　冬野の枯たるを云

葱　根深　一文字　和名　紀といふより一文字の名あり

胡蘿蔔　元の時代胡地より始て舶來す形容蘿蔔に似たる故に云

生類

さゝ啼　さゝは少しの義鶯の子の啼初るを云

氷魚　形ち白魚に似て白魚より潔白なり江州の名産とす

鱈　夏月全くなし故に鱈の字に作る生魚は佳味なれとも多く塩物とし又は乾燥して北海道より出す

鮭　うるめは鰯の類ひなり目大にして潤ふ故此名ありと

鮒　イサヽ江湖の産魚なり大さ壹寸又寸に滿さるもあり口大にして尾細し腥くして佳味ならす

河豚　豚は猪の小さきもの其性よく怒る魚中鰒よく怒る故に河豚の稱あり味旨きを以西施乳と云多く味噌汁にして食す

牡蛎　海中の石に附て生す潮水の來る毎に貝皆口を開く藝州に産するもの最佳味なり

生海鼠　骨鱗尾鰭なく青黄色なり奥州金花山の海邊より出るもの金色を帶ふ故に金海鼠と云このわたは生海鼠の傷を醢とせしものなり

水鳥　水鳥は鴨鷗等水禽の總名なり浮なから眠るを浮寢鳥と云

浮寢鳥

鴨　眞鴨　黑鴨　鈴鴨　羽白鴨　沉鳧　鴨は江海の沙上に在て沙石を食ふと云鴈より後に來りて春は鴈より先に歸る

千鳥　浦千鳥　濱千鳥　川千鳥　江海に在て百千群をなす鷗より小にして鵠鴒に似たり寒夜水上に啼く

鴛鴦　をしの劔羽其羽色五彩あり八のよく知る處なり脊の小さき羽を俗に劔羽と云雌雄相愛して離れす他鳥に異なり

鴛鴦の沓　鴛鴦の雌雄並ひたる姿沓に似たるを見立て云

木兎　大さ兄鵂の如く首眼共に猫に似て又老たる兎の如し故に木兎と云

鶺鴒　俗三十三才の字を用ゆ形ち黄雀に似たり灰色にして斑あり人家の庇を傳ひ又は庭前の垣根を潛り來去忙しき性癖あり

夜興引　冬夜山中にて獸を狩に犬を引く獵師是をヨコ引と云狸狩を主とす

柴漬　柴を束ねその内に餌を入れ氷底に沈め置けは魚集る下に掬ひ網を入れて引上て取るフシツケと云

竹瓮　小籠の如きものなり江河の底に沈めて魚を取る具なり沈む時は口開き引上る時は口閉るやう仕掛しものなり

網代守（あしろ木）　網代は杭を並へ打て網の代りとなし魚を取る柵なり城州宇治江州田上なとに氷魚を取る爲に設く網代守は守る人なり

衣食

亥の子餅　十月乾坤玄猪の部に註す

口切　此月茶會を催し壺の口切をなす

干菜釣　大根蕪の葉莖を軒下に掛け陰干になす

切干　大根を糸の如く切筵に廣け乾かすを云

莖菜漬（莖大根）　蕪大根に塩麹を和して收藏す

以下三月亘

鰒汁　十月生類の部河豚の條に註す

塩鱈　十月生類の部鱈の條に註す

このわた　生海鼠の腸なり醞として酒家賞味す

貝焼（すき鍋焼）　冬月貝を鍋として魚肉等を焚なから食すすき焼鍋焼も異ならす

納豆　納豆は僧家にて多く用ゆ納所より納豆の名ありとそは粉を熱湯に和して用ゆ寒を防くの料なり

蕎麥湯　

風呂吹　蒸風呂に入れは身に息を吹て垢を落すこれを風呂吹と云大根なとを蒸して湯氣立もの息を吹て食ふさま似たる故風呂吹と云

頭巾　袖頭巾　御高祖頭巾　丸頭巾　角頭巾　種々あり袖頭巾御高祖頭巾同物なり高祖日蓮上人の冠り物より思ひ付し形ちなりと云

足袋　絹　木綿　革　種々あり
單皮より起りし名なりと云へり

紙衣　厚き紙を纖澁をぬり日に乾しもみ和らけ衣服にして上着とし寒を防く

綿入布子　綿の入りたる衣類なり

綿帽子　婦人頭に戴て寒防の具とす
往々婚禮の綿帽子に云ひなしたる句あれとも婚儀は極めて冬に限らされは不可なりと思へり

蒲團　昔は蒲の穂にて作りし故蒲の字を用ゆ

衾　古衾　厚衾　小衾　紙衾
衾は寢具なり寒夜に引かさねても寒氣透るよしを云ひ又厚ふすまを重ねて寒夜を忘れしよし歌によめり

鴛鴦の衾　鴛鴦を縫物したる衾をも云又雌雄翅を交へ臥したるをも云

神釋

神送　此月諸神出雲國大社に集り男女の縁を結ひ給ふより神送り

神の旅　神の留守と云

神の留主

大社神事　十月中の亥出雲杵築村大巳貴尊社殿に於て神事あり是を神集めと云

神集め

御取越　一向宗門の徒此月親鸞上人の忌を修す忌日は十一月なる故御取越と云

達广忌　十月五日達摩大師忌日なり大小禪刹悉く之を修す

金毘羅祭　讃州象頭山に鎮座あり御神事は八月晦日より十月十一日に終る十月十日祭詣殊に多し

興福寺法華會　十月六日南都興福寺に於て修す

聖一忌　十月七日京都惠日山東福寺開山聖一國師の忌日なり建仁二年十月十五日に生れ弘安三年今日寂せらる

維广會　十月十日より同十六日迄維摩居士忌日南都興福寺に於て行はる社稷安穩の爲弘誓を發して此會を開くと云

芭蕉忌　俳諧正風の開祖芭蕉庵桃青翁の忌日なり翁は伊賀の藩士俗稱松尾忠右衛門遁世の後奥州より北國を遊歷し西國へ曳杖の途次元祿七年十月十二日五十一歳にて大阪南久太郎町花屋仁左衛門の裏座敷にて歿せらる遺骸は遺言に依り江州義仲寺に葬る

御命講　御影供　御會式
十月十三日日蓮上人忌日なり春弘法大師御影供に紛るゝ故御命講と云

十夜　十月五日より同十五日迄淨土宗の諸寺にて會式を勤るを云善を修する事十日十夜なれはなり

戎講　誓文拂　戎裂
十月廿日此日商家一般の祝日とす戎を祭り酒宴を催し客を招く中にも吳服店は格別賑しくなす商人常に欺き賣る罪を拂ふとて誓文拂と唱へ物品代價の幾分を減して商ふ

神迎　十月一日神送りをなし十月卅日神迎をなす

公事故事

更衣　十月一日內裏に御更衣あり夏の御裝束を撤して冬の衣に更め給ふとそ

殘菊の宴　十月五日殘菊の宴とて群臣に酒を賜ふ

拜墳　十月朔日禁中の車馬陵に朝す是を拜墳と云

射馬始　十月三日朔を作り天子弓場殿へ出御群臣と等しく弓を射給ふよし公事根元に見ゑたり

十一月　乾坤

霜月　仲冬月　復月　暢月　辜月　一陽月　雪月　神樂月
霜月は霜降月を略せしなり
中冬は冬最中なり
復月は一陽來復する故なり
暢月は陽久しく屈して後暢る故なり
辜月は克なり一陽來復して萬物よく克る義なり
一陽は一陽來復すれはなり
雪見月神樂月註に及はす

冬至　大雪の節より十五日の後にして一陽來復なすなり大陽南に至り短日の極故冬至と云

暦賣　明年の暦を賣るを云

髮置　十一月衣食の部被初の條に註す

芝居顏見世　顏見世は夜中の興行にして俳優一座素面社祢或は羽織袴にて挨拶を述ふ贔屓より酒樽米俵等贈物夥しくありて場中も頗賑し

子燈心　十一月子の日大黒天に詣て燈心を受來れは大に福ありと云へり

深雪　北越等の國々積雪丈餘に及ふを云

吹雪　雪風相交るをふゝきと云

雪しまき　しまきは雪に風の添たるを云吹雪に等しきもの

雪起し　北國にて雪降らんとする時雷聲あり雪起しと云へり

雪女　深山雪中稀に女の姿容を現す是を雪女と云へり雪の精ならんか

雪垣　雪國にては十月初より用意して人家の軒に丸太材を立掛簀を編み付て垣とす積雪中隣家への通路とす

雪竿　積雪中深淺を量る竿なり或は深雪には物のしるしに立置くとも云

雪礫　小石の如く雪を握り堅め投あふ戯れに用ゆ

霙　霙は雨霰相交りて降るを云

綱貫　牛皮を以て造り履底に鐵釘を打し物なり雪沓と云も是なり

雪沓　雪車は舟と車を兼たる如く作りし物にて雪國諸物運搬第一の用具なり旅人を便乘せしめて路次の困苦を助く雪車唄といふは樵歌に等しきものなり

雪車

橇　竪一尺二三寸横七寸餘の木の枝にて作る雪の和らかなる處へ踏込ぬ爲に用ゆ

霰　霰は半陰半晴の空に降頻りて歇むも早し

凍　土中凛寒の爲凍結なすを云

氷柱　落る雫の垂れ氷り柱の如を云垂氷は垂れる水の氷りしもの

霜柱　霜深き時谷陰又は野邊などに土高く盛り上りて柱の如きものを云

露氷　露氷ると云ひて冬とす

霜氷　霜凛寒に氷るを云

鐘氷　玄冬鐘の音響冴々として氷る如きを云

植物

冬至梅　單葉中花にして花八重淺紅なり

深山樒　深山背陰の地に多く生す冬を凌て凋ます冬五出の細花を開く

新生蒌　生蒌の出初たるもの

生類

暖め鳥　鵂とも云隼の雄なり此鳥寒夜には已れか足の冷るを憂へ小鳥抔を掴みなから梢に眠る翌朝此鳥を食はすして放ち遣る其飛行し方へ其日喪りに行す是天性の義氣なるへし

寒苦鳥　印度大雪山に鳥あり此鳥夜中寒を苦みて鳴と云

杜父魚　形ち鯔に似て丸みあり此魚霰の降る時には腹を上にして流るゝと云へり一名カクフツと云

鯨　肥前　五島　平戸　呼子　紀州熊野浦にて仲冬より盛に之を捕ふ鯨をさすものを鉸と云漁舟の進退海戰に等しく壯觀なり

仲冬長して三四尺塩鰤最も味あり出世魚なれは歳末貴賤相贈りて嘉儀とす

鰤

以下三月亘

鷹　和名　かし鳥　なら柴鳥　かしこ鳥　鵰　鶻　鷂　隼　鳩　種類多し

鷹狩　鷹野　鷹匠　小鷹を遣ひ小鳥を取るは秋なり　大鷹を遣ひ大鳥を取るは冬なり

追鳥狩　追鳥狩は雉子狩なり田野に群居る諸鳥を追立て狩るなり

鳥叫　鷹を狩る人の聲を立鳥を追立るを云

偸立鳥　ぬすたつ鳥はぬすみ立なり鷹に恐れて草などにかくれたる鳥のひそかに立を云

落草　鷹の鳥を追落したる處を落草と云

教艸　鷹落草の上羽を引て落鳥を知らすを教艸と云

力草　鷹鳥を捕へ片足に草を掴み飛立せぬなり

列卒繩　鷹匠に從ふ卒をセコと云ひ田野の諸鳥などを追立る繩を列卒繩と云

狩杖　狩犬を引くものゝ杖を云犬を戒むる爲に持なり

衣食

袴着　袴着は男子五歳髮置は三歳なり

被初　被初紐直しは女子五歳或は七歳なり氏神へ參詣なすを例式とす

霰酒　南都の產なり酒中霰に似たる糟ありみそれ酒とも云

鷄卵酒（みそれ酒）　酒を煖め鷄卵を混和し砂糖を加味す是寒氣を凌く料なり

生萋酒　温酒に摺生萋を絞りたるもの

神釋

相嘗祭　十一月上の卯相嘗と云ふは神々相共にきこしめさるゝ義にてアイムへと讀む今日勅ありて住吉熊野熱田廣田等大社を祭り其國の國司に命して官倉より神前へ米を供しさせ給ふ

甲子祭　大黑天を祭る十一月子の日商家鼠の子の蕃殖に比して繁昌を祈る

宗像祭　十一月上の卯筑前宗像郡宗像神社祭禮

三島酉の市　十一月中酉の日伊豆三島大山祇命祭禮諸國商人來りて物を商ふ是を酉の市と云能因法師雨乞の歌を當社へ奉りしことありと云へり

日吉臨時祭　十一月中の申近江日吉神社祭禮なり此祭は建暦三年勅使を立られ臨時に行はれたるより始る

空也忌　十一月十三日なり空也堂は京都四條坊門堀川にあり極樂院と云今日踊念佛あり

鉢叩　空也堂の僧十一月十三日より四十八日間洛中洛外の火葬場を巡り瓢簞を叩いて高聲に念佛和讃等を唱ふ昔は鐵鉢を叩きたるより鉢叩の名ありと

道陸神祭　十一月十六日なり俗に泥くしり祭と云ふ天王寺合邦か辻に小さき石佛あり此顏に米の粉をぬり供物を盛る祭の二三日前より村童往來の人に錢を乞ふ與へされば泥を塗たる繩を以て往來を遮る堺の魚荷飛脚は故ありて妨けす

大師講

智恵粥

十一月廿一日より仝廿四日に至る天臺宗の祖唐の智者大師の忌日なり諸寺に大師講を修す民間小豆粥に枯柴を折て箸とす是を智恵の粥と云

春日御祭獸改

春日御祭に贄とする鳥獸雉子兎狸等十一月廿一日より仝廿五日迄神官の改むるを云

春日御祭

鳥掛

日の使

後日の能

十一月廿七日春日若宮祭鳥獸を贄とす是を鳥掛と云若宮の御旅所は社殿なく芝原なり今日假の御殿を營み渡御あり昔關白殿下より騎馬の伶人を遣はされしを日の使と云祭禮翌日能樂あり是を後日の能と云

報恩講

御霜日

御佛事 十一月廿二日より廿八日迄親鸞上人の忌日なり東西本願寺に於て修す又御霜月とも御講とも云

東三條御神樂

東三條の御神樂は重明親王の御邸宅其邊り両社の神に奉らせ給ひしなり

神樂

里神樂 天照皇太神岩戸開きの古事に起る神樂は禁中内待所にて行はる里神樂は禁裡の外各神社にて行はるゝを云

神樂歌

千歳 早歌 吉々利々 星得錢子 木綿作 畫目 弓立 朝倉 其駒何れも神樂謠ひ物の名あり

阿知女

鈿女を阿知女と云ふにや天鈿命岩戸の前に俳優をなし侍るを今の世にアチの作法と云ふとそ

採物歌

是は神樂を舞ふ人榊幣弓葛などを手に持て其手に採る物のことを歌に作りて謠ふ故に採物歌と云

大前張

小前張

大前張小前張は何れも催馬樂の謠ひ物の名なり大前張の歌七首小前張の歌九首あり

韓神

謠ひ物あり韓神とは宮内省に祭れる二座を申すよし梁塵抄に見ゆ

庭燎

神樂の時燒火を云

御火燒

此月所々の神社にて火を燒湯を奉る是庭燎の餘風なりと

公事故事

暦の奏

十一月朔日中務省より明年の暦を奉る

五節帳臺の試

十一月中の丑五節帳臺の試は天子帳臺に出御なりて御直衣御指貫にて御沓を召さる舞姫五人亂舞大歌小歌なと云ふ事あり淸見原天皇吉野の宮にて琴を彈き給ひし時天女曲に應して五度袖を返したるより五節の舞と名つけしと云

童女御覽　淵醉は同月中の寅五節果て公卿朗詠今様なと謠ひ亂舞あり
淵醉は深く酒に醉ふと云ふ事なり
狩の使　同日五節所に賜はる雉子を交野へ狩に遣さるゝを狩の使と云

新嘗會　新暦十一月廿三日其年の新穀初穗を神に奉らせ給ふなり御代始には大嘗會と云ひ年毎にあるを新嘗會と云

豊明節會　前日の新嘗會に神に供せられたる新穀を今日天皇きこしめし臣下にも賜ふ故行はるゝ節會なり

小忌衣　小忌衣は大嘗會豊の明に用ひらるゝもの單にして狩衣と同し寸法なりと云

日陰鬘　日陰かつらは日の光を隔つ料として冠に垂るゝを云日陰の糸は近代鬘の代りに白糸青糸を組て垂ると云へり

日陰の糸

鎮靈祭　十一月中の寅人の魂魄のうかるゝを招きて其身の内にしつましむる爲行はるゝ祭なり此神八座宮内省にありしを秀吉公の時吉田山に移せしと云

十二月　乾坤

乙月　物の初を甲と云ひ末を乙と云ふ月の終なれはなり

季冬　季冬はする〻の冬なり

涂月　涂月は十二月を涂とする故なり

急景　急景は氣色の短くせはしきなり

窮節　窮節は節のきはまり盡るなり

二陽　二陽は二陽生する月なれはなり

かきり月　かきり月春待月註に及はす

春待月

乙子朔日　一年中朔日の終なり俗に乙子の朔日と云ふ未子を乙子と稱するを以て今日餅を食ふ是を食へは水難なしと

小寒　十二月節を小寒と云

寒の入　小寒節を寒の入と云

大寒　小寒節より十六日目を大寒節とす

寒聲　歌曲を業とし又遊へる者なと寒中朝暮大に聲を發して練習なすを云

寒曝　穀物等の類を寒水に浸し陰干になすを寒さらしと云

寒月　寒月は烈風中に皎々たるさまを題意とす

臘日　冬至の後三の戌を臘日と云

植物

蠟梅　蠟梅は花の形ち香も亦梅に近し色蜜蠟に似たる故此名あり

寒梅　寒紅梅と云花小にして八重なり

早咲梅椿　梅椿の両種特に早く咲出るもの茶人殊に賞す

探梅　早梅を尋ねて郊外に杖を曳く是を梅探りと云

寒筍　孟宗の古事より冬月出る筍を云

生類

箕和田鯉摑　常州箕和田の漁人寒中流れに沈み鯉魚を抱き捕るを云

八ッ目鰻　北國の江澤にあり両眼の側に各七点錐の穴に似たるものあり目と共に八數なる故名つけて云

鵲始て巣ふ　十二月鵲始て巣を作る來歳風あるを知れは巣を低くすと云

衣食

乙子餅　乙子朔日の條に註す

藥食　鹿猪牛の肉類を烹て寒中の滋養に食す

鯛味噌　鯛味噌は肉と味噌とを酒にて煮熟したるものを云

氷鮒　煮て凝たる鮒を云

寒造酒　酒を寒中に釀せは年を經るとも變味せすと云

豆腐蒟蒻氷らす　豆腐蒟蒻を嚴寒に凍氷せしむるを云

粥施行　極寒の候乞丐又は貧窮者の困苦を憐み粥を焚施行をなすを云

神釋

寒垢離　修驗の徒寒中道路橋上等に水を浴ひるを寒垢離と云是寒中の水行なり

寒念佛　寒三十日曉天に及ひ山野又は三昧を巡りて鉦を鳴らし念佛を唱ふを云

御國忌　十二月三日天智天皇御忌日なり昔は江州崇福寺にて行はれしを中世三井寺に移されたり中興の御主に渡らせ給へは御國忌と申せは此君の御事なり

臘八
臘八粥
十二月八日は釋尊成道の日なり寺院にて昆布大根等の五味粥を設く是を臘八粥と云

最法寺灌頂
十二月十五日京都二條の西最勝寺にて行はれたりしか今は絶えたり

御佛名
十二月十九日より仝廿一日迄禁裡にて行はる仁壽殿の御本尊を移して佛前に香華を供し地獄の繪の御屏風を建佛名を唱ふ終て各殿上人の名を名乘る是を名對面と云ふ被綿は佛名の導師並衆僧に賜ふ藏人悉く僧の肩に掛けると云

大德寺開山忌
十二月廿二日山城紫野大德寺開山大燈國師の忌日なり

齊宮繪馬掛
十二月卅日伊勢齊宮村の森に祠あり諸人詣て繪馬を掛る其毛色を見て來年農業の豐凶を占ふとそ

和布苅神事
十二月晦日豐前早鞆の社にあり今夜丑の刻社人帶釼して鎌炬火を持ち海底に入る潮水左右に開き干る此時和布を一鎌苅て神前に供す是を和布苅の神事と云

公事故事

被綿
十二月神釋之部御佛名の條に悉しく註す

御髮止
十二月吉日を選み御髮上け行はる藏人御髮の梳屑を主殿寮に向て燒なり昔は午の日を用ひられしと云へり

荷前の使
ノサキノツカヒとよむ十二月十三日諸國より献せる御調の稻を十陵八墓へ奉らせ給ふ使を云

追儺
鬼やらひ　節分の夜舍人寮鬼を勤む上卿以下これを追ふ殿上人御殿の方に立桃の弓蘆の矢にて射る

歲暮之部

師走
師とは僧の事なり此月は古へ僧を迎へて佛名を唱ふ今の柵經に同し僧の走り巡る月なれは斯云ふとそ又一說にとしはつ月を略してしはすとも云へり

事始
今日より新年を迎ふる準備を始む

節季候
年末笠の上に齒朶を挾み赤き布を以て面を覆ひ二人三人相共に人家の軒に來り歌をうたひ踊の手振なとして米錢を乞ふ

煤掃
迎年の支度勿論なり內裏の御煤取は陽成院の御時より始まれりと云

餅搗（餅筵花）　新年を迎ふる第一の準備なり餅筵は餅を並ふるに用ゆ餅花は註に及はす

米洗（餅餅）　餅搗に用ゆる糯米を洗ふを云一説に新年三ヶ日心長閑に樂しまんか爲米など卅日に洗ひ貯へ置とも云へり

節分　浴に年越と云年齡に應して人々煎豆を祝ひ氏神又は恵方の神社に詣す

豆はやし　節分の夜鬼を遣ろふ心にて室内戸口に豆を撒くを云

厄拂　節分の夜綿布にて面を覆ひ悪魔を退かしむる語を述て年の豆の紙包を受る

厄落し　厄年にあたりし人犢鼻褌などを道路に落す是を厄落しと云

柊（柊鰯）さす　節分鰯の頭と共に門戸の上にさして鬼をやろふの戒とす

貘枕（さうりすり）　節分の夜貘と云ふ獸の形ちを畫きて枕に敷けは悪夢を見すとそ貘は夢を食ふ獸と云へり

年忘　年末親戚朋友なとゝ會飲を催す是年中の勞を忘るゝ意なり

年の市　注連繩類をはしめ新年に用ゆる諸物を賣る

神折敷賣　何れも新年の支度に充て賣來るを云

楪葉賣　仝

榧勝栗賣　仝

葉竹賣　仝

飾松賣　仝

門松營　年末門戸の松飾を營むを云

年取物　迎年の支度を整ふるを云

年木（年木）樵　新年に用ゆるところの薪を年内に樵置くこれを年木と云

衣配　年の始の料として親しき人々へ衣を贈るを云

年内立春　陰暦には年内立春の年ありし故なり冬の春とも云

吉田御祓　節分京都卜部家吉田の齊場内陣にて祓を修す一月十九日清祓に同し

大原さこ寝　山城大原江文明神の祠へ節分の夜里の男女一所に集り臥すこれを雑喉寝と云昔蛇井出村大淵といふ池に大蛇住みて人を取らんとせし時男女一所に集り臥して隱れたるをさこ寝の起因とするよし云へり

内待所神樂　節分内待所に庭燎を焚本末の座を二行に設け天皇行幸あり官人鈴を奉る是神樂を奏する義なりと

五條天神詣　おけら火　勝の餅　祭る神大巳貴命なり節分の夜京師の人叅詣多し白木を買て是を自家に焚けは邪氣を拂ふと云賣る處の小餅を勝の餅と云小と勝同音なるゆへなれはなり一説社傍にある勝軍地藏に供する餅ゆへ勝の字ありとも云

古暦　新暦を對して古暦と云

暦卷納　暦日の終りしを云

卷果る暦　仝

右に卷暦　仝

札納　年中受たる處の諸神の札を神社に納むるを云

春待　新春の來るを待意なり

春近　題の字義にて別意なし

春隣　仝

星佛賣　十二月十三日來年の屬星の形ちを彫て賣るを云昔は在家僧を招きてこれを祭りし故なりと云

年籠　大晦日の夜神社佛閣へ籠ることなり伊勢熊野京都にては祇園清水愛宕なとへ籠るを云

年の暮　何れも年末の意義に異ならす

行年　仝

年の果　仝

年の終　仝

年の尾　仝

去る年　仝
流るゝ年　仝
惜む年　仝
年満　仝
年の湊　仝
年仕舞　仝
年の別れ　仝
年の名残　仝

小晦日　大晦日の前日を小晦日と云

大晦日　年中の終故大晦日と云

掛乞　都會の地は取引頻繁故二ヶ月を節季拂とすれとも他地方には七月十二月を支拂勘定の期とす十二月は殊に大節季なれは季となれり

掛取

暮の魂祭　盆暮両度魂棚を設け精靈を祭りしを云

岡見　大晦日の夜高き岡に登り簑を逆に着て遙に我住む方を望めは明年あるべき吉凶の事見ゆるなりと

千葉笑　十二月晦日下總千葉寺に衆人集り其年中村政に依帖の沙汰なとあれは其局にあたる人々を互に謗りて笑ひ合し事ありしを云

除夜　新を以て舊に易るを除と云ふ年の盡期を除夜と云

大年　元日を小歳と云ふに對し大年と云

年の夜　又一説年の果ゆへ大の字を添ゆるとも云へり年の夜は大年の夜のこと

年守　年守は大年の夜を守り明す意なり

冬終

明治四十二年六月廿六日印刷
明治四十二年七月一日發行

定價一冊金六拾錢

大阪市東區內淡路町二丁目五番地
編纂者 兼發行者 山田重五郎
俳號 馬田江公年

大阪市北區樋之上町拾番地
印刷者 井口岩吉

大阪市北區浪花橋北詰
印刷所 井口青雲堂
電話東二八三二番

大阪市東區內淡路町二丁目五番地
發行所 松翠社

不許複製

慶應義塾図書館

正誤

題之部

二四丁八行目	鳥祭は鳥祭	三五丁十五行目	孟夏は孟夏
四九丁九行目	あふらはあふち	六〇丁三行目	眠皮は眼皮
七八丁八行目	刺蜻は刺鯖	一一二丁九行目	御霜日は御霜月

註釋之部

四丁三行目	一個の竈は籠	一九丁廿一行目	寶を結ふは實
二二丁廿五行目	池澤は池に	三二丁十七行目	ヤスラヒ於は花
四〇丁九行目	小竹の苟は筍	四六丁十九行目	勤むをはるの字脱
四六丁廿七行目	五香氷は水	六二丁六行目	茶壺の對は封
八五丁七行目	稗蒔のヒエはヒヘ	八六丁七行目	ツルレイシとも書くは苦瓜とも書くの顚倒
八六丁四行目	稻をはの	一〇二丁十一行目	霜の裘は裏
一〇三丁七行目	木の葉とのみは落たる意なりは意なし		

註釋中送り假名へをにうをふの類其他上下の文を指すには之の字を用ひ上に受けて下を定むるには是の字用ふへきを此意に反せしところありこれ等は一々正さす見る人諒せられよ